アカデミックハザード　－　長井の物語　１

破綻

長井信吾はつくづく思った。

「徹夜の土木作業は、三十五を過ぎた体には堪えるな」

しかし、徹夜の作業の方が時間単価がはるかに高い。

現場では、長井よりも年上の作業員も多いが、長年やっているひとたちなので実に手慣れている。動きに無駄がないのだ。高校を出たばかりの若者もいるが、こちらは体力にものを言わせている。長井は、あきらかに自分がまわりから浮いていることが分かっていた。現場監督からも目をつけられているようだ。

なにしろ、長井はいままでペンを持つ仕事で生きてきたので、土木作業などやったことがない。

最近、景気が回復しだしたせいか、いろいろなところで道路工事が進められている。猫の手も借りたい。そんな状況だから、なんとか長井でも務まるのである。

無駄な公共工事に対する非難が集まり、必要のない道路は前ほどつくらなくなったが、日本には、まだまだ整備されていない道もたくさんある。

小さい子供の親になってみると、街の中は、危険な箇所だらけだ。

「その整備にお金をかければよいのにな」

と、長井はずっと思っていた。

いままでは、既得権益を守ろうとする従来型政治家が日本を支配してきた。このため、本来整備すべき道路ではなく、金儲けのためだけに道路づくりが利用されてきた。

ところが最近、改革派が政府の実権を握った。そのおかげか、徐々にではあるが、行政もようやく、使うべきところに金を使い出したようにも見える。

しかし、いまだに改革が進んでいない世界がある。それが学問の世界だ。日本では、一部の人間に権力が集中している。そして、その連中は、自分たちの権益を守ることだけに奔走している。自分は、その餌食になってしまった。うっすらと明ける空を見上げながら、長井は家路についた。

帰宅すると、玄関のドアには鍵がかかっていた。朝の七時だから、妻の由美子は朝食を用意して待っているはずである。疲れて、まだ寝ているのだろうか。最近は、由美子もパートに出かけていた。娘の洋子がまだ小さいので、その世話が大変であるが、家計を支えるためには、仕方がなかった。

長井が玄関の鍵を開けて

「ただいま」

と声をかけたが、家の中は静かだった。

いつもなら、玄関のドアが開く音を聞きつけると、喜んでかけてくる娘の洋子なのだが、うんともすんとも反応がない。どうやら、由美子と洋子は留守のようだ。長井は少しいやな予感がした。

食堂に入ると、冷えた料理がテーブルの上に置いてある。白いメモが目に入った。

「朝食は用意しました。味噌汁は自分で温めて食べてください。わたしは、洋子を連れてしばらく実家に帰ります」

と書いてある。

ついに、この時が来たか。いずれ、妻の由美子がこの家を出て行くことは覚悟していたが、こんなにはやいとは思わなかった。自分に甲斐性がないからとはいえ、どうして、こんな目にあうのだろうと長井は思った。

体は疲れていたが、食欲は沸かなかった。いつもなら、シャワーを浴びたあと、娘の洋子をひざの上に載せて、一緒に朝食を食べるのだが、娘のいない食卓はわびしかった。

長井は、ウィスキーの瓶を取り出すと、コップにそのまま注いだ。そして、いっきにあおった。胃がやけるように熱い。おいしいとは思わなかった。それでも、またウィスキーをコップに注いだ。はやく酔いたい。そんな気分だった。

どうしてこんなことになってしまったのだろう。すべて東都大学の白井大介のせいだ。あいつの罠に、まんまと嵌められてしまった。後悔してもはじまらないが、自分があまりにも迂闊だった。まさか、文化省までが悪に加担するとは思っていなかったのだ。

白井が日本学会賞を受賞するというニュースを知ったのは半年前である。その頃から、すでに、今回の罠が仕掛けられていたのだ。ウィスキーをあおるように飲みながら、テレビをつけた。朝のニュースが流れていた。すると、そこに、あの憎い白井の顔が出てきた。

「本日、東都大学教授の白井大介氏に日本学会賞の授与が行われました。白井氏は、数多くの分野で世界的な成果を挙げられており、世界的にも評価の高い研究者です。この受賞に対して、氏は、今回の受賞は自分ひとりのものではなく、自分に協力してくれた先輩や弟子たちのものでもあると謙虚に話しています」

長井は思った。何が謙虚なものか。あいつの成果は、すべて他人から盗んだものではないか。

「東都大学の東郷学長は、大学としても名誉なことなので、明日、大学が主催する盛大な祝賀会を開くと話しています」
やりきれない気分になって、さらにウィスキーをあおった。何杯、ウィスキーをあおっただろうか。気づくと、長井はいつのまにか眠っていた。
電話の呼び出し音で目が覚めた。一瞬、妻の由美子かと期待したが、電話は、今働いている工事現場の作業長からだった。
「長井さん、まだ家にいるの。今何時だと思っているの」
長井は、はっとして時計を見た。すでに午後十一時である。すっかり寝込んでしまったようだ。頭の芯が割れるようにいたい。
「すいません、うっかり寝込んでしまいました。今からすぐに出かけます」
「時間を守らない人間を雇う余裕は、うちにはないよ。もう辞めてもらいますからね」
そういうと荒々しく電話が切られた。もともと、現場監督は、長井をやめさせたいと思っていたに違いない。確かに足でまといであったのは確かだ。
　長井はため息をついた。
　これで、家族だけでなく、仕事も失ってしまった。長井は何もかも失ったことを悟った。体に悪いとは思ったが、長井は、またウィスキーをあおった。そして、そのままテーブルにうつぶせになって寝てしまった。

授賞式

　つぎの朝、目が覚めると、部屋はちらかったままであった。テーブルの上の朝食も、まったく手がつけられずに、そのまま放置されている。
　気づくと、冷蔵庫のドアが開いたままになっていた。何かを取り出そうとして、閉めるのを忘れたらしい。水でも飲みたかったのかもしれない。頭の芯に鈍痛があるだけでなく、胃がむかむかしていた。妻の由美子と娘の洋子の姿はもちろんなかった。
　すでに朝の八時をまわっている。テレビのスイッチをつけると朝のニュースが流れてきた。驚くことに、憎い白井の顔がふたたび現れた。日本学会賞受賞のことが報じられている。今日は、大学で祝賀会が開かれるという。白井自身による受賞記念講演会があるとアナウンサが言っている。
　「あんなやつの受賞を許してはいけない」
　長井は、ふと、そう思った。すると、居ても立ってもいられなくなり、長井は着替えもせずに、そのまま駅に向かった。東京行きの切符を買い、新幹線に乗った。とに

かく、白井の祝賀会場まで行くしかない。

東京駅で地下鉄に乗り換えた。東都大学の正門につくと、いきなり白いたて看板が目に入った。

「日本学会賞受賞記念講演会、東都大学工学部長　白井大介先生　研究にささげた我が半生」

となっている。この講演のタイトルを見たときに、長井は怒りが心頭に発した。何が「研究にささげた我が半生」だ。

本来は、他人をだまし、その成果を奪うことにあけくれた我が人生という方がふさわしい。

長井は、いったん大学の外に出て、目的の店を探した。ペンキを買いに出たのだ。赤いペンキの入った缶を抱えて、ふたたび大学に戻ると、講演会場までやって来た。そして､会場の入り口横に立てかけられた看板に思いっきり赤いペンキをぶちまけた。まわりに居た人たちが何事が起きたのかと長井のまわりを取り囲んだ。

長井は、その群集に向けてこう話した。

「みなさん聞いてください。白井は日本学会賞などを受賞するに値する人間ではありません。あいつに研究成果を盗まれて泣いている研究者は、たくさんいます。今回の受賞対象の研究成果のひとつもわたしのもので、だまし盗られたものです」

長井が演説を始めると、人が集まりだした。長井は、白井が自分に対して行った非道の数々を訴え続けた。

しばらくすると、大学の警備員らしいふたりがあわててかけてきた。そして、長井を押さえつけると、両腕を抱えるようにして、連行していった。

長井は、警察に連れて行かれると思ったが、連れていかれたのは、大学の本部棟にある狭い部屋であった。そこで、長井は、事務局長の赤西と呼ばれる人間から事情聴取を受けた。

長井は、かつて自分が地方大学の助教授であったときに、白井の姦計にあい、研究成果を横取りされたと訴えた。そして、今回の日本学会賞受賞の対象となっている成果のひとつにそれが入っている。だから、それが許せなかったと。

事務局長は、警備員と長井を残して、部屋を出て行った。どこかに報告しにいったようだ。それから、しばらくして部屋に戻ってくると、これ以上さわぎを起こさないならば、警察には突き出さずに、このまま解放するという。

長井は、看板にペンキを投げつけたことで、なぜか気力を失っていた。最初は、白井と刺し違えることも考えたが、何もかもが嫌になっていた。

「もう、これ以上何かをする気はない」
と答えると、そのまま黙って放り出された。
　しばらくは、警備員が長井の様子を見ていたが、すっかり憔悴した長井を見て、これならば安心と思ったのか、去っていってしまった。

希望
　長井は、構内にある池のほとりで、ひとりただずんでいた。いったい自分は何をやっているんだ。自分が情けなくなった。このまま電車に飛び込もうか。そんなことを考えていると、後ろから声をかけられた。
「もしかして、長井さんではありませんか」
振り返ると、すらっと背の高い女性が立っていた。
「あなたは、なぜ私の名前を知っているのですか」
長井は、不思議に思った。そして、すぐに、もしかしたら白井の回し者かもしれないと疑った。
「驚かれたでしょうが、実は、私も白井に被害をうけたひとりなのです。長谷川恵理と申します」
長井は、この女性はいったい何者かといぶかった。
「白井の卑劣な手口はよく知っています。長井さんが白井にだまされて、研究成果を横取りされたことも知っています」
長井は驚いた。
「実は、私と一緒に白井と闘っている人たちがいます。その方たちに会ってみませんか。何か活路が見い出せるかもしれません。あきらめるのは、まだ早いと思います」
　長井は、きつねにつままれたような気分であったが、どうせ、自分の人生は終わったも同然だ。
　いまさら、騙されたとして何も失うものはない。それならば、この知らない女性にかけてみようという気になった。
「正直なところ、初対面の方から思いもよらない話をされて、戸惑っています。でも、私にはもう何も失うものがありません。少しでも可能性があるなら、それにかけてみたいと思います」
　こう長井がいうと、長谷川と名乗った女性は
「たぶん、その人たちは、ある店で飲んでいるはずです。いまから、その店に行って

みませんか」
と誘った。
　長井は黙って、長谷川と名のった女性のあとをついていった。
　すると、大学から歩いて五分ほどのところに、小さな居酒屋があった。看板には「福や」と出ている。
　なぜか、長谷川と名乗る女性は、店に入る前に太いフレームの黒めがねをかけた。すると、すっかり顔の印象が変わった。
「こんなにきれいなのに、どうして、この人は変なめがねなどかけるのだろうか」
長井は不思議に思ったが、詮索はしなかった。
　長井が長谷川のあとに続いて暖簾をくぐると、店のカウンターにはふたりの人間が居た。長谷川は安心したように、カウンターに腰掛けているひとりに声をかけた。
「板倉先生、やはりここでしたか。長井さんです。ご存知ですよね」
板倉は驚いたようにふたりを見た。
「いや、これはどういう風の吹きまわしだい。長谷川さんは長井さんを知っているの？」
「ええ、直接の面識はないですが、白井の罠に嵌められた気の毒な方ということは知っていました」
板倉は聞いた。
「それが、どうして、ふたりそろって、ここにくることになったんだい」
「実は、私が本部棟にいたら、長井さんが警備員に連れて来られたのです。最初は、誰か分からなかったのですが、警備員とのやりとりを聞いているうちに、もしかしたら長井さんではないかと思ったんです。
　白井のたて看板に赤いペンキを投げつけたと聞いて長井さんということを確信しました」
　実は、板倉は、長井がたて看板に赤ペンキを投げつけて、白井の行為を糾弾する場面を見ていた。最初はばかなことをするなと心配していたが、おそらく大学は表沙汰にはできないだろうと、そのまま放っておいたのである。
　長谷川は続けた。
「大学が長井さんを警察に突き出すのかと思って心配していたのですが、東郷の支持で、どうやら長井さんは解放されたようです。でも、その後の長井さんの様子が変だったので、少し見守っていたのです」
板倉は

「自殺でもしそうな気がしたんだな」
と無遠慮なことを言った。
「ええ、そんな感じさえしました。そこで、思い切って私から長井さんに声をかけてみたんです。最初は、不審そうにしていましたが、わたしの話を聞いて、ここまでついてこられたのです。」
「長井さん、奥さんに逃げられたんだろう」
長井は驚いたように板倉を見た。
「板倉先生は、どうしてそのことをご存知なのですか」
「白井が、長井さんの塾をつぶそうと画策しているという話を聞いたので、少し心配になって、知り合いに頼んで様子を見てもらっていたんだ」
長井はこう切り出した。
「私は、塾の講師で満足していたんです。もちろん大学や研究に未練がなかったわけではありません。でも、白井ににらまれたら復帰は無理です。それに、生徒も私になついてくれたうえ、いい塾だという評判がたって、結構繁盛していたのです。私は、一生を塾の講師で過ごすつもりでいました」
「そこに現れたのが、白井の刺客というわけだ」
「ええ、彼らは、塾に通っている生徒の親たちに私の悪口をさんざん吹き込んだんです。生徒が急に辞めていくので、おかしいなとは思っていたのですが、最初はまったく気づきませんでした。
　ところが、ある時、大学のもと上司から、白井の子飼いが私を人格破綻者だと、生徒の親御さんにいいふらしていると聞いて驚いたんです。
　その時には、もう手遅れでした。塾というのは、一種の客商売です。一度変な噂がたったら、無理してまで自分の子供を通わせる親はいません。あっというまに塾はつぶれてしまいました」
「本当にひどいことをするな」
「聞くところによると、白井が日本学会賞を受賞するにあたって、わたしが邪魔をするんじゃないかと邪推したようです。結構、わたしの塾は評判になっていましたから、警戒したのでしょう」
「子供たちに良からぬことを吹きこむとでも思ったのかな」
「妻も最初は、はげましてくれていましたが、収入がなくなるとどうしようもありません。わたしは、土木作業員としてがんばっていましたが、生活が苦しく、ついに、妻は子供を連れて実家に帰ってしまいました。

彼女の実家は、田舎では名家です。両親は、娘が学者と一緒になったことを喜んでくれていたようですが、私の失脚を知ってがっかりしたようです。それで、前から実家に戻るようにせまっていたのです。妻も、苦しい生活に耐えられなくなったのでしょう」

板倉は、やつれた長井の様子をみて、いたたまれなくなった。優秀な研究者が、権力におぼれたばかのために、その日暮らしを強いられ、家族までが離散してしまう。

「私は白井のおかげですべてを失いました。何も悪いこともしていないのに」

そういうと長井は嗚咽をもらした。

「今日が白井の受賞記念のパーティーだと気づいたら、思わず列車に乗っていました。あとは、どうなってもいいと思い、ペンキを買ってきて、たて看板にぶっかけたのです。警察に連れて行かれてもいいと思っていました」

「ひどい話だ」

長谷川は、こう切り出した。

「長井さんには、人生をあきらめるのはまだ早いといいました。きっと、あなたの味方になってくれるふたりがいるはずだからと、ここにお連れしたのです」

板倉は、カウンターに座っているもうひとりの連れを東都大学の同僚の吉野聡と長井に紹介した。最近、アメリカの大学から東都大学に赴任してきた助教授で、いまでは板倉と一緒に、白井相手に戦っているという。

ふたりは立ち上がると、長井と握手を交わした。長井は、板倉と吉野を交互に見あげた。ふたりとも背が高い。吉野は一八〇センチはあろうか。板倉は、その吉野よりも、さらに背が高く、しかもがっちりした体つきをしていた。まるで、仁王像のような体格だ。

板倉は、長井と長谷川の話を聞くと

「それだけ期待しているなら応えるしかないな。聡、また、同じ手は使えないか？」

と吉野に話しかけた。

「同じ手とはどういうことですか？」

「加治と同じ手だよ。長井さんをオーランド大学に送ることはできないか」

長井は意外な展開に驚いていた。加治とはどういう人なのだろうか。また、同じ手とはいったいどういう手なのか。

長谷川も板倉を応援した。

「私も同じことを考えていました。吉野さんの力添えで、長井さんを助けることはできませんか」

吉野は、しばらく考えるようにしていたが、こう応えた
「分かりました。この場ですぐに約束することはできませんが、何とか努力をしてみます」
　実は、長井と同じように白井からにらまれていた博士課程の学生が居たらしい。それが加治だった。白井の姦計で博士論文も書くことができない状態に置かれていた。それを気の毒に思った吉野が、アメリカ時代に指導を受けていたオーランド大学の教授に相談したところ、研究補助員として採用してくれることになったようのだ。
　板倉は、長井が、オーランド大学で研究できる方法はないかと吉野に聞いてくれている。
　長井は、一筋の光明が見えたような気がした。日本の大学や研究機関では、白井の息がかかっているので、自分が研究を続ける道はない。しかし、アメリカなら事情は異なる。
長井は、吉野に向かって
「吉野先生、よろしくお願いします。私は、一度死んだ人間です。それでも、少しでも希望があるのならば、それにすがってみたいのです」
吉野は
「分かりました。どこまで期待に添えるかは分かりませんが、頑張ってみます。それでは、長井さんの業績や、主要論文のコピーがあったら、私まで送っていただけませんか。オーランド大学に可能性を聞いてみます」
と言ってくれた。八方塞がりに見えた長井の人生であったが、わずかな明かりが見えたよう気がした。
（次週につづく）

アカデミックハザード　－　長井の物語　2

長井の過去

長井信吾は、都内にある中堅の国立大学の博士課程を修了した。専攻は半導体工学であったが、博士課程では、もっぱら新材料の薄膜づくりに専念した。半導体はエレクトロニクスの中心的存在であり、最先端技術そのものである。

多くの人はエレクトロニクス開発と聞くと、すぐにコンピュータや携帯電話などの電子機器の完成品を思い浮かべるだろう。そして、その開発現場もハイテク化されていて、コンピュータプログラムですべてが進んでいるように思うかもしれない。

しかし、本当の最先端研究は、意外と泥臭い仕事が多いのである。誰もやったことのない新技術を開発するのであるから、既存の技術には頼っていられない。当然、自分の手を汚して新しいことに挑戦しなければならない。

長井が、指導教授から与えられたテーマは、酸化亜鉛と呼ばれる半導体の良質な薄膜をつくるというものである。酸化亜鉛は、高性能の半導体として機能することが理論的に知られていたが、残念ながら、良質な材料がこれまで得られなかったのである。

長井は苦労の末、良好な半導体特性を示す薄膜の合成に成功し、これを博士論文にまとめた。海外の有名な学術雑誌にも論文を投稿し、注目を集めたこともある。

大学で工学博士号を取得した後は、半導体の研究をしている国立のエレクトロニクス研究所の研究グループに招かれ、ポスドク、つまり博士研究員として三年ほど勤めた。このポストは、パーマネントではなく、三年契約である。

普通は、その間に成果を挙げると、契約を更新してもらえるのであるが、この研究所の所長は、それでは馴れ合いになってしまうとして、三年以上の契約更新はしないことを明言していた。

長井は、研究に励みながら、一方では、就職活動もすることになった。昔は、大学の指導教員がいろいろな所にアンテナをはって、適当なポストがあれば、それを弟子にあてがうということが一般的であったが、最近では、公募制が浸透してきている。

公募というのは、大学の教員ポストに空きが出た場合に、そのことを公知し、一般から広く候補者を募るという制度である。公募制が始まった当初は、公募とは名ばかりで、すでに採用予定者が内定していることがほとんどであった。

ようやく最近になって、一部の地方大学や私立大学では、本当の公募が導入されるようになっている。いまでは、大学だけではなく、公立の研究機関や一般企業でも公募を実施するところが増えている。

三年の任期というのは、長いようで短い。この間に、研究を進め、その成果を論文にまとめて業績を挙げなければならない。公募で勝ち抜くためには、どれだけ論文を書いたかという業績が重要だからである。

長井の場合、幸いにもポスドクのテーマは、自分が博士課程で行った研究の延長であった。というよりは、長井の研究を評価した研究所のグループリーダーが長井を呼んでくれたのである。

国立研究機関の設備は、大学よりもはるかに整っており、長井の研究はいっきに進んだ。いろいろな酸化物の良質な薄膜が再現性よくつくれるようになったのである。国立研究機関では、すぐに実用化につながる研究テーマを選ぶように所管官庁からプレッシャーをかけられている。

これは、国民の税金を使って研究をするからには、すぐに役立つものでなければならないという考えによる。さらに、実用につながる研究成果を出さないものには、予算をつけないという厳しい処置まで行われている。

この考えは、ある面では決して間違いではない。かつての国立研究所は、百年先の研究を目指すといいながら、まったく仕事をしない研究員であふれかえっていた。

朝十時すぎに研究所に顔をだし、時間をかけて新聞を読んだあと、お茶をのみ、たっぷり昼休み時間を満喫し、午後四時には帰宅するという不届きものが多かったのである。最近では、このような研究員は見かけなくなった。それは、国からの締め付けのおかげではある。

しかし、目先の利益だけにこだわっていると、本当のブレイクスルーにつながるような画期的な研究はできないという弊害もある。ただし、そんな研究のできるひとは、千人にひとりくらいの確率しかない。ほとんどの研究者は凡庸である。それならば、自由にやらせるよりも、実利的な開発研究をやらせた方がよいということなのかもしれない。

長井の研究は、成功すれば、すぐに半導体産業に還元できるものなので、グループリーダーにとっても魅力的なテーマであった。だから、国立研究所では、長井は比較的恵まれた環境に居たのである。予算も、大学では信じられないほどの額がついた。

しかし、この環境も三年で離れなければならない。長井は、博士研究員となって二年目から、つぎの仕事を探しにかかった。最近は、研究者の公募を知らせるサイトがネット上に公開されており、情報収集はかなり楽になった。

ただし、難しいのは、ネットに載っている公募が、本物かどうかを見分けることである。かなりの場合、公募とは名ばかりで、すでに採用者が内定していることが多い

からである。特に、有名大学の公募は、ほとんどができレースと言ってよい。

ある公募の採用者の充たす条件を読むと、明らかに、特定の人物以外にはあてはまらないということもある。担当分野が極端に狭く、しかも、国立大学において五年以上の就業経験があるもの、などと書いていたら、その大学の、公募先の研究室の助手以外には、採用されるものはいないということである。長井は必死になって、公募要領を読んだが、募集する側のレベルの低さに驚いた。

長井は、自分に条件が当てはまりそうな大学には、できるだけ応募するようにした。残念ながら、多くは、書類選考の段階で振り落とされた。長井の業績は優れていたので、落選の通知には

「本公募で募集している分野に合致しない」

という理由が書かれていた。

そのことをグループリーダーに話すと

「国立大学の公募は、不公正そのものなので、誰か知り合いでも居ない限り難しいのではないか」

と不穏なことを言っている。

リーダーは、研究所長に掛け合って、長井を正式な職員として採用するよう頼んでくれたが、所長は、頑として受け入れなかった。例外を一度認めれば、制度は崩壊するというのである。

その後も応募を続けたが、ことごとく書類選考で落とされた。グループリーダーは、海外の公募であれば、かなり公正なものが多いので、挑戦してみたらどうかと薦めてくれたが、長井は、英語が得意なほうではなかったので、自信がなかった。

長井は、これから研究の世界で飯を食っていくためには、英語力がいかに大切かということを認識していた。英会話学校にも、ずっと通っている。かなり上達したとネイティブの講師からほめられてはいるが、海外の研究者と堂々と意見交換できるほどのレベルには達していない。

就職先が決まらないまま、この研究所で博士研究員として過ごすことのできる三年目に突入した。先輩の博士研究員の何人かは、就職先が決まらずに、非常勤のアルバイトで研究を続けているものもいる。日本全体で見ても、博士号取得者で、研究職につけるのは三割にも満たないのであるから、就職先がない方が当たり前なのかもしれない。

科学技術立国をめざすという大方針のもと、政府は博士１００００人計画というのをたてた。毎年、これだけの数の博士を育成するというのだ。ところが、その受け入

れ先を用意していなかった。

しかも、大学の人事は旧態依然としている。一度、職についたものは、どんなにひどくてもやめさせることができない。これではいけないと危機感をいだいた、ある大学の学長が、教員業績評価制度を導入しようとした。ところが、教授会がこれに猛反発したのである。いわく、研究業績は機械的に評価できないというのである。

学長は、このままでは大学のポテンシャルは下がる一方だと、教員たちの説得をこころみたが、ヒステリックに反対するばかりで建設的な話し合いなどできない。そして、この学長は、つぎの選挙でみごと落選の憂き目をみた。

どんなに優秀であっても、大学のポストに空きがでない限り、職につくことはできない。そして、そのポストは、かすのような教授連中にしっかり握られている。

かくして、毎年７０００人の博士が職につくことができないという異常事態が生じているのである。しかも、毎年ルンペン博士は量産されることになる。

グループリーダーは、

「長井君なら、十分な業績があるので、必ずどこかのポストを探せるはずだ」

とはげましてくれているが、いかんせん、ポストの絶対数が限られている。長井は半分あきらめかけていた。

長井の親は、いままでずっと、長井の研究者への夢を支えてきてくれていた。ところが、息子が就職に苦戦する様子を見て

「そろそろ、別な人生を考えたらどうか」

と弱気なことを言いだした。

長井にはひとつ下の弟がいる。文系の大学を卒業すると、すぐに出版社に就職し、いまでは結婚して子供までいる。親としては、長井にも、孫の顔を見せて欲しいということなのだろう。

しかし、親は簡単に言うが、博士号を持った人間が就職できる道は限られている。もちろん、博士ということは伏せて、大卒という待遇であれば、何とか就職口は見つかるかもしれない。それでも、長井の年齢であれば中途採用扱いであり、就職先も限定される。

長井の研究室の先輩には、博士の学位を得ながら、研究職への道が適わず、大手の進学塾に勤めている人が居る。山元順だ。

先日も

「おれのところに来ないか」

と山元は、誘ってくれた。

山元には、長井も指導を受けたことがあるが、教え方が抜群にうまかった。優秀なひとだったが、ポストには恵まれなかった。指導教授に楯をついたからだという噂もある。山元が優秀すぎたとも言われている。「出る杭は打たれる」の典型例だと言う先輩もいた。

ある学会でボス教授の発表をやりこめたせいとも聞いている。その教授は、研究はからきしだめだったが、政治力はあった。その力を利用して、学会賞を受賞することになった。良識あるひとたちは驚いたが、日本ではよくあることである。

しかし、山元には許せなかったようだ。若気のいたりといえば、それまでだが、受賞記念講演の内容が、あまりにもひどかったことに怒った山元は、教授のあやまりを、その場で指摘してしまったのだ。

公衆の面前で恥をかかされた格好になったボス教授は、裏から手を回して、山元の昇進を阻止した。山元は毅然と辞表をたたきつけ、大学を去ったという。

いま、山元は大手予備校の人気講師として活躍し、高収入を得ている。科学評論にも力を入れており、最近も、五冊目となる著書を送ってきていた。今回は、世界をゆるがせた科学スキャンダルを扱った内容である。

アメリカの有名な研究所の博士研究員が、世界的に有名な研究成果を挙げ、掲載されるのが難しいというワールドサイエンス誌に、論文が２０報以上も発表し話題になった。ノーベル賞候補と騒がれたことがある。

ところが、そのすべてが捏造であることが発覚したのだ。発端は、簡単であった。この研究結果を誰も再現できないのだ。しかも、違う物質であるにもかかわらず、発表されているデータはみな同じかたちをしていた。これでは、嘘が簡単にばれてしまう。それが、見過ごされてしまったのだ。

しかし、日本では、この研究に便乗して、多額の学術研究補助金をもらった人間が山のようにいる。

「なにか、常温核融合の時とよく似ているな」

と長井は感じていた。あの時も、日本では数多くの便乗屋が誕生し、政府は、科学的根拠のない研究に対し、ろくな精査もせずに巨額の予算を投じた。

山元は、なぜ、今回のような事件が起こったのかということを、学問の世界の閉鎖性や、研究システム、その評価方法などの問題も含めて、深く切り込んでいた。

長井が読んでも、なるほどと思うところが多かった。研究の世界から離れた山元が、どうして、これだけ調べられたのか不思議であったが、広い人脈によるものなのかもしれない。

そんな山元を見ていると、うらやましくもあった。自分も予備校の講師を目指そうかと思ったが、長井は、人に教えるということを経験したことがない。自分にうまく務まるだろうか。そんな悶々とする日が続いたある日、突然、朗報が届いた。

国立大学の北東大学から、書類選考に合格したという知らせである。面接したいので、来て欲しいという。書類選考で合格したのは三人で、その中から一人を選ぶということらしい。

面接日は土曜日の午後を指定してきた。もちろん交通費は、応募者負担ではあるが、この公募にかけるしかない。届いた手紙によると、３０分程度、研究内容に関するプレゼンテーションの後、質疑応答があるという。

面接

長井は、着慣れないスーツにネクタイ姿で面接に出かけた。東京から新幹線で三時間ほどのところに、北東大学はある。緊張した面持ちで、指定された時間に学科の受付に行くと、来ているのは長井ひとりだけであった。実は、候補者が鉢合わせしないように、一時間ずつ間を置いて面接するらしい。

案内されて面接会場に入っていくと、面接官は六名であった。司会は、電子情報学科の主任教授の吉川であった。吉川が自己紹介したあと、それぞれ他の五名の面接官を紹介してくれた。みな、同じ学科の教授である。

長井が

「現在、エレクトロニクス研究所で博士研究員をしている長井です。今回は貴重な時間をとっていただき、ありがとうございます。今日は、よろしくお願いします」

とていねいな挨拶をして、頭を下げると、ひとりの面接官が、急に声を張り上げた。

「おい、君は、一生世話になるかもしれないところに挨拶に来ているんだろう。その挨拶の仕方は何だ。全然なっとらん」

とクレームをつけた。

長井がきょとんとした顔をしていると、吉川が

「まあまあ、河野先生、そうけんか腰にならずに、まず、長井さんの話を聞いてみましょう」

ととりなしてくれた。河野は、ものすごい形相で長井をにらんでいる。

長井は、どうして、このひとは、おこっているのだろうかと不思議に思ったが、自分に対して、相当、悪い印象を持っているということだけは確かだった。先が思いや

られる。

　長井は、コンピュータとプロジェクターを使った発表を準備してきていた。ところが、コンピュータとの相性が悪いのか、大学で用意したプロジェクターとうまくつながらない。五分ほど悪戦苦闘したが、画面が現れなかった。すると、河野が

「だから、コンピュータは嫌いなんだ。最初からＯＨＰでやればいいものを。長井君、きみは、わたしたちの貴重な時間を無駄にしているんだよ。それを承知しているのかね」

とまた毒づいてきた。すると、吉川が

「長井さんのせいではないのですから、あまり、興奮しないで下さい」

と河野をたしなめ、かわりのプロジェクターを用意してくれた。すると、今度はうまくつながった。

　長井の説明に、河野以外の面接官は、時々うなずきながら、熱心に耳を傾けてくれた。二五分ほどで発表を終えると、再び河野が

「きみ、一分オーバーだよ。時間を守れないやつは、だめだね」

とけちをつけてきた。すると、吉川が口をはさんだ。

「河野先生、プロジェクターのトラブルがあったから、時間が延びただけで、長井さんは、ちゃんと説明を三〇分以内にまとめてくれましたよ。それに、説明もとても分かりやすかった。私は、感心しました。長井さん、ありがとうございます」

と言ってくれた。すると、河野は面白くなさそうに、横を向いた。

　その後、技術的な質問が、各面接官から出された。長井は、すべての質問にソツなく答えることができた。

　すると、河野が突然

「あなたのポリシーは何ですか」

と聞いてきた。長井が質問の意味が分からず

「先生のおっしゃるポリシーの具体的な意味が分からないのですが、もうちょっと分かりやすく質問していただけますか」

と聞くと

「おまえは馬鹿か。ポリシーとは信念のことだよ。大学に来て、どのような信念で臨むかということを聞いているんだ」

長井は、河野が言うポリシーは、本来の意味とは少し違うなと思ったが、それは言わないことにした。

　さらに、どのような信念で望むかと問われても、範囲が広すぎて答えようがない。

もう一度聞き直そうかと思ったが、これ以上印象を悪くしたくないので、仕方なく、つぎのように答えた。
「大学は、研究も重要ですが、学生の教育も大事と思っております。ですから、研究を通して、学生を指導できるようにしたいと思います。」
河野は、すかさず
「授業はどうするの」
と聞いてきた。
「はい、授業についても、一生懸命取り組むつもりです」
と答えると
「みんな一生懸命やっているんだよ。それでも、最近の学生は文句ばっかりで、俺の話に耳を傾けない。どうしようもない奴らばっかりだ。あなたは、それをどうしようと思っているの？」
と聞いてくる。まるでやくざのいいがかりだ。
長井は、河野の授業に学生が集中できないのは、河野のせいだろうと思った。自分が、とやかく言う問題ではない。
「先生の講義の様子を見たわけではないので、何とも答えようがないのですが、とにかく、学生が集中できるような環境をつくりたいと思います」
「なにを偉そうな事をいっている。わたしだって、いろいろ工夫はしているつもりだ。それでだめなんだからしょうがない」
と愚痴をこぼした。これでは、建設的な話し合いにはならない。長井が困っていると、吉川が助け舟を出してくれた。
「河野先生、あなたの講義の話はもういいでしょう。時間も、かなり過ぎていますので、面接はこれで終わりにしたいと思います。長井さん、どうもありがとうございました」
「なお、結果につきましては、一週間以内に報告いたしますので、それまでお待ち下さい。今日は、遠いところ、わざわざ東京から来ていただきまして、ありがとうございます」
と言ってくれた。
長井は、失礼しますと言って部屋を出たが、気分は最悪であった。これでは、公募に受かることはないだろう。それにしても、あの河野という教授は、どうして、あんなに長井に対して攻撃的な態度をとったのだろう。後味の悪い面接となった。

アカデミックハザード　－　長井の物語　３

ライバル

　長井が校舎を出ようとすると、物陰から、ひとりの男が現れた。長井よりも一〇歳ほど年上であろうか。かなりくたびれた格好をしている。

男は

「すみません。いま、電子機能工学科の面接を受けてきた方でしょうか？」

と声をかけてきた。

「はいそうですが、どちら様ですか？」

「実は、わたしも、今回の面接に残ったひとりで、平田と申します」

と自己紹介した。

　長井は、面接に残った候補者どうしが、情報交換してもよいものなのかどうか迷ったが

「わたしは長井と申します。エレクトロニクス研究所で博士研究員をしております」

と答えた。

　すると平田は

「そうですか。あなたが、河野先生の言われていた私の最大のライバルですね」

と言う。

　平田は、どうやら河野の知人のようだ。しかし、最大のライバルとはどういうことなのだろう。

「実は、河野先生は、私一人を最終選考に残すおつもりだったのですが、主任教授の吉川先生が、どうしても三人にしたいということで、長井さんを呼ばれたらしいのです」

長井は、いぶかった。秘密のはずの人事の件が、河野を通して平田に流れているのはおかしい話だ。

「もうひとりの候補者は業績もなく、問題外らしいのですが、長井さんは、若いにもかかわらず、かなり論文を発表しておられると河野先生は心配しておられます」

河野が心配する？それは、どういうことなのか。長井にはさっぱり分からなかった。

「そこで、相談なんですが、今回の公募は、長井さんの方から大学に断っていただけないでしょうか。もちろん、それなりの謝礼は致します」

長井は、平田の言っている意味が最初は分からなかった。そして、しばらくして、今回のポストを平田が長井から金で買おうとしているのだと理解した。

平田は、つぎのような話をしてくれた。

平田は、ある中堅企業に勤めていた。給料はそれほど高くはなかったが、妻と子供ふたりを養うのには十分であったという。この企業で一生を過ごすつもりでいたが、ある時、河野から大学院の博士課程に進まないかという誘いを受けた。実は、河野は、平田の恩師の知り合いで、平田が大学院の修士課程の時に共同研究などで世話になったのである。

河野は、現在、文化省が社会人向けの博士コースを開設し、各大学にノルマを押し付けているというのである。社会人博士優遇制度と呼ばれる新しい制度で、通常は、三年かかるところが二年で博士号を取得できるという。ただし、研究に専念するため、会社は辞めなければならない。

平田は、もちろん断った。いまのままで幸せである。三十三歳になったいま、苦労して博士号をとる意味がない。それに将来が保証されていないのに、会社を辞めるなどもってのほかである。

もちろん、会社によっては、この二年間を休職扱いにしてくれ、博士取得後に再雇用する場合もあるらしい。しかし、平田の会社には、そんな余裕はないし、従業員に博士を取得させる意味がなかった。

ところが、河野はしつこかった。企業を辞めて、博士課程に進んだ社会人には、多額の奨学金がつくので、生活には困らないというのだ。しかも、博士号をとったあかつきには、河野が大学に採用してくれるという。

平田は大いに悩んだが、河野が確約するというので、思い切って、会社を辞め、社会人ドクターになることを決心した。北東大学第一号ということもあって、地方新聞などでも紹介された。後で、分かったことだが、河野は、平田を博士コースに迎えたことで、かなりの予算を得たという。実は、社会人博士を希望していた人間が、家の事情で急遽、志望を取り下げたために、河野は窮地に陥っていたのである。すでに、文化省には約束してしまっている。自分の後ろ盾の白井にも迷惑がかかる。河野も必死だったのである。

平田は、河野が懇切丁寧に指導をしてくれるものと期待していた。ところが、驚いたことに、河野は、研究テーマも適当に探せと言っている。平田は悩んだ末、環境問題に絡んだ機能材料をテーマにすることとした。

現在、世の中に出回っている圧電材料には鉛が含まれている。しかし、鉛の毒性が問題となり、鉛を含まない圧電素子材料の開発が求められていた。平田の会社でも、ライター用に、この材料を使っていたので、前から問題ということを認識していたの

である。

　しかし、しばらく研究の世界から離れていた平田にとって、博士論文を短期で仕上げるというのは至難の業であった。特に、選んだテーマは素晴らしいが、世の中の多くの研究者が挑戦しても、なかなかいい成果が出ていないのが現状である。研究室の学生などの助けを借りて、研究を続けたが、とても二年で論文を仕上げるのは無理と分かった。

　ところが、河野は

「平田君には、二年で書き上げてもらわなければ困る」

と命じた。

　文化省は、社会人が二年という短期間で博士号をとることに意義を感じている。それが、普通のコースドクターのように三年かかったのでは意味がないというのだ。平田は、家族には迷惑をかけると思ったが、最後の半年は、毎日学校に深夜まで残ってなんとか論文を仕上げた。

　平田は、めでたく、博士となった。これは、快挙として指導教授の河野とともに、地元の新聞に大きく取り上げられた。

　しかし、平田に、大学の教員ポストはまわってこなかった。河野は、大学にポストの空きがなければ、採用することはできないと説明した。

　平田は

「先生、それは約束が違います」

　と怒ったが、ポストがないのであればどうしようもない。

　そして、博士課程修了と同時に、平田への奨学金が打ち切られた。このままでは干上がってしまう。会社を辞める時に、わずかばかりの退職金を貰っているが、その金は大事にとっておかなければならない。

　河野に相談したが、なかなかいい知恵は出なかった。仕方がないので、市内の予備校でアルバイトをすることにした。一ヶ月一〇万円程度しか収入はないが、仕方がない。河野は、しばらくすればポストが空くので、それまでの辛抱だと言っているが、あまり信用できない。

　それから半年ほどして、河野が

「大学で公募があるから、それに応募してみろ」

と言ってきた。平田は、河野の後ろ盾があるから、大丈夫だろうと安心していたが、結果は違っていた。別の候補者が採用されたのだ。平田は、激怒した。

　河野は、採用された候補者は、かなりの金をばら撒いたらしいと言ってきた。そし

て、平田にも、猟官運動をするためには、何人かの教授に金を渡す必要があると金をせびった。

平田は、しようがなく、退職金で得た１００万円を河野に渡した。この金は、何か困った時のために残しておいた大事な虎の子であったが、自分の生活を安定させるには仕方がないと平田はあきらめた。

そして、今日の面接日を迎えたのである。河野の画策もあって、平田は書類審査に合格し、最終面接にこぎつけた。しかし、問題は、長井であった。河野としては、平田ひとりを残しておきたかったのだが、主任教授の吉川が難色を示した。しかも、河野が二〇万円という大金を包んで、依頼に行ったにも関わらず、吉川はそれを受け取らなかったというのだ。

そればかりか

「このような不正な行為は、慎むべきです。今回は、不問に付しますが、次回からは、ただではすみませんよ」

と注意を受けたという。

この話を聞いた平田は驚いた。今度こそと思っていたのが、このままでは自分の将来は危うい。そこで、居てもたってもいられなくなって、長井を待ち受けていたというのだ。

長井よりも、かなり年上に見えたが、実際の年齢は、平田がわずかに上なだけである。相当な苦労をしているのだろうか。長井は、平田が気の毒であったが、自分にはどうしようもないことのように思えた。

「平田さんの事情はよく分かりました。しかし、それでは、私も不正に加担することになります。今回は、黙って、選考委員会の判断にゆだねたらどうでしょうか」

「長井さん、あなたには、まだ今後があるでしょうが、私には今回が最後なのです。妻や子どもの世話もしなければならない。なけなしの退職金も全部使ってしまいました。どうか、今回は私に譲っていただけませんか」

と半泣き状態で懇願された。

しかし、たとえ長井が辞退したとしても、平田が採用されるとは決まっていない。

「先ほどの面接では、私は河野先生にずいぶんとやりこめられました。多分、受からないと思っています」

こういうと、平田は少し安心したような顔になった。

「実は、最近、お金に困っていまして、街金から借金してしまったのです。このままでは、私は破綻してしまいます」

長井は、もう一度言った。
「平田さんのご事情は察します。しかし、たとえ、私が辞退したとしても平田さんが、公募のポストにつけるかどうかは分かりません。申し訳ありませんが、今回の申し出は受けられません」
すると、平田はがっくりと肩を落として、去っていった。長井も、平田が気の毒でしかたがなかったがどうしようもなかった。
　それから、一週間ほどして、北東大学から手紙が届いた。驚いたことに、長井の採用が決定したという。手紙には、承諾書とともに、今後の事務手続き方法などが書いてあった。
　長井は、平田のことを思うと、喜んでばかりはいられなかった。自分は、今回の公募を辞退すべきだったのではないだろうか。そう思い悩んだ。
　しかし、長井が辞退したからといって平田が採用されるわけではない。今回の件は、平田と河野が不正を働いたことが吉川にばれている。長井は、むしろ、そのことが平田の不採用につながったのではないかと思った。

北東大学
　長井は、北東大学に赴任して来てびっくりした。研究設備があまりにも貧弱なのだ。長井が博士を取得した東京の大学に比べると、あまりにも落差が大きい。さらに、長井はエレクトロニクス研究所で、恵まれた研究環境に居たので、余計ちがいを感じた。
　吉川は、長井の研究をよく知っていて高く評価してくれていた。狭いながら、長井が自由に使える実験室も準備してくれた。幸いにも、エレクトロクス研究所のグループリーダーが、中古ではあるが、薄膜製造用の装置を長井に譲ってくれたのである。
　長井が困ったのは、何かにつけて河野が難癖をつけてくることである。平田の件があるからなのかもしれないが、長井が何か新しいことをしようとすると、ことごとくクレームをつけてきた。
　最初の一年は、研究室の立ち上げに時間がとられるため、学内の雑務などは免除してもらえるのが慣例となっている。ところが、河野は、執拗に、長井に雑用がまわるように仕向けた。
　長井がエレクトロニクス研究所から、装置を移設する際にも、じゃまが入った。吉川は、学科の共通予算で移転費用を出してくれると約束してくれたのだが、河野は、個人が使う実験装置に共通予算を使うことはできないと強硬に反対した。結局、長井

が、自分の研究予算を使うはめになった。

大学に赴任してしばらくは、研究室の立ち上げに忙殺された。すべて一からの立ち上げである。電気や水道などの必要設備も自分で手配しなければならない。しかし、何とか、自分の実験ができるまで環境を整えることができた。ありがたかったのは、エレクトロニクス研究所が共同研究を申し出てくれたことだ。地方大学では、国の研究補助金をもらうのは大変である。しかも、長井のような新人に予算がまわってくることはほとんどない。

長井は、いろいろな国の補助金制度に応募していた。しかし、決まって同じ理由で却下された。それは

「申請者の業績は素晴らしいものがあるが、この業績は、現在の職場で得られたものではない。残念ながら、研究を遂行するだけのポテンシャルはないものと判断される」という内容である。却下の理由はいつも同じであった。

この理由には矛盾がある。誰でも、最初は、ゼロからかスタートしなければならない。その場所での成果がないからという理由で予算がつかないとしたら、いつまでたっても、その場所で成果を出せないことになる。

アメリカでは、予算はひとにつくという。予算申請したひとが、どれだけ業績を挙げているかで判断する。これに対し、日本では、ひとは関係ないと思っているのである。ハーバード大学やスタンフォード大学の予算獲得額が多いということから、日本でもＣＯＥ構想が生まれた。それは、すぐれた業績を上げている大学に、予算を重点的に配分するというものである。つまり、日本では組織に対して金を出すという発想なのだ。

ところが、これは明らかなまちがいである。アメリカの有名大学が予算獲得額が多いのは、組織のネームバリューではなく、そこにいる教員の業績がすぐれているからである。つまり、組織がすぐれているからではなく、優秀な教員を集めた結果として、予算獲得額が増えているだけなのである。

ひとではなく組織を大事にするという発想は、日本全体にはびこっている。これが、日本社会全体の沈滞を招いている。

河野は、地方大学の教員には珍しく、国の研究補助金をふんだんに貰っていた。業績らしい業績がないにもかかわらずである。トリックは簡単で、河野には東都大学の後ろ盾があるからである。

河野は、現在、東都大学で工学部長をしている白井大介の弟子である。白井は文化省にも太いパイプがあり、巨額の予算をコントロールしていた。そして、白井は、自分

の弟子たちに優先的に予算がまわるように画策していたのである。

アメリカでは、予算獲得のためには、業績も含めた厳しい審査があるが、日本では、ごく一部の審査員が、かってに配分を決めている。

河野は、自分が東都大学出身ということに異常とも思えるようなプライドを持っていた。吉川をはじめ学科の他の教員には、地方大学出身者が多い。河野は、何かにつけて東都大学出身ということをひけらかしていた。そして、何かがあると、白井先生、白井先生と、白井の名前を使って、自分の権威を誇示していた。

長井が北東大学に赴任して二年目に入って、ようやく研究室が発足した。指導する大学院生がふたり、卒業論文をまとめる四年生もふたりついた。総勢五名という小さい研究室ではあるが、長井は感動した。自分が一国一城の主になったような気がしたからである。

長井はエレクトロニクス研究所との共同研究を進めるとともに、新しい研究テーマにも取り組んでいた。長井は、酸化亜鉛という半導体の薄膜製造に取り組んできた。その過程で、いろいろなノウハウを蓄積した。最近、良質な薄膜が再現性よく製造できるようになったのは長井の貢献が大きい。

しかし、時々、疑問に思っていたことがある。このような新材料の薄膜製造は、対処療法的な取り組みが多い。もちろん、材料が違えば、当然、最適条件が異なるのは当たり前である。長井は、もっと普遍的な条件がないだろうかと考えたのである。

そこで、いろいろな材料について、その薄膜成長に及ぼす、環境条件の影響を調べ始めたのである。長井が注目したのは磁場の影響であった。もちろん、いろいろな条件が影響を与えるが、磁場は永久磁石を使えば、その影響をみることができる。

しかし、永久磁石の磁場は弱すぎる。この実験について相談した研究者は、みな超伝導磁石のような強い磁場でなければ影響は出ないはずだと言った。残念ながら、長井には高価な超伝導磁石を購入する予算はない。もちろん、研究に見込みがあれば、超伝導磁石を貸してくれる研究機関があるかもしれないが、そのためにも、可能性を示す必要がある。

ところが、いくら実験を繰り返しても、磁場の影響は現れなかった。やはり永久磁石ではだめなのかとあきらめかけた時、学生からの指摘で長井はあることに気づいた。永久磁石の磁場は、実は、磁石のまわりで回ってしまっているのだ。つまり、薄膜が成長する場所では、磁場が曲がってしまっているのだ。そこで、長井は、磁石を二個使ってみた。磁石と磁石の間では、磁場が曲がらずに、まっすぐ伸びる。

驚くことに、この方法を使うと磁場の効果が見られるようになったのである。長井

は、材料を変えて、同じ実験を繰り返してみた。すると、磁場の効果が現れる材料と、現れない材料があることも分かった。面白い発見に長井は興奮した。

アカデミックハザード　－　長井の物語　４

見合い

　大学に来て一年ほどした時、吉川から呼び出しがかかった。いったいなんだろうと思って吉川の部屋にむかうと、吉川はにこにこしながら、おもむろに机の引き出しから写真を取り出した。そこには、きれいな女性が写っていた。

「先生、この写真の女性がどうかしたのでしょうか」

すると、吉川は

「長井先生らしいね。研究以外は興味がないのだから。見合い写真ですよ」

と笑っている。

「見合い写真ですか？」

長井は驚いた。長井が結婚を考えていないわけではない。

　両親からは

「信吾もちゃんとした仕事についたのだから、そろそろお嫁さんをもらったらどうなんだ」

と言われていたのである。

　しかし、大学で研究していると出会いの場がない。それに、長井は、研究者として、まだ駆け出しの自分にとっては、結婚よりも自分を磨くことが大事な時期と思っていた。

「どうですか、その女性」

長井は、あらためて写真をじっくり見てみた。まるでアイドル歌手のような可愛らしい顔をしている。自分には不釣合いであろう。

「とても素敵な女性と思います」

「そうですか。彼女は、わたしの知り合いのお嬢さんで、棚橋由美子さんと言います。いま二十四歳です。地元の大学を出て、いまは家事手伝いをしておられるそうです。実家の不動産管理の仕事も手伝われているようですが」

　棚橋家は、北東大学がある市の隣町の名家で、現在はアパート経営や貸しビル業で生計を立てているという。由美子は、卒業後は、仕事をしたかったらしいのだが、父親が反対して、自分の家で家事手伝いをさせられているらしい。二十四といえば、まだまだ子供であるが、由美子の父は、女は二十台前半で嫁に行くべきだという古い考えの持ち主だった。

「しかし、こんな素敵なお嬢さんは、わたしにはとてももったいないのではないでし

ょうか」
「実は、先方のお父さんに、先生のことを話したら、いたく気に入っておられるのです」
　由美子の父は、学者が好きらしい。実は、由美子の父の棚橋は若い頃、学問を志していたのだが、実家をつぐためにあきらめたという過去があるそうなのだ。
　長井は、話がそこまで進んでいるのかと驚いた。吉川の積極的な勧めもあって、一度、ふたりで会うことにした。最初は、正式な見合いの席を持つという話もあったが、長井はそれを固辞し、ふたりだけで逢うことにした。

　土曜日の昼に、由美子と待ち合わせた。長井が予約したフレンチレストランで待っていると、写真の女性が現れた。由美子の登場で、店はいっきに華やいだ感じになった。まるで、映画スターのようだ。長井がみとれていると、由美子は笑顔で寄ってきた。
「長井さんですね。はじめまして、棚橋由美子と申します」
「長井信吾です。今日はお忙しいところを、わざわざお越しいただいて申し訳ありません」
長井が、こうあいさつして頭を下げると、由美子は声を出して笑った。あいさつが変だというのだ。
　長井は、少し安心した。由美子はとても性格の明るい女性だったからだ。つまらないことでも、けらけらと笑った。おそらくおおらかに育てられてきたのだろう。
長井はいっぺんで由美子のことが気に入った。
　しかし、すぐに思った。こんな素敵な女性が、自分のことを気に入るわけがない。こう思うと、少し残念な気がしたが、一方では気が楽になった。
　いままで、長井は女性とつきあったことがない。弟は研究に明け暮れている長井の生活をみて
「兄貴の人生には、はなやかさがないな。一度、女性とつきあってみたら」
と言ったことがある。弟は、大学卒業後に早々に身を固め、いまは子供までいる。ふと、由美子との結婚生活を思い描いたが、すぐに、それは夢物語とあきらめた。
　長井は、無粋だと思ったが、自分の研究の話を由美子にしてきかせた。研究一筋の長井には、他に話す内容がないのだ。特に、最近、面白い発見をしたことを興奮して話した。
　つまらない顔をするかと思ったが、由美子は、はじめて聞く世界に興味津々のよう

であった。いやいやつきあっているのかもしれないが、長井は、そのまま自分の話に終始した。
　その日は、食事をして別れた。長井は、こんな素敵な女性と一緒に食事をできただけでも幸せだったと自分に言い聞かせた。

　長井は、由美子への思いを振り切るように、研究に没頭した。時折、ふとした時に由美子の笑顔が浮かんで、心をかき乱したが、自分には縁がないのだと言い聞かせて、仕事に戻った。
　長井と由美子が食事をしてから、一週間ほどして、吉川から呼び出しがかかった。長井は、おそらく由美子から今回の話は無かったことにして欲しいという連絡だろうと覚悟した。
すると吉川は意外なことを言った。
「長井先生、どうして一週間も由美子さんを放っておくのですか。彼女のことが嫌いですか」
長井には、すぐに吉川の言っていることが理解できなかった。
「いえ、由美子さんは、自分と交際するのは、きっと迷惑だろうと思って、あきらめました」
「何を言っているんです。彼女は先生からの連絡を、首を長くして待っているそうですよ」
まさかと長井は思った。
「由美子さんは、長井さんに、とても好印象をもっているそうです。お父さんからわたしのところに、直接連絡がありました」
長井は本当に驚いた。あんな素敵な女性が自分のことを気に入るなどとは思っていなかったのだ。由美子の笑顔が頭に浮かんだ。
　すぐに長井は由美子に連絡をとった。
「天にも昇る気持ちとは、こういうことだろうか？」
　それまでの人生で、味わったことのない感情に突き動かされ、長井は、そう自問した。
「もしもし、長井と申しますが、棚橋さんのお宅でしょうか？」
すると、由美子の母とおぼしき人がこたえた。
「長井さんですか。よかった。由美子がくびを長くして待っていましたのよ」
と言う。陰から

「おかあさん。そんなこと言わないで」という声が聞こえた。
長井はうれしくなった。

　それからは、週末には必ず由美子と一緒に過ごした。しばらく見ていなかった映画にもでかけた。
　由美子とのデートは本当に楽しかった。長井の給与は決して高くなかったので、安くておいしい店を必死に探した。幸い、この田舎街には、隠れ家的な飲食店が多くあることが分かった。
　半年後、長井は由美子にプロポーズした。少し不安もあったが、杞憂であった。由美子は、うれしそうに、承諾してくれた。
　ふたりの結婚式は盛大に行われた。なにしろ棚橋家は地元では名家である。県知事までがお祝いにかけつけた。仲人は、吉川教授夫妻にお願いした。
　長井の側の主賓は学長の岡谷であった。岡谷学長は、長井が将来、北東大学を担う人材であると持ち上げた。長井はうれしくなった。岡谷が自分の研究内容と業績をよく知っていたからだ。
　結婚から半年して、由美子に子供ができた。長井は、飛び上がるようにして喜んだ。自分も父親になる。そして、責任感を強く感じた。自分は、妻と子供を守っていかなければならない。

プロジェクト
　生まれたのは女の子だった。はじめてわが子を見たとき、長井はなんとも言えぬ感動につつまれた。この子は、自分の血を受け継いでいるのだ。
　名前は洋子となづけた。長井は、自分の子供を持ってはじめて、こんなに、子供がいとおしいものなのだということに気づいた。実家の両親も大喜びであった。
　私生活も充実していたが、長井の研究も順調に進んでいた。薄膜成長へ及ぼす磁場効果を数本の論文としてまとめ、学会誌に発表した。いろいろな材料の薄膜成長を磁場の中で研究していく過程で、長井は、材料によらない、ある普遍的な傾向に気づいた。しかし、それを確かめるには、より強い磁場が必要になる。どうしても、超伝導マグネットを使いたい。長井はそう考えていた。
　長井は、自分の成果をアピールして、国のいろいろな補助金に研究費を申請した。残念ながら、それらは、すべて却下された。コネのない地方大学の助教授には、国の

予算はなかなか回ってこないのである。
　そんな時に、長井のもとに一本の電話がかかってきた。
「北東大学の長井先生ですか。私は、東都大学の白井と申します」
長井が知っている東都大学の白井とは、あの有名な白井教授である。確か、いまは工学部長をしているはずである。多くの学会の幹事もしている大物である。長井は緊張した。
「長井ですが、どのような、ご用件でしょうか」
「実は、先生にお願いしたいことがありまして電話いたしました。先生は、文化省の次世代技術開発プロジェクトを、ご存知ですか？」
「ええ、聞いたことはありますが、私には関係のないことと思っています」
これは、日本が科学技術立国を目指すうえで、国策として次世代技術開発を積極的に進めようとする壮大な計画である。このため、国は研究予算として、総額１００億円を用意している。
「このプロジェクトのひとつとして、次世代半導体開発を推進することが認められまして、私が、そのプロジェクトリーダーを勤めることになりました」
長井はいぶかった。それが、自分とどんな関係があるのだろうか。
「今日お電話したのは、先生に、そのメンバーのひとりになって欲しいからです」
「私がですか！」
思わず、長井は声が裏返った。大物の白井から、直接、自分に研究メンバーに入って欲しいという依頼が来たのだ。
「いかがでしょうか。メンバーになっていただけますでしょうか」
「もちろん、喜んで参加させていただきたいと思いますが、本当に、私のようなものでよろしいのでしょうか」
「長井先生は謙遜家でいらっしゃる。先生の研究は、以前から注目しておりました。いつも、その視点の良さに感心しております。ぜひ参加していただきたいと思っております」
長井は、有頂天になった。こんな大先生が自分の研究を評価してくれている。そんなことは思いもよらなかった。国の補助金に申請しても、いつもけられていたので、自分の研究は評価されていないと思い込んでいたのだ。
「ところで、メンバーとして、どのようなことをすればよろしいのでしょうか？」
「それは、簡単です。先生が、いまやられている研究をそのまま続けていただければと思っています」

「それは、薄膜成長に及ぼす磁場効果ということでしょうか」
「ええ、まさに、おっしゃる通りの研究テーマです。初年度は、とりあえず５０００万円程度の予算をつけようと思っています」
「５０００万円ですか！」
長井は驚いた。いままで、１００万円程度の予算でさえ申請しても簡単に却下されていたものが、いきなり巨額の予算がつく。これならば、超伝導マグネットを買うこともできる。
「ただし、条件があります」
「それは何でしょうか」
「河野君との共同研究にして欲しいのです」
「河野先生ですか？」
長井は、あのいつもしかめっ面をした河野のことを思い浮かべて、少し憂鬱になった。
「実は、河野君は、わたしのかつての教え子でして、長井先生のこともかなり評価しておるのです」
長井は、意外だった。
「私の学科に、若くて元気のいい助教授がいる。かなり面白い研究もしているので、機会があったらチャンスをやってくれと言われていたのです」
あの河野がそんなことを言っているとは思わなかった。長井は、河野のことを誤解していたのかもしれない。
「実は、これだけの予算を委託するとなると、やはり、その代表には教授がついていただかないといけないということが慣例となっております。そこで、河野君に北東大学の代表としてメンバーに入ってもらい、長井先生は、プロジェクト研究員として活躍してもらいたいのです」
長井にとっては、肩書きは関係ない。予算さえ使えれば問題なかった。
「もちろん、河野君には、研究は長井先生の自由にさせるように言っております。河野君は、それで異存はないということです。すでに、彼の内諾も得ているのです」
長井は、こんないい話はないと思った。
「それと、もうひとつお願いがあります。ポスドクをひとり受け入れて欲しいのです。もちろん、その人件費は、プロジェクト全体でみることになりますから、先生の予算を使う必要はありません」
長井は驚いた。予算だけではなく、人手も手当てしてくれるというのだ。こんないい話はめったにあるものじゃない。

「白井先生、本当にありがとうございます。私には、まったく異存はありませんので、よろしくお願い致します」
「先生にそう言っていただいて、肩の荷が下りました。先生の研究は、このプロジェクトでも大きな柱のひとつになると考えておりました」
長井は、天にも昇る気持ちだった。自分にも運が向いてきた。長井は河野のもとに出かけた。
「河野先生、ありがとうございます。先生のおかげで、国の大型プロジェクトに参加することができました」
河野は、いつもの渋面とは違って、終始、機嫌が良かった。
「白井先生にまかせておけば、すべてうまくいくよ。期待しているから頑張って欲しい」
　長井が、大型プロジェクトに参加するという話は、学長の岡谷も喜んでくれた。地方大学では、外部資金をいかに導入するかが、重要な使命となっている。それが大学評価の基準となっているからである。ただし、資金獲得で評価されるのは、長井ではなく、そのリーダーである河野である。河野の上機嫌は、そこから来ていた。
　しかし、長井には、実質的に研究が進められれば、それで良い。誰がリーダーかということは、関係なかった。
　家に帰って、由美子にこの話をすると、すごく喜んでくれた。
「あなたすごいじゃない。国の予算がもらえないといって不平をこぼしていたけど、世の中には、評価してくれるひとがいるのね。白井先生には感謝してもしきれないわよ」
その通りだと長井は思った。

アカデミックハザード　－　長井の物語　5

陥穽

新しいプロジェクトのおかげで、長井は自分の欲しい装置をいろいろと取り揃えることができた。どうしても欲しかった超伝導マグネットを買うこともできた。その運転には、高価な液体ヘリウムが必要となるが、プロジェクトのおかげで、金の心配をすることなく実験することができる。これも、すべて白井のおかげだ。

大学も、このプロジェクトには、好意的であった。長井の実験用に新たなスペースまで用意してくれたのである。河野と長井のふたりが学長室に呼ばれ、ぜひがんばってほしいと激励された。

しばらくすると、ポスドクの種田が実験に加わった。種田は東都大学の出身で、白井教授のもとで、博士課程を修了したらしい。その後、白井の研究室で、そのまま博士研究員として勤めていたが、今回のプロジェクトで急遽、長井のもとに派遣されることになったのだ。

種田は、長井からみると、あまり優秀な研究者には見えなかった。本当に、東都大学出身なのだろうかと長井は思ったほどである。それでも贅沢は言えない。手足になって動いてくれる戦力は貴重である。

長井が困ったのは、種田の手先が不器用なところであった。うっかりミスで、よく装置を壊すのだ。大学院生からは、何とかしてほしいと長井は訴えられた。

さらに、種田は、歳があまり離れていないこともあってか、長井を見下しているところがある。自分が東都大学出身というプライドも持っているようだ。長井が手取り足取り実験指導をしているにもかかわらず、長井は無視して、河野の腰巾着のように振舞っている。

しばらくすると、長井は種田のことは戦力として期待しないようになった。それよりも、大学院生のふたりの方がよほど頼りになる。プロジェクトの二年目からは、長井と大学院生だけで実験を進めることにした。種田は、あまり研究に熱心ではなく、大学にもあまり顔を出さなくなった。

超伝導マグネットを使った実験は、期待以上の成果を出した。やはり、永久磁石の磁場では弱すぎる。磁場を系統的に変化させることで、いままでは見えなかった傾向がはっきりとデータに現れていた。

さらに、半年ほど実験をしてみると、いままでは不明であった効果も系統的に見えるようになってきた。長井は、白井に感謝していた。白井のおかげで、この実験が可

能となった。長井は、その成果を学会に発表することにした。その準備を大学院生としていると、河野がやってきた。
「長井先生、今回の学会発表は種田にやらして欲しい。どうだろう」
種田の貢献はほとんどないに等しい。長井は、断ろうと思ったが、白井からのたっての依頼ということで、しぶしぶ承諾した。
　ポスドクは身分が不安定である。これは、長井が身をもって体験している。だから、できるだけ成果を上げて、パーマネントの職を手に入れたい。白井としても、自分の弟子にできるだけ便宜を図ってやりたいというのが本音のようだ。
　学会発表に向けて、研究室は急に忙しくなった。いざ、発表となると、それまで気づかなかった部分が見えてくる。その空白を埋めるように、大学院生の武田も夜遅くまで実験室に残って研究に励んだ。
　そんな時でも、種田はさぼってばかりいた。ただし、種田がいてもじゃまになるだけなので、長井たちには、その方がありがたかった。下手に実験の手伝いをさせて、すべてをパーにされたのではかなわない。
　発表用の図面も、すべて、長井と武田が用意した。学会発表の時は、研究内容を簡単に紹介する概要を事前に提出しなければならない。これも、長井たちが用意した。河野と白井からは、自分たちの名前も共同研究者に入れて欲しいと依頼された。長井は、概要のトップに武田の名前を入れたかったが、種田の発表なので、仕方なく種田をトップにした。
　学会での発表は大きな反響を呼んだ。種田の発表はうまくなかったが、長井らが準備したパワーポイントの図面と、何よりも内容がすばらしかった。
　気をよくした長井は、論文の執筆にかかった。この成果ならば、かなり有名なジャーナルに載るであろう。長井は、英語で論文を書き始めた。種田にも手伝うように頼んだが、英語は苦手なので、いやだと断られた。長井は、またしても、種田が本当に東都大学の出身者なのかを疑った。
　ほぼ論文を書き上げたころ、白井から電話がかかってきた。白井は上機嫌で、長井たちの成果を褒めてくれた。
「長井先生、わたしが期待したとおりの活躍をしていただき、ありがとうございます。来年の予算は大幅に増額しますよ」
と約束してくれた。白井は、５０００万円の予算を初年度はつけてくれた。長井は、そのうち３０００万円ほど使うことができた。二年目も同じ額の予算がついたが、河野が大部分を使ってしまっていて、調整に少し苦労していたのだ。増額してもらえば、

その分は自分の実験に使える。長井は、わくわくしながら、今後の実験計画を練っていた。今回の研究は自分のライフワークになるかもしれない。白井に感謝した。
「わたしもプロジェクトの責任者という立場なので、先生の論文を少し見させていただきたいのですが、いかがでしょうか」
「もちろん、喜んでお願いします。先生がお気づきの点を指摘していただければ幸いです」
長井は、快く承諾した。論文は、第三者の目を通した方が良くなる場合が多い。書いている本人では、気づかないことが多いからだ。白井ほどの人物であれば、適切な指導をしてくれるに違いない。
白井は
「そうですか。それでは、私の方で、しばらく論文の原稿を預からしていただきます。どこまでお役に立てるか分かりませんが、じっくり読ませていただきます」
長井は、論文原稿と図面をＣＤにコピーして、ハードコピーと一緒に白井に送った。
　ところが、それから一月経っても、白井から論文は戻ってこない。白井が超多忙なことは分かるが、あまり、論文を寝かせているとライバルに先を越されることがある。長井たちの研究成果は、すでに学会でも発表しているので、似たような実験をしようと思えば、装置さえあれば真似ることは可能なのである。
　長井は、白井に連絡をとって、原稿を戻して欲しいと依頼したが、白井はもう少し待ってくれといって煮え切らなかった。
　仕方がないので、白井のチェックは受けないまま、長井は論文誌に投稿することにした。投稿先としては、この分野では世界的に有名な応用物理関係のジャーナルを選んだ。
　今回の論文はオリジナリティが高いので、問題なく掲載の決定が下されるだろう。そう長井は期待して、審査結果を待っていた。一週間ほどで結果が届いた。あまりにも早い対応なので、長井は喜んだが、意外にも掲載拒否の判断が下されていた。そして、拒否の理由を読んで驚いた。
「同様の内容の論文がすでに本誌に投稿され、掲載が決まっている」
と書いてある。
　いったい、誰に先を越されたのだろうか。長井は悔しい思いをした。同じような発想で、実験をしている人間が世界のどこかに居たのだ。いくら忙しいとはいえ、白井に一ヶ月も放って置かれたのが手遅れになったのかもしれない。
　長井がこの話をすると、武田は地団太を踏んでくやしがった。

長井は
「これで終わったわけではない。頑張って、もっと認められる結果を出していこう」と励ました。
　ある朝、武田が論文のコピーを持って、長井の部屋にやってきた。相当あわてているようである。
「先生、この論文を読みましたか？」
長井は、自分たちを出し抜いたグループの論文に違いないと思った。どこのグループだろう。オリジナリティが高いから、きっと、アメリカかドイツのグループに違いないと考えていた。
　ところが、武田から渡された論文を見て、長井は愕然とした。そこには、種田、河野、白井の連名で、長井たちが用意した論文が、そのまま掲載されていたのである。
「なんだ、これは！」
長井は、思わず気色ばんだ。武田も、怒り心頭である。図面や文章、すべて、長井と大学院生が準備したものと全く一緒である。ちがうのは、著者が変わっている点だけである。
　こんなことが許されていいわけがない。長井は論文を抱えると、河野の部屋に向かった。
「先生、これはいったいどういうことなんですか」
河野は、軽蔑したような視線を長井に投げかけ
「長井君。いったいどうしたんだ。そんな大声を出して。もっと、落ち着きたまえ」
「この論文です。これは、わたしが書いた論文です。なぜ、それが先生たちの名前で投稿されているんですか」
「ああ、それね。それは、種田君が書いたので見てくれといって持ってきた論文だよ」
「何を言っているんです。これは、私が白井先生にお渡しした論文です。図面だって、全部わたしと大学院生で準備したものではないですか」
「君はなんと失礼なことを言っているんだ。それじゃ、白井先生が君たちの論文を盗んだと言ってるようなもんだぞ」
「盗んだようなではなく、盗んだんです」
「どこに、そんな証拠がある。証拠もなしに、白井先生を糾弾するとは、名誉毀損だぞ」
この時、長井は悟った。河野もグルなのだ。白井が後ろで種田と河野をあやつり、長井の成果を横取りしたのだ。

「わたしは、許しません」
そう宣言すると、長井は河野の部屋を後にした。

アカデミックハザード　－　長井の物語　６

裏切り

長井は、吉川のところに相談しにいった。吉川も、長井と院生の武田が夜遅くまで頑張っていることは知っている。それに、種田は、ろくに大学にも顔を出していない。吉川は、長井の話を全面的に信じてくれた。

「しかし、難しい問題だな」

とも言った。長井たちの仕事が、種田たちによって盗まれたものだということを証明するのが難しいというのだ。

他人の研究成果を横取りするという行為は、研究分野ではよくあることらしい。手口は簡単である。学術雑誌に論文を掲載するためには、論文審査を経なければならない。審査は、その分野で評価されている研究者に依頼される。ただし、審査員が誰かということは投稿者には秘密である。

論文に何らかの不備があると審査員が判断すると、その論文は投稿者に戻され、修正を要求される。しかし、論文が掲載に値しないと判断されると、掲載は拒否される。これをリジェクトと呼んでいる。

この論文の審査には時間がかかることが多い。場合によっては、投稿から論文掲載まで一年以上かかることもある。

ここで問題が生じる。例えば、優れた内容の論文が投稿されたとしよう。審査員は、その論文を読んで感心する。この論文が表に出ればかなりの反響を呼ぶかもしれない。

ここに不正の温床がある。審査期間を意図的に延ばして、査読結果の連絡を遅らせるのである。この間に、自分のグループで、論文と同じ内容の実験をこっそり行い、それを別の学術誌に投稿するのである。

仕上げは、投稿が終わった時点で、オリジナルの論文の不備をみつけて、リジェクトしてしまう。実は、ここが重要である。もし、リジェクトせずに、その論文が掲載されてしまうと、論文が投稿された日付が論文に載ってしまう。

いくら、自分たちの論文が先に出版されたとしても、投稿日をみれば、どちらがまねをした論文かということがばれてしまう。リジェクトさえすれば、その論文が日の目を見ることがない。

お人よしの日本人は、知らずに、この方法で成果を横取りされたにもかかわらず、気がつかないことが多いという。日本人が書く英語論文は、英語の体をなしていないことがあるので、難癖をつけやすいのである。この方法で、アメリカ人研究者に成果

を騙し取られたにもかかわらず、その論文が掲載されるジャーナルを読んで、あの有名な先生が、自分たちと同じことを考えていた。先を越されたが、自分たちの方針はまちがっていなかったなどと、喜んでいるお人よしまでいるというのだ。

しかし、今回の手口はひどすぎる。種田はほとんど実験には協力していない。それに、論文を書いたのは長井である。種田の貢献はゼロでと言ってよい。もちろん、河野や白井もそうだ。まさに、論文と研究成果を、そっくりそのまま盗まれたことになる。

長井は、文化省に直接訴えることにした。そして、このプロジェクトを取り仕切る先端研究課に連絡をとった。電話では話せないことなので、じかにあって話を聞いてもらうことにした。

担当者は、はじめは、長井の訪問を露骨にいやがっていたが、あまりにも長井がしつこいのに根負けしたのか、課長補佐の山岸が時間をとって面会してくれるということになった。

学校の業務での出張ではないので、長井は自腹を切って、東京まで出かけた。

妻の由美子に事情を説明すると、憤慨したが

「文化省まで出向くのはやりすぎではないかしら」

と心配した。

長井は

「こんな非道が通るようでは、日本の将来は暗い。文化省の役人ならば、きっと分かってくれるはずだ」

と由美子に言った。

長井が文化省を訪れるのは、今回がはじめてであった。受付で用件を述べると、応接室に通された。

課長補佐の山岸は、約束の時間に１５分ほど遅れてやってきた。

「いや、お待たせしてすみません。来年度の予算を決める時期でして、猫の手も借りたいくらいに忙しいんですよ」

と、山岸は口ではわびているが、暗に貴重な時間をとらされていることを非難するような態度であった。

文化省の役人にとって、地方の国立大学の助教授などはカスのような存在である。逢うだけありがたいと思えという態度がみえみえだった。

長井は、白井たちが今回の国家プロジェクトで行った悪事を訴えた。国が科学技術創造立国のために税金を投入して計画したプロジェクトを利用し、不正を働いている。この不正を許したのでは、日本の将来は危ういと訴えた。

山岸は、だまって長井の話を聞いていたが、途中で、上司のところに報告に行った。

長井は、文化省ならば、長井の味方になってくれると期待していた。

再び、戻ってきた山岸は

「先生のお話はよく分かりました。省としても、独自に調査をしてみましょう。もし、先生の言うような不正があったとしたら、当方としても、看過できません」

と言ってくれた。初対面の時に比べると、かなり好意的である。

「やはり、文化省は、自分の話を分かってくれた」

長井は、東京まで来て本当によかったと思った。

久しぶりの東京であったが、長井はすぐに自宅に戻った。

東京で一泊することも考えなかったわけではない。以前世話になったエレクトロニクス研究所のひとたちに挨拶をしようと思ったからだ。

しかし、今回は完全にプライベートの出張だ。それに、何より、娘の洋子の寝顔を見たかった。

自宅には夜遅く着いたが、由美子は寝ずに待っていてくれた。

「由美子、東京まで行って正解だった。文化省のひとは、わたしの話をちゃんと聞いてくれたよ。調べてくれるそうだ」

「それは良かったわね」

由美子も喜んでくれた。洋子はすでに寝入っていた。長井は、そっとふすまを開けて、洋子の寝顔を見入った。なんと可愛い寝顔なんだろう。この子は、俺が守る。そう心に誓った。

文化省

山岸は、長井という田舎の地方大学の助教授の話を最初は聞き流していた。

「この忙しい時期にやってくるとはなんと非常識なやつなんだ」

それが山岸の本音だった。長井のような下っ端と話をしてもなんの足しにもならない。ところが、話の途中から、山岸はただならぬものを感じた。

「それでは、長井先生は、自分の研究成果を白井先生に横取りされたとおっしゃるのですか？」

「その通りです。今回の件はあまりにもひどすぎます」

山岸はすぐに、長井の話は本当のことだろうと察した。

似たような話はいくらでもある。前にも、自分の成果を教授に横取りされたと訴え出た助手がいた。この教授は、助手が書いた論文を無断で、しかも自分ひとりの名前で発表してしまったのだ。山岸があきれたのは、誤字や脱字も直さずに、そのまま投稿したことである。内容をチェックせずに名前だけすげかえたらしい。当然、理は助手にある。

しかし、しょせん助手は助手である。なんの権限もない。訴えられた教授が裏に手をまわして、結局、助手の方が、大学をクビになってしまった。その後、助手がどうなったか山岸は知らない。いずれにしても、研究の世界で生きていく道が断たれたことは確かである。いったん、教授になると刑事犯罪でもしないかぎりクビにはならないからだ。教授に逆らった助手に生きる道はないのである。

「先生の言われるとおりだとすると、共同研究ではないですか。普通ならば連名で発表するというのが当たり前のような気がしますが」

山岸には、白井がわざわざ長井の名前をはずした理由が分からなかった。共同執筆にしておけば、今回のようなことにはならなかったはずだ。白井に、何か意図があったのであろうか。

「もちろん、そうです。白井先生に論文をお見せしたときには、私の名前と大学院生の名前もあったのです」

「それなのに、掲載された論文からは、おふたりの名前が消えていたということですか」

山岸は、この件をどうしたものか思案していた。おそらく長井の言っていることは正しいのであろう。わざわざ東京まで出てきて訴えているのは、義憤にかられたからに違いない。

しかし、訴えている相手は、あの大物の白井である。文化省にもかなりの影響力がある。地方大学の一助教授の長井がとてもかなう相手ではない。自分が長井に味方したとしても、何もうるものはないだろう。

大物教授による研究成果の搾取など、日本の大学では日常茶飯事である。いちいち、それを問題視していたのでは、大学行政が成り立たない。それに、変に騒ぎたてたら、それこそ財産省の連中を刺激して、せっかくここまで苦労して積み上げてきた研究予算を削られる可能性もある。

長井の話を聞きながら、山岸は

「この件をうまく利用して白井に恩を売ることはできないだろうか」
と考えていた。
「先生のお話はよくわかりました。もし、それが本当だとしたら大問題です。とは言いましても、相手は、東都大学の工学部長です。かなり、しっかりした証拠がないと、逆に名誉毀損で訴えられる可能性もあります。わたしの一存では判断ができかねますので、上司に相談させていただけませんか？いえ、決して、先生のわるいようには致しません」
長井に異存はない。非は明らかに白井や河野にある。きちんと調べれば、どちらが正しいかはすぐに分かることだ。
「もちろんそうしてください」
すると山岸は
「それでは、しばらくお待ちください」
と言って、部屋を出ていった。

山岸は、長井を残して、すぐに、白井と懇意にしている高等教育局長の志村のところに向かった。志村と白井は一連托生である。志村は、東郷や白井たちと組んで、東都大学主導の大型予算を組むことで出世の階段を上ってきた人間である。役所では、財産省からどれだけ予算を獲得するかで評価されるからだ。
長い間、大学を管轄する部署は冷や飯ぐらいであった。教育関係の予算は、小学校や中学、高等学校が圧倒的に多い。しかし、志村は、科学技術創造立国ということを標榜し、大学の研究予算の増額を進めてきた。
山岸は、この話を直接自分が白井に持っていくよりも、志村というクッションを置いたほうがよいだろうと判断した。いずれ、志村はもっと上にいくに違いない。山岸は、その引きも期待しているのだ。

長井という北東大学の助教授が直訴にきているという話をすると、志村は驚いたようである。
「直訴とは穏やかではないな」
山岸の説明を聞くなり、志村はこうもらした。もちろん、志村も、今回の件は、白井に非があることは百も承知である。
「わかった。山岸君、よく教えてくれた。さっそく白井先生にはわたしから連絡しておく」

あうんの呼吸である。志村も、山岸の意図を悟ったようだ。
「長井という助教授にはなんと言えばよろしいでしょうか？」
「文化省として、きちんと調査するとでも言っておいてくれ」
「わかりました」

部屋に戻ると、長井は不安そうな顔をして山岸をみた。
山岸は、長井に向かって
「上司に話しましたところ、理解を示してくれました。省としても、独自に調査をしてみましょうと言っております。もし、先生の言うような不正があったとしたら、当方としても、看過できません」
すると長井は感謝するようにふかぶかと頭を下げた。
山岸は軽蔑するように長井をみた。
「こいつも、ばかなことをしたもんだ。もう研究者としての将来はないだろう」
この世は、すべて力である。正義など関係ない。権力を握ったものが勝ちなのだ。
　長井も、こんな文化省に直訴などというバカなまねをせずに、白井に恩を売って、うまくのしていく方法をえらべばよかったのだ。世間知らずといえば、それまでだが、山岸は長井をみて、自分は、こんな人間にならないように気をつけようと思った。

通報
　白井が、そろそろ帰宅しようと書類の整理をしていると、文化省から電話がかかってきた。高等教育局長の志村であった。
「白井先生、大変なことになりました」
「志村局長、どうしました。そんなにあわてて」
「先生は、北東大学の長井という人間をご存知ですか」
「北東大学の長井ですか」
白井は、少し考えてから、いま自分が責任者をつとめているプロジェクトに参加している助教授のことを思い出した。
「ええ、私の研究プロジェクトのメンバーですが、どうかしましたか」
「それが、本日、文化省に現れまして、白井先生は自分の研究成果を盗んだと訴えたのです」
「はあ？」

白井にはまったく心当たりのないことであった。
「それは、何かのまちがいではないですか」
「いえ、本当です。最初は、すぐに追い返そうかと思ったのですが、話の内容が具体的過ぎまして。一応、先生のお耳に入れておいた方がよいかと思い電話した次第です」

白井は、さっそく河野に連絡した。そして、驚いた。河野は、勝手に、長井と武田のふたりを著者からはずし、論文を投稿していたのだ。しかも、すでに掲載されているという。
「河野君。こんなことを勝手にされては困る。これは、長井君の研究だろう」
すると、河野は
「白井先生、もともと長井をこのプロジェクトに巻き込んだのは、あいつに煮え湯をのませたかったからです。これは、いいチャンスですよ」
という。
白井は、東郷の言葉を思い出した。
「いいか、他人から成果を盗む際には気をつけろ。共著というかたちにしていれば、あとからクレームがついても言い訳ができる。完全に盗むのは、相手にばれない時だけだ」
「しかし、どうするというのだ。長井はわざわざ文化省まで行って、クレームをつけたんだぞ」
「それを逆に利用するのです。状況証拠はこちらに有利です。なにしろ、学会発表は種田がやっていますから」
確かにそのとおりではある。
しかし、研究プロジェクトははじまったばかりだ。長井には、まだまだ研究成果を出してもらわなければならない。
昔ならば、いくら金を使っても誰からも成果を求められなかった。ところが、最近は、役所がやたらとやかましい。税金を使うのであるから、それにみあった成果が欲しいというのだ。それに、説明責任もあるという。
白井に言わせれば
「税金を湯水のごとく使っているのはおまえらのほうだろう」
と文句のひとつも言いたいが、いまのご時世では、多額の予算をもらったからには、やはり少しは研究成果が出ているというそぶりを見せないといけない。
その金の卵をここで失ってしまうのだ。河野のようなバカに成果などまったく期待

できない。長井を葬りさるにしても、もう少し泳がせておきたかった。それが、白井の本音である。

しかし、こうなったからには、この事態を素早く収拾する必要がある。長井というばかはおろかにも文化省に注進に及んだ。真っ向から白井に反旗を翻したことになる。不穏な芽は、すぐにつみとる。これが、いままで権力抗争のなかで得た白井の哲学である。

白井は不本意ではあったが、河野の作戦にのることにした。そして、文化省の高等教育局長の志村に電話をかけた。

アカデミックハザード　－　長井の物語　7

解雇

　つぎの日、長井が大学に行くと、吉川が部屋の前で待っていた。

「長井先生、いったい何をしでかしたんだ。岡谷学長がかんかんに怒っている。いますぐ、部屋に来るようにということだ」

長井は、いったいどうしたのだろうと、いぶかしく思いながら、学長室に向かった。ドアを開けるなり、岡谷の叱声が届いた。

「長井君、君はいったいなんて事をしでかしてくれたんだ」

「学長、いったいどうしたのですか？」

「君は、きのう、わたしに無断で文化省をたずねて、白井先生の悪口を言ったそうだね」

「いえ、悪口ではなくて、不正を告発してきたんです。文化省のひとも分かったと言ってくれました」

「何を言っている。今朝、文化省の志村高等教育局長から、わたしあてに電話があった。あなたの大学のきちがいがやって来て、ありもしないデタラメで、白井先生を攻撃したとお怒りだ」

「そんなはずはないです」

「来年の予算も削ると脅されたよ。そんなことをされたら、地方大学はひとたまりもない。君は、本学をつぶす気か」

長井には、いったいどうなっているのか、訳が分からなかった。

「先ほど、白井先生にも電話しておいた。文化省から、すぐに白井先生に連絡が入ったらしい。白井先生もかんかんだったよ」

長井は驚いた。文化省が独自に調べると言ったのは、白井に告げ口をするということだったのか。

「君は、種田君が出した成果を自分のものと嘘をついたうえ、彼が君の成果を横取りしたと言っているそうじゃないか」

「学長、ちょっと待ってください。わたしの成果をうばったのは種田のほうです」

「東都大学の白井先生が、そんな嘘をつくわけがないじゃないか。先生は、うちの大学に五〇〇〇万円もの予算を回してくださったんだ。恩をあだで返すとは、まさに君のことだ」

とりつく島がないとはまさにこのことだ。岡谷学長は、はなっから長井のことを疑っ

てかかっている。
「君には、しばらく謹慎してもらう。自宅で待機しているように」
長井は、抗弁しようとしたが、この場では何を言っても信じてもらえない。
部屋に戻ると、吉川が待っていた。
事情を説明すると、吉川は困ったような顔をした。
「それは、まずかったな。文化省の役人は白井の味方だ。ただではすまないだろう」
長井は何を言っているのだろうと思った。
さらに吉川はこう言った。
「長井先生、あなたは若すぎる。人生経験が足りないのだからしようがないが、役人の言葉を真に受けるのはバカ正直すぎる」
しかし、長井に何ができただろうか。
自宅待機になった話を由美子にすると
「あなたも、いままで働きすぎるくらい働いてきたのだから、気分転換のつもりで、少し休んだら」
と暢気なものである。
娘の洋子は、いつもなら深夜にしか帰ってこない長井が一日中家に居るので大喜びである。長井も、洋子の相手をしているうちに、この謹慎は、いい気分転換になるかもしれないと軽く考えた。ところが、事態は予想以上に深刻であった。

　自宅待機になってまもなく、吉川から電話がかかってきた。臨時教授会議で、長井の懲戒免職が決まったというのである。
長井は
「そんなばかな」
と思った。こんなことで、どうして自分が大学をやめなければならないのだ。自分にまったく非はない。悪いのは白井や河野である。
吉川は
「力になれずに申し訳ない」
と、電話口で頭を下げた。
　教授会では、河野が中心になって、長井のことを攻撃したらしい。文化省を怒らせたということが長井には不利となったようだ。
　河野は、自分たちが盗んだ論文のコピーを教授たちに回覧し、このように、すでに論文を正式に発表していると、まず主張した。

　それにもかかわらず、長井は、あたかも自分の成果を横取りされたと言いふらしている。これでは、文化省の役人が怒るのも当たり前である。そういって、教授たちを説き伏せた。すでに論文になっているという事実には重みがある。
　さらに、河野は、学会発表の予稿も回覧して見せた。そこには、筆頭著者として種田の名前が載っている。
　そのうえで、河野は、学会発表も種田が中心になって行ったと主張した。名前がトップにあるのが、なによりの証拠であると。
　そして
「実験を少し手伝ってくれた長井や、院生の武田を連名で載せてやったのは、こちらの温情である」
　とも言った。それを逆手にとって、ずうずうしくとも、論文にまで名前を載せろと長井は要求してきた。
　しかし、論文に書かれている研究内容は、河野の指導のもと、種田ひとりで行ったものである。そこで、長井たちの名前は、今回は載せないと通知した。
　すると、長井は気が狂ったように怒鳴り散らし、文化省まで出かけて、恩人の悪口を言った。
「文化省でも噂になったようですよ。田舎からきちがいがやってきたって。どうです、みなさん。こんな人間は、大学人としてふさわしくないでしょう。即刻、辞めさせるべきと考えますが、いかがでしょうか」
　こう訴えたのである。そして、緊急動議として、長井の懲戒解雇を提案した。
　長井に同情的な教授もかなりいたが、論文や学会発表の予稿を証拠として持ち出されたのでは、強固に反対することはできない。そして、投票の結果、この動議は決議され、学長の岡谷も同意した。

白井と河野
　教授会の決定を河野は白井にすぐに伝えた。
「白井先生、うまくいきました。長井は懲戒解雇です」
「そうか。それはよかった」
「ところで、平田はどうしてますか」
河野は、平田のことが気になっていた。自分にとってはいい金づるであった。うまく北東大学に引き入れたら、大枚の礼金をせしめるつもりでいたのだ。それに、自分の

子飼いとして、便利に使えると期待もしていた。ところが、長井のおかげで、平田の採用は見送られた。しかも、平田からは、裏金のことで責められている。

　いずれ平田を大学に戻したい。河野はそう考えていた。

「平田君か、可もなく不可もなしだろう。種田よりは、はるかにましだが」

なにしろ、種田は装置を壊しまくった。被害がないだけでもよしとしなければない。白井の評価は、その程度である。なにしろ、平田がどんな研究をやっているかなど気にもとめていない。

　これが、大学院生であれば、たまには指導もしなければならないが、ポスドクであれば、なんの心配もない。

「それを聞いて安心しました。いずれ、平田はこちらの大学で引き取りたいと思っておりますので、そのときは支援をよろしくお願いします」

白井にとっても自分に忠誠をちかう子飼いがひとり増えるのだ。損はないはずである。河野はそう思っていた。

「ところで、河野君。油断は禁物だぞ。窮鼠猫をかむということもある。長井はいくら大学をクビになったといっても、今後なにをしてくるか分からない。つねに監視をしておいてくれ」

「先生、それなれば大丈夫です。種田を使って様子を探るようにしています」

河野は思っていた。とてもではないが、種田に実験などさせられない。かたっぱしから装置を壊しまくって、学生の顰蹙を買っているからだ。

　教授会では、長井たちの論文は種田の仕事と主張したが、このままではいずれボロが出るであろう。

「長井の監視役ぐらいが種田にはふさわしい」

アカデミックハザード　－　長井の物語　８

新生活

まさか自分がクビになるとは考えていなかったので、長井は一時、放心状態となった。悪事を働いたのは、種田と白井である。その連中が、罰せられずに、どうして、自分が大学を辞めなければならないのか。

文化省の役人を信じた自分がばかだった。甘いと言われれば、それまでだが、これほどの仕打ちを受けるとは思ってもみなかった。

吉川によると、長井の話が本当であろうとなかろうと文化省にはどうでも良いことらしいのだ。それよりも、長井が変に騒ぎたてて、プロジェクトにけちがつくことを恐れたのである。

場合によっては、財産省から、難癖をつけられて、次年度の予算を削られるおそれがある。予算確保が第一で、正義など、役所には関係がないのである。

真実はどうであろうと、プロジェクトリーダーの白井を守って、長井を切る。これが、文化省の出した結論である。そして、学長には、予算を削減すると脅して、早々に、長井を辞職に追い込むということで、迷惑なさわぎに決着をつけたのである。

長井は裁判に訴えることも考えたが、すぐにあきらめた。役所など信用できない。たとえ、裁判に訴えても、役人はすべて同じ穴のむじなである。

長井にとっての救いは、由美子がそれほど落ち込まなかったことだ。由美子の両親は、娘が将来は教授夫人になると喜んでいたようであるが、今回の事件で、胸を痛めているという。長井は、申し訳なく思った。自分の軽率な行動で、由美子の実家にも迷惑をかけてしまった。

しばらく途方にくれていたが、長井はなんらかの収入を得なければならない。妻や娘を養っていかなければならないからだ。このままでは、生活が干上がってしまう。そこで、長井は、予備校の講師をしている先輩のことを思い出した。先輩を頼って東京に行くことも考えられる。しかし、由美子の両親は、娘が地元を離れるのを反対するに違いない。長井は、いろいろと考えたすえ、この街で塾でも開いてみようかと思いついた。

由美子に相談すると、それはいい考えだと賛成してくれた。長井の歳では、再就職もかなわない。ましてや、白井の手がまわっているであろうから、他の大学や研究機関への就職もかなわないに違いない。

由美子の両親は、長井が大学をクビになったことには大いに不満であったようだが、

孫の洋子が生まれたいま、由美子を連れ戻すこともできないと思ったようだ。

いざとなれば、由美子は実家で何不自由なく暮らすことができるのだが、由美子は、長井と洋子との暮らしを何よりも大切に思っていた。

由美子の実家は、結局、長井の塾開業を支援してくれることになった。長井は小中学生を対象として算数を教える塾を開いた。吉川も陰で支援してくれたようで、すぐに十人ほどの生徒が集まった。収入としては、十分ではないが、スタートとしては、まずまずであった。

最初は、やむにやまれずはじめた塾であったが、長井は、この仕事がしだいに好きになっていった。子供も好きであるが、生徒が、それまで、どうしても分からなかった問題が、長井のおかげで解けるようになった時に見せる満足した笑顔が、長井を幸せにした。

長井の塾は、次第に繁盛するようになった。この塾に通っている生徒の学力が急に伸び始めたので評判になったのだ。長井は、子供たちに、いたずらに問題演習を数多くやらせるのではなく、その根本原理が分かるように教えた。場合によっては、その学年で学習している内容よりも、かなり前の段階までさかのぼって、基礎からじっくり教えた。

学問は、基礎の積み重ねである。多くの子供は、いちばん土台となる基礎のところでつまずいていることに長井は気づいたのである。基礎が分からないままでは、いくら時間をかけて勉強しても、本当の内容を理解することはできない。

ある時、由美子の父親の知り合いから、大学受験に失敗した高校生を教えてくれないかと依頼を受けた。長井は、小学生や中学生を対象に教えていたので、どうしようか迷った。というのも、地方でも、高校以上は大手予備校が勢力を伸ばしてきており、長井のような小さな塾の出る幕はなかったからである。

しばらく迷ったすえ、長井は引き受けることにした。大学浪人生は、小中学生とは異なる時間帯に教えることができる。引き受けた生徒は、数学にすっかり自信を失っていた。長井は、いきなり難しい受験問題ではなく、教科書に載っているような基礎問題から始めた。

長井は、この学生が決して理解力に劣っていないことを見抜いた。そして、
微分や積分などでも、計算問題としてではなく、その概念を修得することを中心に据えて教育を行った。すると、ある時を境に、この生徒の学力は急激に伸び出した。何よりも、本人が自信を持ったことが大きい。そして、見事に翌年の受験では、難関を突破した。

生徒の親は、長井と由美子の両親に感謝した。これが、きっかけになって、大学受験生までが長井の塾に集まるようになった。長井の年収は、大学の助教授時代よりも、はるかに高くなっていた。

長井は、自分の経験を通して、いままでの受験参考書や小中高生向けの参考書が、原理を理解することよりも、ある問題に対しては、どうやれば解けるかというふうに対処療法的なものが多いことに不満を持っていた。

そこで、生徒が独学で学習できるような数学の参考書を書いてみた。予備校で講師をしている先輩の山元に原稿を読んでもらったら

「これは面白い。ぜひ出版しろ」

ということで、出版社を紹介してくれた。

長井の本は好評を博した。

出版社からは

「続編も書いて欲しい」

と依頼を受けた。

本が売れたのをきっかけに、長井の塾の生徒数が、また増加した。長井は、研究に未練がないわけではなかったが

「塾をやっていくのも悪くないな」

と思うようになった。

大学に勤めていた頃は、朝早くから夜遅くまで研究室で過ごしたため、家族との団欒が少なかった。塾では、どんなに忙しくとも、すぐそばに家族が居る。

数学の参考書の続編を書いている時に、出版社から電話がかかってきた。

「長井先生ですか、教育出版社の梶村です」

「いや、梶村さん。まだ、お約束の原稿は仕上がっていませんが、どうかされましたか？」

「それが、とても言いにくいことなのですが、先生の本の出版はとりやめになりました」

長井は驚いた。いったい、どういうことなのか。梶村は、あれだけ長井に続編を書くように薦めたではないか。

「実は、上層部から、この企画はとりやめる様にという指示があったのです。私としては、ぜひ続けてシリーズ化したかったのですが、とても残念でなりません」

長井は聞いてみた。

「その理由は何ですか？」
「私も、よく分からないのですが、どこからかクレームが入ったそうです。わたしは、かなり抵抗したのですが、いかんせん宮仕えの身です。会社の上層部の方針には逆らえません」
長井は、これ以上梶村を責めるのはやめた。しかし、いったい、どうしたと言うのだろうか。
　そんな時、新聞に白井大介の日本学会賞受賞のニュースが載った。驚いたことに、受賞理由に、長井の研究成果である
「薄膜成長に及ぼす磁場効果」
という業績も入っている。ひどい話とは、思ったが、もう、これ以上、白井とは関わりたくない。長井は、新聞を投げ捨てた。
　あくる日、吉川が長井のもとを尋ねてきた。どうしているか心配していたという。長井の塾が繁盛している様子を見て安心したようだ。
　吉川は、あの種田が東都大学に戻ったという話をした。長井たちからだまし取った研究が認められたので、いずれは助教授に昇進する予定という。
　長井は、あの不器用でやる気のない人間が、最高学府の助教授になると聞いてあきれ返ったが、自分とは、もはや関係のない別世界のことである。
　吉川は、白井の日本学会賞受賞のことも話題にした。吉川の友人が、東都大学の助教授をしていて、白井からにらまれているという。その助教授の話によれば、白井の研究成果は、ほとんどが、他人から盗みとったものらしい。吉川は
「こんな人間をのさばらしておくのは許せない」
と言った。
　最近、白井がバックにいることをいいことに、河野が大学内で勢力を伸ばしているという。長井の事件をきっかけに、学長をも篭絡したらしい。もともと、地方大学の学長は中央に弱いから、白井の支援が得られるとあらば、河野に味方するのも当然である。

河野の計画
　河野は新聞で白井の日本学会賞の受賞を知った。これはめでたい。これで、白井の権威はさらに増すであろう。北東大学で、白井の弟子を喧伝している自分にとっても、よろこばしいことである。

河野はさっそく白井に電話をかけた。
「白井先生、今回は日本学会賞の受賞おめでとうございます」
「河野君か。ありがとう」
「さすが白井先生ですな。弟子のひとりとして誇りに思います」
白井にとっては、河野を学問の弟子とはあまり考えたくないが、助手時代の裏金工作など、いろいろと使いがってがあることは確かである。
「実は、おめでたい話の途中で申し訳ないのですが、少し気になる動きがありまして」
「なんだ？いったい」
「先生は長井のことは覚えていますか？」
一瞬、白井はだれのことか頭に浮かばなかった。
「あの文化省まで出かけていって、先生のことを糾弾しようとしたとんでもない奴ですよ」
白井はやっと思い出した。似たような話はやまのようにある。自分の仕事を横取りされたと、陰で文句を言っている連中も多い。しかし、長井のように自分に面と向かって反旗を翻した人間は珍しい。
「いったいなにがあった？」
「実は、長井は大学を辞めた後、私塾を開いているのですが、最近、高校生向けの本を出版しまして、それがけっこう評判らしいのです」
「それがどうした」
「いや、しばしば予備校の講師がおおばけしているものですから。中には何を勘違いしたのか、自分をオピニオンリーダーと勘違いして、マスコミにしゃしゃり出て、意見をするものもいます」
「河野君は何を言いたい」
「長井がへたにマスコミに登場して、先生の足を引っ張るようなことを言い出すとも限りません」
白井はようやく河野の意図が分かった。
「だったらどうしろと」
「どうやら、長井の本は好評でシリーズ化する予定のようです。先生のお力で止めることはできませんか」
「出版社はどこだ？」
「教育出版です」
教育出版社は、高校向けの受験参考書を出している出版社である。最近、一般向けの

教養書として、新書の出版も計画している。そういえば、副社長の太田が挨拶に来たばかりである。
「よし分かった。そこの副社長を河野君に紹介しよう。あとは、そちらでうまくやってくれ」
「了解いたしました。せっかくのお祝いの日に、余計な話を持ち出しまして、申し訳ありません」
「気にすることはないよ」
河野は、日本学会賞受賞の件で、それどころではなかった。取材が殺到しているし、日本全国から祝辞が寄せられている。長井などという小物のことは、すぐに頭から消えていた。

　河野は少しあせっていた。実は、北東大学で不穏な動きがあるのだ。
　問題はふたつある。ひとつは、長井が指導していた大学院生の武田である。どうやら､長井の名誉を回復しようと必死に､いろいろな部署に働きかけているようなのだ。河野は、武田も長井と一緒にやめさせようと画策したが、いかんせん相手は大学院生である。自分で学費をはらって大学に来ている人間を、そう簡単にやめさせることはできない。しかも、あの吉川が武田の指導教官を買ってでたのだ。これでは、簡単には手を出せない。
　もうひとつの火種は種田である。研究室の装置をかたっぱしから壊しているのだ。大学院生の評判もよくない。
「種田のようなだめ人間に、あのような立派な論文がかけるはずがない」
そんな声がまわりから上がっているのだ。
　それを機に、長井の懲戒解雇処分に対して疑問の声をあげる教員も現れてきた。吉川が裏で糸をひいているのはわかっている。幸いにして、今のところ学長は河野に好意的である。なにしろ、北東大学が獲得する外部資金のかなりの部分を河野が担っている。
　河野にはみるべき成果はないが、いくら金を使ったかが評価されるのが、いまの科学政策であり大学である。
「とにかく長井は、はやめにつぶす必要がある」
　河野は、白井の紹介ということで教育出版社の太田に電話をかけた。最初は、出版に他人が口をはさむのは困るという態度であったが、長井が文化省や東都大学からにらまれている問題人間だと話すと

「それは本当ですか？」
と驚いた様子である。
「ええ、文化省の山岸さんに聞いてもらえれば分かりますよ。いざとなったら白井先生に直接聞いていただいても結構です」
「そうですか。先生の話が本当でしたら、当社としても再考せざるをえません。何しろ、教育を標榜している出版社です。教育者として問題という人間を放置しておくわけにはいきません」

　つぎの問題は、長井の塾であった。評判が評判を呼んで、結構、繁盛している様子なのだ。種田にときおり探らせているが、生徒数は増加の一途をたどっているという。
「結構、生徒も長井のことをしたっているようです」
種田はこう言った。
「それはまずいな。長井がとんでもないことを生徒たちに吹き込むかもしれない」
河野は何か手を打たないといけないと思っていた。
　そして、種田を使って、長井の塾の評判を落とすことにした。いざとなったら自分も出かけよう。そして、長井の塾に子供を通わせている親に、長井が東都大学と文化省に逆らった人格破たん者だと吹き込むのだ。

罠
　長井は、塾の切り盛りで多忙な生活を送っていた。予備校で講師をしている先輩の山元に、出版がとりやめになった話をすると
「それは不可解だな。俺が少し事情を探ってみよう」
と言ってくれた。
　長井は、そろそろ人を雇う時期かと思っていた。これだけ繁盛すると、月謝などの管理も大変である。妻の由美子が事務仕事を手伝ってくれているが、それでは足りないくらいである。
　いまの収入を考えると、先生をひとり雇っても、十分やっていける。それに、長井は、そろそろつぎの子供が欲しいと思うようになっていた。
　ある日、由美子がこんな話をしてきた。
「ねえ、あなた、最近、塾をやめていく子が増えてきたんだけど、思い当たるふしはない」

長井には初耳だった。いままでは、生徒数は増えたことはあれ、減ったことなどない。あまりにも生徒数が増えたので、ひとりひとりへのケアがおろそかになってしまったのかもしれない。長井は反省した。

　ところが、つぎの月になると、二〇名近い生徒が塾をやめた。まだまだ余裕はあるものの、これは異常事態である。長井はいったいどうしたのだろうかと思い悩んだ。自分の教育の仕方が変わったわけではない。実際に、塾に通ってきている子供たちは

「算数がよく分かるようになった」

と、みな喜んでいる。

　しかし、その後も塾をやめる生徒の数は増え続け、ついに二〇名を切るところまで落ちこんでしまった。いったい、どうしたのだろうか。

すると、ある生徒が泣きながらやってきた。

「先生、僕も、来月からこの塾に来てはいけないと言われました」

長井は、驚いた。

「誰がそんなことを言っているの？」

「はい、お母さんです。もう塾にはいくなと言ってるんです」

「それに、長井先生は悪い人だから、つきあっちゃいけませんって。僕は、そんなことはない。先生はいい人だと言ったんだけど、絶対だめだって」

そういうと泣き出した。

これは、いったいどういうことなのだろう。この時になって、ようやく、長井は何か意図的なものを感じた。

　由美子の話によると、誰かが長井が人格破綻者だと、生徒の親たちに言い回っているらしい。吉川が、あわてたように長井のところにやってきた。

「悪い噂をきいたんだけど、塾の方はうまく言っているの？」

「いえ、それが、生徒が急に減ってしまいました。いまでは一〇名もいません。このままでは生活が成り立ちません」

「そうか。すると、あの噂は本当だったんだな」

「何ですか、その噂って」

「河野や種田が、長井先生の塾の親たちに、良からぬ噂を吹き込んでいるというんだ」

「良からぬ噂？」

「ああ、長井先生は、大学で不祥事を起こしてクビになったと言っているらしい。さらに、東都大学の偉い先生と喧嘩をして、その先生を貶めるために、文化省に嘘までついた人格破綻者だとも言っているようなんだ」

長井は驚いた。そんなことを言われたら、普通の親ならばショックをうけるだろう。
吉川ははき捨てるように、こう言った。
「本当に卑劣なやつらだ」
　東都大学という名前は、子供を持つ親にとっては、神聖な響きを持っている。その大学の先生に楯をついたとなると、なんという不届き者なのだと映ってしまう。
　そして、東都大学と喧嘩しているような人間の塾に通っていたら、大学から睨まれて、将来はないと脅されたようだ。
「そんなばかな。なんで、そんなことをするんですか？」
「私もよく分からないのだが、白井の日本学会賞受賞と関係があるらしいのだ」
「私が邪魔するとでも思ったのでしょうか？」
「ああ、長井先生には、文化省に訴えたという前科がある。いまのうちに、少しでも不安材料はつみとっておこうという算段かもしれない」
長井は、もう白井たちとは関わりたくないと思っていた。それにも関わらず、向こうが勝手に攻めてくる。
「白井も、長井先生が文化省まで注進に及んだということは、すこしショックだったのかもしれないな。なにしろ、いままでは、どんな無体なことをしても、誰もが黙って泣き寝入りしていたらしいからね。自分に対する大胆不敵な挑戦ととったのではないだろうか」
長井はむなしくなった。
　そして、それから間もなく、ついに生徒がひとりも居なくなった。聞くところによると、河野が、長井つぶしに積極的に動いたらしい。地元では、北東大学教授といえば、ネームバリューが高い。その教授から、じきじきに
「長井は人格破綻者だ」
と言われれば、普通の親なら、子供を無理に長井の塾に通わせようとは思わないであろう。
　長井は、辛抱強く待ったが、生徒は増える気配をみせなかった。仕方なく、長井は土木作業に従事することになった。それだけでは、収入が足りないので、ついには由美子もパートとして働くことになった。
　このことは、由美子の実家には伏せていたが、一月ほどしてばれてしまった。由美子の母が、いくら電話をかけても日中留守になっている。おかしいと思って、家を訪ねてみると、塾は休業状態で、孫の洋子は保育所に預けられている。
　由美子の父は、娘がパートで働いていると聞いて激怒した。いままで、目に入れて

も痛くないほど可愛がってきた娘である。それが、こんな苦労をしているとは思わなかったのだ。すぐに、実家に戻るように命令した。しかし、由美子は長井を支えると言って、父の指示には従わなかった。

業を煮やした父は、強制的に由美子と洋子を連れていったのである。長井は、妻が自分を見捨てたと勘違いしているが、由美子は、決して、長井を見捨てたわけではなかった。

アカデミックハザード　－　長井の物語　９

再出発

　東京から戻ると、長井は、すぐに自分の履歴書と業績を英語にまとめた。また、英語で発表している論文の別刷りも併せて、東都大学の吉野助教授あてに送った。祈るような気持ちだった。

　自分は、再び、研究を続けることができるだろうか。もし、それが、可能だとしたら、どんな苦労もいとわない。そう決心していた。

　その日、山元から電話がかかってきた。長井は、河野や白井たちの嫌がらせで塾を閉じるはめになったことを話した。山元は、長井が土木作業員をしていたという話をすると、本当に憤慨した様子だった。

「実は、出版社に出版差し止めの事情を聞いたが、のらりくらりで、まともな返答が来ない。そこで、顔を知った役員のひとりに聞いてみて分かった。東都大学からの横槍なそうだ。おそらく、その白井とかいうおっさんの悪だくみだろう」

長井は、白井の執念深さにぞっとした。

「俺は、出版社に嫌味をいってやったよ。そんなことぐらいで、大事な企画をつぶすとは何事かとね。向こうは恐縮していた」

山元の声を聞くと、長井は元気が戻ってきた。

「そこで、別の出版社に話を持っていった。すると、長井の本のことは知っていて、ぜひ、自分のところで出させて欲しいと言っている。原稿はどうなっている」

「ええ、書き上げてはいます。ただ、いろいろなことがあったので、そのまま放っておきましたが」

「そうか、それでは、すぐに俺宛に送ってくれ。いいか、長井、白井なんていうばかに負けちゃいけないぞ」

そして、山元は嬉しそうに、こう報告した。今度、山元が書いた本が、毎朝新聞出版賞を受賞するというのだ。長井は、自分のことのように嬉しくなった。

山元は

「白井の受賞と違って、こちらは正真正銘の賞だ。金も使っていないし、陰で動いたりはしていない」

と言って、豪快に笑った。

山元と、話をしたおかげで、長井は自分も頑張ろうという気になった。

　数日後に、吉野から自宅に電話があった。

「長井先生ですか。東都大学の吉野です」
「ああ、吉野先生、わざわざ自宅まですいません」
といっても、長井には自宅しか居る場所がない。いまはルンペン状態なのだ。
「長井先生の業績を見せていただきました。大したものです。同じ研究者として感心させられました」
「そう言っていただくと、うれしいです」
「実は、オーランド大学から連絡がありまして、博士研究員としてならば、受け入れ可能ということです。先生ほどの方に、いまさらポスドクというのは申し訳ないのですが、いかがでしょうか」
長井は、飛び上がらんばかりの気持ちだった。
「とんでもありません。喜んでお受け致します」
これで、また、研究生活に戻れる。
「実は、先生の研究を良く知っている教授がオーランド大学に居りまして、ぜひ、ドクター・ナガイをお招きしたいということです。いずれ、ポストが空けば、正式な職員にしたいと言っているそうです」
「そんな、とんでもありません。私は、研究さえできれば何でも結構です。」
長井の正直な気持ちだった。
「それと、渡航の件ですが、正式な就労ビザが必要になります。もちろん、必要な書類は先方で準備してくれるそうです」
吉野は、日本側の推薦状も必要と言っている。長井は、吉川に頼むことにした。
「実は、私の研究室に居た加治という学生をアメリカに送ったことがあるのですが、ビザの関係で、白井たちにクレームをつけられたことがあります。今回は、それを防ぐためにも、慎重に行いたいと思っています」
　長井は、アメリカ行きに向けて準備を始めた。英会話の勉強も再開した。貯金はあまりないが、それでも数ヶ月は何とか食っていける。この話を、妻の由美子にしたかったが、実家のガードが固い。長井としても、いまの境遇を考えると、堂々と連絡をとるのは気が引けた。

　あくる日、長井が、書斎にこもって、アメリカの生活環境やオーランド市について調べていると、突然、玄関のドアが開いた。
「ただいま」
「パパ、ただいま」

妻の由美子と、娘の洋子だ。長井は、急いで玄関に出向いた。
由美子は
「ごめんなさい、しばらく留守にして。父がどうしてもというので、仕方なく実家に帰っていたの。ところが、一週間もしたら、洋子がパパに会いたいってぐずりだして、言うことを聞かなくなったの。そうしたら、さすがの父も洋子がかわいそうになったのか、もう帰ってもいいって許してくれたの。それに、父や母には事情を全部話したわ」
長井は自分が大きな誤解していたことに気づいた。てっきり、由美子が自分にあいそをつかして家を出て行ったものと思っていたのだ。
洋子は、長井にだっこをせがんでいる。しばらくぶりに、長井は娘を抱きしめた。
　由美子は
「あなた寝なくていいの。夜勤に堪えるでしょう」
とのんびりしたことを言っている。
「土木作業はもうやめにした。というより、クビになったんだ」
「クビ？」
「ああ、無断で遅刻したら、すぐに辞めさせられたよ」
　長井は、由美子たちが出て行った日からの出来事を由美子に聞かせた。たて看板に赤ペンキを投げつけたという話を聞いて、由美子は目をまるくしていた。
　由美子に捨てられたと思い、自殺まで考えたと話すと、由美子は不機嫌になった。
「あなたは、そんなに私のことが信じられなかったの。情けないわね」
すると、洋子も口真似して
「パパ、情けないわね」
と言った。
思えば、たった一〇日ほどであったが、いろいろなことがめまぐるしく動いた一〇日間だった。そして、長井はアメリカ行きのことを話した。
由美子は反対するかと思ったが、
「その方がいいと思う」
と、あっさり賛成してくれた。
「あなたにはじめて会った時のことを覚えている。あなたは、自分の研究のことを熱心に話してくれた。内容はちんぷんかんぷんだったけど、ひとつのことに、こんなに夢中になっていられるあなたを見てうらやましかった。そして、自分の好きなことに熱中できるひとは素敵だと思ったの。だから、あなたには、いつかは研究の世界に戻

って欲しいとずっと思っていた。いいチャンスじゃない」
「棚橋のお父さんはどう思うかな」
「父も賛成よ。きっと。今回の白井達の悪巧みのことを話したら、本当に憤慨していたもの。いつかは、懲らしめてやるといって、それこそ、なだめるのが大変だったんだから」
「そうか。みんなが賛成してくれるなら心強い。最初は、別々に暮らすことになると思うが、しばらくの間は辛抱してほしい」
そういうと
「洋子に会えなくて、さびしがるのはあなたの方じゃない」
と由美子にからかわれた。

　アメリカに出発する日には、何と、板倉と吉野と長谷川の三人が成田空港まで見送りに来てくれた。就労ビザは、オーランド大学の計らいで、かなりの短時間で取得することができた。
　妻の由美子は、三人に命の恩人とばかりに深く頭を下げて感謝した。
　板倉は
「長井先生。あなたほどの実力があれば、きっと、向こうでも立派な成果を挙げられる。健闘を祈ります」
と言ってくれた。
　吉野は
「何か、困ったことがあったら、気軽に、僕に言って下さい。それに、私の指導教官だったデイビッド・コーンウェル教授は、本当にいい人です。彼に相談するのもいいかもしれません。それから、加治にあったら、よろしく伝えて下さい」
と言った。ふたりとも本当にいいひとだ。この人たちにめぐり合えて本当に良かった。こう思うと、自暴自棄になって、東京まで出てきたことが、あながち間違いではなかったという気がしてくる。
　長井は、たったひとりでアメリカに行くことに心細い気もしたが、加治が居てくれるので安心していた。何しろ、海外にでかけるのは、これが初めてだ。長井は、ビザのスタンプのつかれた、真新しいパスポートを握り締めてゲートをくぐった。
　後ろを振り向くと、娘の洋子が小さな手をいっぱいに振って、さよならを言っている。
「近いうちに必ず、妻の由美子と洋子を迎えに来る」

長井は、一生懸命手をふりながら、そう心に誓った。

オーランド大学

長井は、ロスで国内便に乗り換えて、オーランドの町に向かった。オーランドは、大学街で人口は二万人ほどである。空港は町外れにあるが、大学からは、車で二〇分ほどだという。

空港には、加治が出迎えにきてくれた。初めて会うので、加治はボール紙にナガイシンゴ様と書いたボードを胸に掲げていた。

長井は

「加治君ですね。今日は、わざわざありがとうございます」

と礼を言った。

「長井先生、お待ちしておりました。ようこそオーランドへ」

と言って、長井を駐車場まで案内した。加治の車は、中古のヒュンダイの小型車だった。

「ホンダが欲しかったんですが、ちょっと、わたしには高すぎました」

アメリカでは、ホンダ車が人気で、中古でもなかなか安くならないらしい。

大学にはあっという間に着いた。

「いまは、まだ大学のゲストハウスが空いていないので、長井先生には、大学のホテルの方に泊まっていただきます。ちょっと費用はかさみますが、一週間ほどで、ゲストハウスが空きますので、それまでの辛抱です」

高いとは言っても、一泊四〇〇〇円程度である。それほど痛い出費ではない。

「今日は、長旅でお疲れと思いますので、ゆっくりホテルで休んでください。明日の朝、僕が迎えに来ます。それから、研究所の方に案内します」

長井は、加治にていねいにお礼を言った。

加治はとても、爽やかな好青年だ。彼が、白井に睨まれていたというのは、どんな理由からなのだろう。いずれ、ふたりで話す時がくるかもしれない。

長井は、シャワーを浴びると家に電話した。由美子に無事到着したことを報告していると、後ろから洋子の声が聞こえてきた。最近、言葉を話し出したのだが、とてもおしゃまで、すぐに電話に出たがる。

「パパおちゅかれ」

などと言っている。長井は、急にホームシックにかかった。由美子の言ったことは本

当だった。自分が洋子に会いたくてたまらない。

その日は、時差の関係で、朝の三時に目がさめてしまった。ベッドの上で、ごろごろしながら、自分の人生を振り返った。白井にひどい目にあわされ、人生に絶望したが、いろいろな人の助けで、ここまで来ることができた。

「きっと、アメリカで成功してみせる」

そう心に誓った。

朝の八時半に加治が迎えにきた。一応、スーツにネクタイを締めていたが、加治はラフな格好である。

研究所は、ホテルから歩いて五分ぐらいという。アメリカの大学の構内はとても広い。バスツアーが組まれるくらいである。研究所までの道のりを長井は楽しんだ。キャンパス内は、公園のようにきれいだった。瀟洒な建物が多い。

加治は、最初に、長井をこの大学に紹介してくれた東都大学の吉野助教授の指導教授であったデイビッド・コーンウェル教授のもとへ案内した。デイビッドは、吉野が言ったとおり、とても気さくな紳士であった。ところどころ聞き取れない箇所もあったが、長井はなんとか無難に挨拶をこなした。英会話を必死になって勉強してよかったと痛感した。

長井が驚いたのは、デイビッドが長井の研究の内容をよく知っていたことである。わずかの間に、論文などを取り寄せて勉強したらしい。長井が感心するような助言も貰った。明らかに優秀であることが分かる。日本では、こういう教授には、めったにお目にかかれない。

つぎに加治は､長井がお世話になるジョージ･ギブソン教授のもとに連れて行った。ギブソン教授は二メートル近い大男で、長井の手をとって歓迎してくれた。

「ドクター・ナガイと一緒に仕事ができるのは嬉しい」

と言ってくれている。長井は感動した。これこそが研究者の世界である。たとえ、顔をあわせたことがなくとも、互いの論文を読むことで交流が生まれる。長井もギブソン教授の論文は、かなり読んでいた。論文を読めば、ある程度、研究者としての相手の技量を推し量ることができる｡ギブソンも長井も互いを高く評価していたのである。

ギブソン教授から、三日後の研究所のセミナーで長井の研究を紹介するように言い渡された。このことは、渡米前から言われていたので、長井はパワーポイントを用意していた。内容は、種田が学会で発表したものを英訳し、さらに、データを加えたものである。

加治は、つぎに実験室を案内してくれた。長井は、実験設備が充実していることに

驚いた。かつて博士研究員として過ごしたエレクロニクス研究所以上である。加治によると、この研究所は州政府から高く評価されており、資金援助も豊富なのだという。加治は何も言わないが、長井は加治の論文が、あの有名なワールドサイエンスに掲載されたことを知っていた。その仕事も、この研究所の評価を高めることに貢献したのだろう。

長井は、はやく実験にとりかかりたいと思った。そして、自分も世の中に認められるような成果を出したい。加治のいきいきとした顔を見て、長井はそう思った。

長井のセミナーには、研究所のほぼ全員が集まっていた。総勢五〇人ほどであろうか。長井は、日本国内で開催される国際会議では、何度か発表したことがある。ただし、その時の参加者は八割以上が日本人である。今日は、加治以外は、みな外国人だ。長井は緊張した。

長井は四〇分ほどかけて、自分の研究内容を発表した。何度も発音練習をしてきたが、ところどころつまずいた。自分が博士論文で行った研究から、最近の磁場効果までを網羅した。長井は、心配したが、参加者からは大きな拍手をもらった。

デイビッドも

「素晴らしい講演だった」

とほめてくれた。ギブソンも満足気にうなずいてくれている。

すると、参加者のひとりが手を挙げた。

「ドクター・ナガイ、あなたが最後に発表した磁場効果は、ドクター・タネダによって論文として、すでに発表されている。くわしくは読んでいないが、内容的にはまったく同じだと思うが、どうしてなのか」

と聞いてきた。長井は、どう返答したものか迷っていると、加治がかわりに答えてくれた。

「ロイ、その論文のラストオーサーの名前を確認したかい」

ロイは首をかしげている。すると加治は

「シロイだよ」

と答えた。すると、ロイは納得したようだ。

「そうか、あの論文もシロイがドクター・ナガイの仕事を盗んだものなんだね。ひどいやつだ」

もう、この研究所では、加治の一件で、白井の悪行は広く知れ渡っていた。他人の成果を自分のものとするなど、研究者として許せないとみな怒っているのだ。しかも、自分がだました相手を失脚させる非道まで行っている。

長井は思った。白井たちが自分に対してしたことを話せば、この人たちはもっと怒り狂うだろう。しかし、そんな人間を日本では大先生として崇めている。そして、文化省でさえ、白井を全面的にバックアップしているのだ。日本人として恥ずかしい。そう長井は思った。

セミナーの後、ギブソン教授のグループメンバーを紹介された。みな、長井の講演に感動したと言ってくれた。メンバーは三人で、インド人のバラチャンドラン、韓国人のキム、そしてイタリア人のアルベルトであった。現在、博士研究員として頑張っているという。キムとアルベルトは機会があれば、自国に戻りたいらしい。バラチャンドランは、このままアメリカに永住したいと言っている。

キムは

「ドクター・ナガイの講演を聞いて、ある実験を思いついた。一緒に共同実験をしないか」

と持ちかけてきた。

キムが取り組んでいるのは、有機伝導材料である。その薄膜合成に挑戦しているのだが、なかなかうまくいかないようなのだ。磁場をかけてみたら、うまくいくかもしれないと興奮している。

キムも、磁場効果については、一度、調べてみようと思ったことはあるのだが、有機材料には磁性がないから、たぶんうまくいかないだろうと最初からあきらめていたというのだ。ところが、長井の講演で、常磁性体や反磁性体でも効果があると聞いて、がぜん、興味がわいてきたという。

それから、ギブソン教授も含めて、五人は、今後の実験計画について話し合った。幸いなことに、オーランド大学にはマグネットセンターがあって、いろいろな超電導マグネットが自由に使えるという。長井も、久しぶりに興奮を覚えた。

アカデミックハザード　－　長井の物語　１０

加治の話

長井の研究は順調に進み出した。キムのアイデアもあって、長井は、いろいろな材料系での磁場効果を調べていった。その結果、それまでは磁場効果など期待できないと思われる材料でも、効果が見られることが分かった。長井は、何が原因かが分からなかった。常識では考えられないことが起きている。そう感じた。

最近、バラチャンドランが面白い実験を始めた。彼は、永久磁石を利用して薄膜を製造するマグネトロンスパッタリング装置をつかって実験していたのであるが、長井のすすめで､メーカーが既設している永久磁石の配置を変えて実験しだした｡すると、できる薄膜の性質が大きく変化することがわかったのである。

さらに、長井は、磁石の強度をもっと強くできないかということを提案した。しかし、永久磁石では磁場の上限が決まっている。この時、加治から朗報が届いた。日本の研究グループが新しい超電導磁石の開発に成功したという論文がワールドサイエンスに掲載されているという。

さっそく図書館で、その論文を読むと、何と永久磁石と同じかたちをした超電導磁石で、一七テスラというとてつもない磁場を発生できるという。

長井は、さっそく開発した教授に連絡をとった。すると、驚いたことに、その研究グループのひとりがオーランド大学のマグネットセンターにポスドクとして派遣されているというではないか｡さっそく､その日本人研究者に会い､共同研究を申し出た｡喜んで、共同開発してくれるという。

装置の設計は長井が担当した。バラチャンドランは、この新しい装置で製造した最初の薄膜のデータを興奮した面持ちで、ギブソン教授に報告した。その場にはグループの全員が顔をそろえていた。ギブソン教授は

「こんなに特性が上がるとは、まったく予想してなかった。これは、すごい成果だぞ」

長井も、自分のアイデアから、こんな画期的な成果が得られるとは予想していなかった。グループは、さっそくワールドサイエンスへの投稿論文を準備することになった。

長井にとっては、加治との交流も大きな財産となった。加治は、結晶成長の専門家であり、いろいろなノウハウと、理論的なバックグラウンドを持っている。薄膜成長も、基本的には結晶成長である。ふたりは、互いの分野のことを、よく議論した。

長井は、最初は英会話に苦労していたが、三ヶ月ほどで、ほとんど不自由を感じなくなった。
加治は
「長井さんの英語力はすごいですね」
と感心していた。研究の世界にいる限り、いずれ英語が必要になると長井は、一生懸命、英会話の勉強を日本でしていたが、それが、ここに来て役にたったのである。しかし、継続とは力なりというが、長井の地道な努力は知らず知らずのうちに実力を蓄積させていたのである。
研究所では、午後三時になると、研究者がティールームに集まってきて、雑談をする。それは、とりとめのない内容も多いが、異分野の研究者が交流することで、新しいアイデアが生まれることもある。みんなは長井の話を聞きたがった。それだけ、長井は期待されているということである。
ある時、長井は加治を自宅のゲストハウスに誘った。友人が、日本からおいしい吟醸酒をみやげに持ってきてくれたのである。長井は、料理が好きで、自分で日本料理を調理する。その日は、てづくりぎょうざを用意して、吟醸酒と一緒に加治に振舞うことにした。
加治の研究も順調に進んでいた。いまでは、研究所のスター的存在になっている。長井は加治が東都大学の出身であることを思い出した。東都大学といえば、白井をはじめとして、河野や種田などひどい人間ばかりである。長井は、本当に苦労させられた。東都大学にはろくなものがいないと思っていたが、加治のような優秀な人間もいるのだ。
長井は
「加治君は、種田という人間を知っているかい？」
と聞いた。
「もちろん、知っています。種田兄弟は有名ですからね」
「兄弟？」
長井は、自分のところにポスドクとして来ていた種田しかしらない。
「ええ、兄の種田は、私が東都大学の博士課程に入った年に、学科の助教授に就任しました。弟は、私よりも、四つ年上で、東都大学でポスドクをしていましたので知っています」
「そうだったの」
「弟も、東都大学の助教授に就任したらしいよ」

「ええ、板倉先生に聞きました。ひどい話です」
「君もそう思うかい」
「弟の方は、白井が命じて、僕から結晶の成長方法をこっそり盗み出しそうとした張本人ですから」
　長井は驚いた。加治が白井の被害にあった件に関しては、それとなく聞いていたが、自分の論文を盗んだ種田が、そんなことまでしていたとは思わなかった。
　加治は、東都大学の博士課程で、指導教授の湯川と一緒に、ある種のセラミックスの結晶づくりを行っていた。つくり方は、ごく一般的な方法で、溶けた原料に種結晶をつけてゆっくりと引き上げていく手法である。原料が固まる段階で、種結晶と同じ方位のものが成長していくので結晶をつくることができる。しかし、どうしても溶けた原料を入れるるつぼから汚れが結晶に入り込んでしまう。湯川が培ったノウハウのすべてを傾けても、この汚れをとることはできなかった。
　あきらめかけた時、加治にひとつのアイデアが浮かんだ。汚れた結晶の中に、この汚染物質を主成分とする化合物が見つかったのだ。この化合物が結晶と共存できるということは、この化合物を融液の中にあらかじめ入れておけば、るつぼの汚染は防げるのではなかろうか。こう考えた加治は、この化合物を合成して融液に浸したところ、見事に良質な結晶の作製に成功した。この知らせに教授は大喜びした。この成功は世界的にも大きな話題になるはずであった。
　湯川は、同僚にこの成功をこっそり打ち明けた。すると、つぎの日に白井から呼び出しがかかった。白井は湯川の仕事をひとしきり誉めた後
「その結晶をわたしにもぜひ見せていただけませんか」
と懇願した。
　湯川は、あまり、乗り気がしなかったが、白井の要求があまりにもしつこいので結晶を見せることにした。
すると、白井は
「よろしければ、しばらく結晶をあずからせていただけませんか」
と言ってきた。
　湯川は、大いに悩んだが、大学で権力を欲しいままにしている白井に下手に逆らうと、どんな仕返しをされるか分からない。しぶしぶながら、結晶を渡してしまった。
　ところが、白井は預かった結晶をなかなか返してくれない。その後、何度か結晶を返して欲しいと懇願したが
「またつくれば良いじゃないか」

という生返事で、結局、結晶は帰ってこなかったのである。

それから、数ヶ月して、加治は驚くべき記事を目にする。東都大学の白井グループが合成に成功した結晶で、海外の大学や研究機関が画期的な成果を得たという発表が新聞に報じられたのである。

加治が、この話を教授の湯川にすると、湯川は愕然とした。おそらく白井は、湯川からだまし取った結晶を、勝手に海外の研究機関に横流ししていたのだ。

湯川が、白井のところに抗議しにいくと、白井は、あれはうちのポスドクの種田がつくったものだと言い放った。それでは、あの結晶を返せと談判したところ、そんな結晶を受け取った覚えはないとしらを切られたという。

湯川は、大学に訴えると抗議したが、なぜか、それから、まもなく、湯川の学術研究補助金の不正使用疑惑が持ち上がった。湯川が、補助金を本来使ってはいけないものに流用していたというのだ。

しかし、それは不正といわれるようなものではなく、機器費を消耗品費に流用したという程度のもので、多くの研究者が行っていた行為であった。しかし、厳密には規定に反するものであったため、湯川は文化省と大学から厳重注意処分となった。

この一件は、なぜかイニシャルではあったものの新聞にも載り、湯川の訴えは誰からも信用されなくなった。かくして、結晶横取り疑惑もうやむやにされてしまったのである。

この処分に怒った加治は、湯川にかわって訴えを起こそうとした。ところが、大学の事務に相談しにいくと、とんでもないと一蹴された。学生の言うことなど、信じないというのだ。さらに、悪いことには、相談をうけた事務員が白井にこっそり告げ口した。

長井は、自分が文化省に抗議に行った時とまったく同じだと思った。

事務員から、加治が白井を糾弾しようとしていると教えられた白井は、激怒するとともに、一方では、心配になった。下手に加治が騒ぎ立てると真実があばかれるかもしれない。

それから加治に対する執拗な白井のいじめが始まった。まず、加治が精神的に異常を来たし、他人の成果を自分のものと言いふらす虚言癖があるという噂を流した。そして、子飼いの部下の種田を使って、加治の実験を妨害するようにした。

ところが、しばらくすると、白井が加治を呼び出した。あることをすれば白井は加治を許してくれると言う。あの結晶をもう一度つくれというのだ。実は、白井の指導しているポスドクの種田には加治の結晶は作れなかったのである。

結晶づくりなど、すぐに真似できると踏んでいた白井はあわてた。出入りの業者を脅して、加治が、どのような原料とるつぼを使っていたかを聞き出したが、結晶づくりは、そんなに甘いものではない。

実は、加治の結晶が評判になって、他の研究機関からもぜひ分けて欲しいという依頼が白井のところに殺到していたのだ。ところが、自分のところではつくれない。そこで、加治に擦り寄ってきたというわけである。

しかし、加治は結晶づくりを拒否した。白井に協力したのでは、湯川に顔向けができない。それに、自分の成果をだまし取った相手に屈することはできない。

すると、白井は加治が大学を辞めるように仕向け出した。加治の両親が、文房具屋を営んでいることを利用して、大学への仕入れを約束するかわり、両親から加治に大学をあきらめるよう説得を頼んだという。

白井は

「ひとには、向き不向きというものがあります。加治君は、よく頑張っているとは思いますが、研究者には向いていません。これから、努力しても、将来、研究者としての道はないでしょう。私としても、つらいが、彼には、博士を断念してもらった方がよいと思っています。ただし、この話は加治君には内緒にしておいて下さい。彼を、あまり傷つけたくないのです」

加治の両親は、東都大学の大先生が加治のことを思って、このような忠告をしてくれているものと信じ込んでしまったようだ。大学を辞めて、家をつぐよう加治に再三再四迫ったという。

「もし、吉野先生に出会わなければ、私は、いまごろ、文房具屋を継いでいたと思います。そして、わずかばかりの大学からの発注を頼りに生きるしかなかったでしょう」

長井は感慨深いものを感じた。そして実感した。加治と自分は、板倉と吉野のふたりによって窮地を救われたのだ。

「種田兄弟のお父さんは、東都大学の教授でした。もう退官していますが、白井とは密接な関係だったと聞いています」

おそらく、いっしょに不正を行っていたのであろう。

「実は、種田兄弟は、東都大学出身ではないのです」

「なんですって！」

「ふたりともできが悪くて、都内の三流私大の工学部にようやくのことで受かったらしいのです」

長井は、やる気のない種田のことを思い出していた。英語ができないというので、

本当に東都大学に入ったのかと疑ったことがある。やはり、そうではなかったのだ。
「それが、どうして東都大学へ」
「からくりは簡単です。博士課程から東都大学に入ってくるんです。実は、博士課程に入学するためには試験があるのですが、それが形骸化しているのです。実際には、指導教官さえ入学を認めてくれれば、無試験で入ることもできます。ふたりとも白井が、自分の研究室に入学させたのです」
　長井には、からくりが飲み込めた。博士課程に入れて、適当な論文を書かせて、自分が博士号を与える。
　課程博士ならば、論文を書かなくても、博士号をとらせることもできる。そして、ポスドクとして飼いならす。それを、恩着せがましく、長井のような研究者のところに送り込み、その研究成果を盗ませる。
「兄の種田は、学生の間での評判は最悪でした。何しろ、講義がめちゃくちゃですし、論文指導もろくにできないのですから」
「兄弟そろってできが悪いというわけか」
「種田の弟は、長井先生の成果を盗んだんですよね。それが業績として評価されたようです。情けない話です。確か、機能制御材料学科に赴任したと聞いてます。いずれ、彼も悪評が立つでしょう」
　しかし、種田兄弟も白井の後ろ盾のおかげで、そのうち教授に昇進するのだろう。白井にとって、ばかな連中を登用すれば、それだけ自分の権力維持につながることになる。長井はやりきれないものを感じた。
「長井先生、いま日本では、板倉先生と吉野先生が必死に白井一派と戦っています。私も少しはお役に立てればと思っています」
「私に、何かできるでしょうか」
長井は、このまま白井たちをのさばらしておくことはできないと思っていた。このままでは、日本の将来があやうい。しかし、何ができるだろうか。

アカデミックハザード　－　長井の物語　１１

人生の転落

公募結果を聞いて平田は目の前が真っ暗になった。自分が合格するかとばかり思っていたのに、あの長井が助教授として採用された。平田は、河野のところに怒鳴りこんだ。

「あなたは、私から大金をせびって、ポストを約束してくれた。それなのに、この結果はどうなっているんですか。いざとなったら訴えます」

平田は、消費者金融から金を借りていた。急いで返さないと行き詰ってしまう。最近は、家族とも険悪な状態になっている。

妻は、平田の選択を責めていた。だまって、企業に勤めていれば安穏な生活が送れていたものを、何をとちくるったから、会社をやめて学者になろうなどと言い出した。挙句の果ては、破産寸前である。

河野は、吉川にしてやられたと唾棄した。

「あいつは、面接した三人の業績がひと目で分かるような表をつくっていやがった。あの表を見せられたら、長井に決まるのは目に見えている。業績があまりにも違いすぎるからな」

河野は、平田の業績が少ないことを暗に責めるようなことを言った。平田は怒った。

「何を言っているんだ。あなたは、金さえ出せば票をとれると言っていたではないですか」

河野は、まずいなと思った。少し飲み食いはさせたものの、選定委員に現金は渡していない。平田からせしめた金のほとんどは、遊興費のパチンコ代に消えていた。

河野の過去

河野は、東都大学の博士課程に進んだころから、自分は研究者に向いていないということを自覚していた。高校時代から、あまり勉強は得意な方ではなかった。やっとのことで、三流私立大学の工学部に合格した。河野の父親は、地方の公立研究所の研究員だったので、息子には学者になって欲しいと思っていたようだ。河野はいやいや大学院に進んだ。

そして、父親のコネで、東都大学の博士課程に進んだ。同級生は、どうしてあいつがと驚いていたようだが、白井のひきで無試験で合格したのだ。しかし、博士課程に

進んでも、研究には身が入らなかった。研究自体が面白くないのだ。しかも、研究のアイデアそのものが浮かばない。

驚いたことに、博士号をとると、白井は河野を助手に採用してくれた。河野の父親は、本当に喜んだ。しかし、河野が白井から命ぜられたのは、裏金づくりだった。文化省から出る研究費には、大学院生をアルバイトとして雇うことが許されたものがある。海外では、大学院生に給料を払うのが当たり前である。日本でも、大学院生の待遇をよくしないと、優秀な学生が大学に残ってくれない。これを危惧した文化省が打ち出した案であった。

白井は、この制度を悪用した。河野に命じて、大学院生がアルバイトをしたように見せかけたのだ。銀行口座は、河野が開設し、印鑑も用意した。そして、せっせと労務日誌を偽造し、口座に金を振り込んだ。多い時は、一年で一〇〇〇万円近く浮かしたこともある。

しかし、ある時、まずい事件が起きてしまった。ひとりの学生が親に確認をとるようにと言われて、河野のもとにやってきたのだ

「河野先生、うちの父から、今年の確定申告で扶養控除が認められなかったが、お前はそれだけバイトをしているのかという問い合わせが来たのですが、なにかご存知でしょうか？」

「扶養控除？」

「ええ、わたしの年収が一〇〇万円を越しているため、扶養控除対象にならないと税務署から言われたらしいのです」

河野はドキッとした。バイトの金は、院生全体に分配し、ひとりだけが突出しないように気をつけていたはずなのだが、どうやら計算を間違えたらしい。

河野は、あわてて白井のもとに行った。

「河野君、それはまずいぞ。バイト代を請求しているということは学生には内緒だろう」

「学会発表の旅費をわたす時に、バイトをしてもらったことにしているとは言っていますが、額は内緒です」

学生には、あいまいな話しかしていない。ひとによっては、自分の肩代わりで、河野がバイト代を請求しているということすら知らないであろう。

「なにをやっているんだ、君は」

白井は急に不機嫌になった。

河野は、不満であった。

「誰のために、こんなことをやっているんだ」
　助手の給料はもらっているとはいえ、河野には、苦労して不正で稼いだ金は、一銭も入ってこない。すべて、白井のふところに入っている。そんなに言うなら自分で管理しろ。そう言いたいところである。
　とは言っても、白井に面と向かって反抗することはできない。それに今回の件は、確かに自分の不注意である。
　もし、この件が公になれば、白井は失脚するかもしれない。とすると、自分は大きな後ろ盾を失うことになる。
「仕方がない。河野君三八万円を出してくれ」
一瞬、河野は白井が何を言っているのか分からなかった。
「わたしに自腹を切れということですか」
「当たり前だろう。扶養控除の額をとりあえず弁償する必要がある。そのうえで、事情を説明すれば相手も納得してくれるだろう」
「そんな大金を準備するのは簡単ではありません」
「君の責任だろう。借金でもして用意するんだ」
まるで恫喝である。しかし、白井には逆らえない。
　河野は、親にたのんで金を工面してもらった。そして、白井にわたした。
　白井がどんなマジックを使ったかは分からないが、学生の親からは、その後苦情は来なかった。
　しかし、学生の間では、河野が不正を働いたという噂が流れた。このまま放置することはできない。そう思った白井の動きは早かった。
　北東大学の知り合いの教授に頼んで、河野を助教授として採用するように働きかけたのだ。そして、この人事は、すんなり決まった。白井は、河野の業績が見るに堪えないものなので、どこかからクレームがつくのではと心配したが、杞憂に終わった。
　就職を依頼した教授からは
「白井先生のご推薦ならば、まったく心配ありません。それに、今度の人事はわたくしに一任されています」
と言ってくれた。もちろん、この人事の謝礼として、教授には、学術研究補助金の大型予算を分配することを約束していた。
「枠Ａの三〇〇〇万円程度でよろしいですか」
と提案すると、教授は大喜びであった。こんな大金は、めったにもらえるものではない。

北東大学は河野の地元である。河野の父は大喜びであった。あのできの悪い息子が白井先生のおかげで、助教授にしてもらった。河野の父は、この時、白井に二〇〇万円を謝礼として渡した。

本来ならば大学の助教授に昇進したということは喜ばしいことなのであるが、河野の気持ちは複雑であった。

まず、河野には研究したいという意欲がまったくない。白井のもとでは、ろくな研究もせず、もっぱら白井が持ってくる予算の管理と、裏金づくりに奔走していた。それなりに大変な仕事であり、白井からも重宝されていた。なにしろ、白井は日本学界賞という大きな賞をねらっている。いくら金があっても足りない。

しかし、研究の指導は、まったく受けていない。もともと、河野は、勉強は苦手であったから、たとえ指導を受けていたとしても、まともな研究などできなかったであろうが。

それが急にひとり立ちさせられたのだ。研究テーマを見つけることもままならない。河野は、白井が主催している「次世代半導体研究会」に所属して、様子をみることにした。適当な仲間をみつけて、共同研究者に入れてもらう。それが、研究しているという振りをするてっとり早い方法である。

幸いなことに、大学というところは、研究をしなくても誰にも文句は言われない。特に、新人の河野には、まわりもきびしいことは言わない。

実際に北東大学には

「大学の本分は教育である」

と主張する老教授が多い。研究などに手を出せば、教育がおろそかになると言って研究をしている連中をけん制している。ところが、教育を標榜するものは、実際には教育にも熱心ではなく、ほとんど大学にも顔を出さないというのが実情である。自分たちの怠慢の免罪符にしているのである。

河野は、実際に講義をはじめると、その準備が結構、大変であることを思い知らされた。河野は、専門科目二科目と、教養科目として「応用数学」の担当になった。専門科目は、本に書いてある内容の受け売りですんだが、「応用数学」は、そうはいかなかった。前任者の教科書をそのまま使ったのだが、なにしろ、河野は、高校生程度の微積分もまともに理解していない。黒板で立ち往生することも多い。次第に生徒から苦情が出るようになっていた。

しかも、河野は人前で話すことが大の苦手である。学会発表では、いつもいじめら

れていた。

最初は大変な思いをしたが、しだいに、学生は、単位さえ与えれば、満足することが分かった。そこで、演習と称して、講義はせずに、毎回テスト問題を課すことにした。解答は、自分で教科書で確かめるように指示した。

また、なんとか理由をつけては、講義をさぼった。意外なことに、学生からは休講が多い先生と歓迎されている。

研究もしない。講義もさぼりぎみとなると、大学の教員は本当に暇である。時おり、学内会議があるが、これも、適当に顔を出していればすむ。

しばらくすると、暇を持てあました河野は、空いた時間に、パチンコに出かけるようになった。もともと大学時代からギャンブル好きではあったが、もっぱら、競馬や賭けマージャンにのめりこんでいて、パチンコは、ほとんどやったことがなかった。

地方では、ギャンブルといえば、パチンコが主流である。大学の近辺にもパチンコ屋が数多く開店している。

最初は、ほんの軽い気持ちではじめたのであるが、ビギナーズラックで、河野は大勝してしまった。半日で、一〇万円という金が手に入ったこともある。もともとギャンブル好きではあったが、しだいに、河野はパチンコにのめり込んでいった。しかし、素人の河野が、そうそう勝てるわけがない。しだいに負けが込むようになり、最近では借金もしている。

それでも、河野はパチンコの魅力から逃れることができなかった。玉が穴にはいってルーレットが回りだすときの快感、そして、最後に、大当たりがくるかもしれないという興奮。研究では、決して味わうことのできない喜びだった。

実は、平田から猟官運動のために必要だと言ってせしめた金も、消費者金融への借金返済に消えていた。幸い、白井のおかげで、かなり大型の研究補助金が河野に交付されるようになった。河野は、装置の納入業者から定価で購入するかわり、リベートを裏で受け取っていた。

アカデミックハザード　－　長井の物語　１２

平田の処遇

　河野は困っていた。平田は、河野が何かしてくれるまで、一歩もひかないという態度である。いまさら金を返してくれと言われても、すでに使ってしまっている。平田の就職先のことも頭の痛い話である。白井に頼めば、何とかしてくれるかもしれないが、平田はそれで満足するだろうか。

「平田君、もう少し待ってくれないか。私が、金のことも君の就職のことも何とか考えてみよう」

しかし、平田は疑わしそうな顔で信用してくれない。これだけの仕打ちをされたのだから、当然といえば当然かもしれない。

「今日のところは、どうか引き取って欲しい」

平田も、このままでは埒が明かないと思ったのか、すごすごと帰っていった。

　河野は、腹がたってしようがなかった。長井さえいなければ、この前の人事は平田に決まっていたはずだ。こんな田舎の大学に研究のできる人間などいらない。

　そうは言っても、いまさらどうしようもない。それよりも、何とか金の工面が必要である。

　河野は、しばらく考えてから、あるアイデアを企てた。うまくいけば、長井も葬り去ることができるかもしれない。

　そして、白井に電話をかけた。

「白井先生、ご無沙汰しております。北東大学の河野です」

「おお、河野君か、久しぶりだね。元気にしているかい」

白井は鷹揚に挨拶した。

「先生には、いつもお世話になっております」

　ここで、河野は、自分の計画を説明した。河野は、長井のことは毛嫌いしていたが、その研究センスには一目置いていた。そのうち、世界的な研究成果を出すかもしれない。河野は、長井をうまく利用してやろうと考えたのだ。

　白井は、河野の策略を聞いて、最初はあまり乗り気ではなかった。長井のことなど聞いたこともない。ましてや、その研究内容など知る由もない。

　しかし、若いのに論文を結構書いているということと、外部資金の獲得にかなり苦労しているという話を聞いて、思いなおした。

　実は、白井は、ポスドクの種田の処遇に困っていたのである。せっかく、博士号ま

でとらせてやったのに、まったくやる気がない。おまけに、研究室の装置を壊しまくっている。

　最近では研究室の学生からも苦情が出ている。昔であれば、学生が研究室の教授に意見するなど考えられなかったことだが､最近の学生は遠慮がない｡場合によっては、親がしゃしゃりでてくることもある。

「先生、あのばかをなんとかしてください」

ひとりやふたりではなく、かなりの学生が種田の存在が迷惑とばかりに、白井のもとに文句を言いにきている。

　今回の計画が、うまく進めば、種田をやっかいばらいできるかもしれない。

　白井は、最近、文化省から打診のあった次世代技術開発プロジェクトをうまく利用することにした。

「ところで、予算としては、どれくらい必要になる」

「５０００万円もあれば、何とかなると思います」

「よし分かった」

「それと、先生にもうひとつお願いがあります」

「なんだ」

「実は、うちで博士号をとった平田というものが居るのですが、仕事がみつからずに困っています。何とかしていただけないでしょうか」

「彼は、できるのかね」

「はい、種田よりは、はるかにましだと思います」

「よし、分かった。種田の後任に平田君を採用しよう。ポスドクならいくらでも自由になる」

「はい、ありがとうございます。本人は、不満かもしれませんが、私の方で何とか説得します」

河野は、自分の計画がすべてうまくいきそうなので、ほくそえんだ。

　しばらくして白井は長井に電話をかけた。ぜひ、自分がリーダーをつとめる予定の研究プロジェクトに参加してほしいという依頼である。何も知らない長井は二つ返事で承諾した。

　河野は、さっそく、出入り業者から５００万円の借金をした。白井の約束したプロジェクトの予算をえさに利用したのだ。いずれ、この借金もプロジェクトの金をやりくりすれば、返せるだろう。河野はそう踏んでいた。

　河野は平田を呼んで、当座の資金として２００万円を渡した。そして、東都大学で

ポスドクとして採用してくれるという話をした。平田は、ポスドクという地位に不満そうだったが、大金を返してくれた河野には感謝した。

それと、時間がくれば、北東大学に平田を呼んでくれるという。どこまで信じていいかわからないが、とりあえず食い扶持は確保しなければならない。

平田の憂鬱

平田が２００万円の包みを妻に渡すと、ようやく安心したようだった。このうち、５０万円は消費者金融の返済にあてた。

しかし、平田が東京に行くことになったというと、再び妻は不機嫌になった。

「ポスドクとはいったい何なの。あなたは、博士号をとれば大学の先生になれると言っていたじゃない！」

平田は、必死になって説明した。ポスドクは大学の専任教員になるためのステップで、いずれ河野がポストを用意してくれると。

しかし、妻の河野に対する信頼は、すっかり失せていた。

「わたしは嫌よ。いまさら、東京への引越しなんか。寛の学校のことだってあるでしょう。東京に行くなら、あなたひとりで行ってちょうだい」

平田は仕方なく、単身赴任を決意した。

息子の寛は、来年小学校に上がる。幼稚園の友達と一緒に進学するのを楽しみにしている。いま借りている家の家賃も五万円だが、東京で三人暮らしとなると、その倍以上はかかるだろう。

平田は、大学の近くの四畳半の狭いアパートを借りた。トイレは共用で、もちろん風呂はない。しかし、家賃は格安の二万円である。贅沢はしていられない。そして、平田は覚悟を決めた。いまは、河野にすがるしかない。

種田が北東大学に移転すると同時に、平田は東都大学環境量子情報学科の白井研究室のポスドクとなった。白井は、東都大学では、飛ぶ鳥を落とす勢いの大教授で、現在、工学部長である。いずれは学長になるといわれている。

白井は、平田に対して

「君も僕の言うことを聞いていれば、いずれは、ちゃんとしたポストにつけるようにしてあげよう」

と言ってくれた。

平田はほっとした。河野より、はるかに頼りになりそうだ。何しろ、天下の東都大

学の工学部長である。

白井研究室には、高価な装置があふれていた。北東大学とは大違いである。平田は、日本一と言われる東都大学であっても、その設備は貧弱だと聞いていたが、これだけ、立派な研究室を抱えているとは、やはり白井教授は大したものだと感心した。

ところが、驚いたことに、研究室に置いてある高価な装置は、ほとんど稼動していない。中には梱包を解かれていないものもある。

平田は、それとなく研究室の学生に理由を聞いてみた。すると驚く答えが返ってきた。

「誰も装置の使い方を教えてくれないので、僕らも困っているのです」

企業出身の平田には信じられないことであった。

白井先生は忙しすぎて、生徒の面倒をみることはできない。いままで居たポスドクの種田は、装置を動かすたびに壊していたので、白井から装置の使用を禁止されていたらしい。平田は、仕方なく学生と一緒に、マニュアルを見ながら、何とか装置を動かすようにした。

「こんなに立派な装置があるんだったら、他の研究室のひとにも使ってもらったらどうだろう」

学生たちに提案すると

「そんなことをしたら、白井先生に怒られます。これらの装置は、先生が苦労して獲得した外部の競争資金で購入したものです。研究室以外の人間には使わせるなと、きつく命じられています」

「大物のようで、白井は結構けちなんだな」

と平田は思った。

平田は、自分が博士課程でやっていた研究を続けることにした。白井は、好きなようにしろと言ってくれている。

寛大といえば、そう言えなくもないが要は放置しているということである。そういえば、北東大学で、河野の研究室で実験していた時も、助けてくれたのは大学院生や学生で、河野からは指導らしい指導は受けなかった。

研究テーマも、吉川研究室の博士の学生がやっていたものを真似ただけである。

平田の研究テーマは、圧電素子の開発であった。圧電素子というのは、圧力を加えると電気を発生するという性質を持った面白い材料で、身近なところでは、ライターに使われている。ノックすると圧電素子に電気が流れて発火するのだ。

ところが、いま世の中に出回っている圧電素子は鉛を主成分としている。ヨーロッ

パやアメリカで鉛の毒性が問題視されるようになってから、何とか鉛のない圧電素子を開発しようと、多くの研究者が挑戦していた。残念ながら、鉛なしでは、なかなか特性のよいものが得られない。

平田は、つとめていた会社が環境問題を重視していたので、この問題を知ることとなった。このテーマは、当時は、北東大学の吉川研究室で取り組んでいたものであったが、それに便乗させてもらったのだ。

平田は、ずいぶん頑張ったが、鉛入りのものの三分の一程度の特性しかえられなかった。本音では、吉川に指導を仰ぎたかったのだが、河野は許しくてくれなかった。

ふらっと研究室を訪れた白井から

「何をやっているんだい」

と平田は聞かれて

「鉛フリーの圧電素子の開発に取り組んでいます」

と応えた。

すると、白井は関心なさそうに

「そうか」

とだけ言って、去っていった。

研究には、あまり興味がないのであろう。学生に聞くと、白井は、自分が買った装置を、他の研究室の連中が勝手に使っていないかどうかをチェックするために、時々、顔を出すのだという。

確かにケチである。

ポスドクとしての給料は、月３０万円程度であった。ボーナスはもちろんない。あまり、多いほうではないが、贅沢は言っていられない。このうち、２０万円を妻に送った。大学の近くにある学生用の安アパートの家賃が二万円なので、月１０万円でも、何とか暮らしていける。昼は、ほとんど１００円のカップヌードルで済ませていた。

東都大学に赴任してすぐに、平田は、白井に連れられて大学のそばにあるスナックに行った。白井の行きつけらしく、店からは大歓迎された。

はでな化粧をした女性が白井の腕をとると特別室に誘った。

「先生、ご無沙汰ね。いつもの部屋へどうぞ」

平田も同行した。すると、もうひとりの女性があらわれ、平田の横にすっと入ってきた。香水のにおいがきつい。

「こちらは新任の先生かしら」

そう女性がきくと、白井は
「いや、種田のあとのポスドクだよ」
と言った。それを聞いたとたん、平田のとなりの女性はすっと離れていった。貧乏人には用がないということなのだろう。
　部屋にはすでに、学科の教員が六名ほど来ていた。料理や酒にも手をつけずに、白井の到着をまっている。どうやら、全員が白井の子分のようだ。中でも、最も若い助教授の種田が白井のお世話係りであった。白井がたばこをやおら取り出すと、ライターでうやうやしく火をつけている。
　白井は、さきほどの女性をとなりにはべらすと、大きな椅子に座り、肩に手をまわした。平田は、女性が一瞬いやな顔をしたのを見逃さなかった。
「上客とはいっても、あまり好かれていないな」
　そんな感じがした。
　一同はさっそくビールで乾杯した。
「ママ、今日は特別の日だからシャンパンをあけるぞ」
「あらうれしいわ。でも先生、なにがありましたの」
「今度、総合科学者会議の評議員になることに決まった」
「それはすごいですね」
平田は驚いた。今日は、その祝いの席なのだろうか。
上機嫌の白井は、日本学会賞をとりにいくと宣言した。総合科学者会議で重要なポストをとるのは、その布石という。
白井は、かなりの酒好きのようだ。高価なシャンパンをがぶ飲みしている。
　種田は、カラオケの選曲や、マイクの運びと、まるで白井の奴隷である。驚いたことに、北東大学に赴任したポスドクの種田の兄ということである。
　白井の歌は、素人まるだしで、とても聴けるようなものではなかったが、取り巻き連中は、一曲おわるたびにやんやの喝采である。スナックの中は、たばこの煙でもうもうとして、平田には耐えられなかった。
　かなり酔った白井は思い出したように
「おお忘れとった。ここにいる平田君は、河野君の弟子だ」
　と平田をみんなに紹介した。河野という名前を聞いたとたんに、まわりの連中は軽蔑したような視線を平田にむけた。
　種田にいたっては
「あの人は、白井研の恥だ」

　と言い放った。
博士論文を自分で書けずに、まわりが代筆したというのだ。
「だから、北東大学にしか行けなかったんだ」
などと言っている。東都大学の連中は北東大学を見下している。平田は、自分がばかにされたようで不愉快だった。
　飲み会では、板倉という名前が何度も出た。確か、この学科の助教授をしているひとだ。メンバーは、板倉のことを敵と呼んでいる。行動をしっかり監視しないといけないなどと、不穏なことまで言っている。
　どうやら、学科でただひとり、白井に反旗をひるがえしているのが板倉らしい。
　平田にとっては、愉快な飲み会ではなかった。何もかもがつまらない。平田は酒が嫌いなほうではなかったが、白井に誘われても、もう二度と、この会に参加するのはやめようと思った。

アカデミックハザード　－　長井の物語　１３

希望の光

平田は、東都大学でしばらく過ごすうちに、いろいろなことが分かってきた。まず、環境量子情報学科には、研究らしきものをしている教授がほとんどいないということである。

しょっちゅう部屋を留守にしていて、大学ではあまり顔をみない。その割には、夜になると例のスナックに集まって、騒いでいるようだ。そして、白井の敵と呼ばれている板倉は、不遇を囲って、いまだに助教授どまりであるが、彼こそが最も優秀な先生であることも分かった。

白井の行動パターンも読めてきた。研究室に顔を出すのは、水曜日か金曜日の午後である。それ以外は、会議で埋まっているらしいのだ。

そこで、平田は、白井がこない日には、研究室の装置を、他の研究室の学生にも開放することにした。

研究室の学生は

「平田さん、白井先生にばれたら大変なことになりますよ」

と心配しているが、平田は、こんな立派な装置を使わないほうが、よほど問題だと思っていた。

ある日、平田は、板倉に呼び出された。

「あなたが、今度やってきたポスドクの平田さんか」

「はい平田です。よろしくお願いします」

「学生に聞いたんだけど、白井の研究装置を開放したんだって」

「ええ、あんな高価な装置を使わずに放っておくのはもったいないです。できれば、みんなが使えた方がいいでしょう」

板倉は、不思議なものを見るような目で平田をみた。平田は、自分の経歴を板倉に話した。

「そうか。常識があるので、白井の子分にしては珍しいなと思ったけど、会社に勤めたことがあるなら納得できる」

と言った。

平田は、あのスナックに集まった面々のことを思い出した。常識がないという表現は当たっているなと思った。

「しかし、白井にばれたら大変なことになるぞ。覚悟はできているのかい？」

「はあ、覚悟と聞かれると困りますが、私には何も失うものがありませんので、ばれた時は仕方がないとあきらめます」

　すると、板倉は、とんでもない話を平田にした。

　白井は、国費で購入した装置を、下請けに出しているというのだ。数年たったら、廃棄処分を申請し、こっそり中古市場に売り抜けているというのだ。装置が、新品同様なので、結構、いい値がつくらしい。平田は、言葉を失った。

　平田は、思い切って板倉にお願いした。

「先生、わたしを指導していただけないでしょうか。ポスドクなのに恥ずかしいのですが、わたしは、研究者らしい仕事をしたことがありません。北東大学の河野先生にも白井先生にも、指導らしきものをしてもらったことがないのです」

　平田は、板倉の業績を調べて驚いていた。世界的に有名な仕事をいくつもしている。なぜ、白井が板倉を毛嫌いするのか理由は分からなかったが、できるなら、板倉に指導してもらいたいと思っていた。

「平田さん、人間というのは、一生かかっても完成することはない。だから、常に努力することが必要なんだ。私は、胸をはって人を指導できるようなレベルではないと思っている。しかし、平田さんの意気に感じた。私ができる範囲でなら、指導でもなんでもするから、自由に聞いてくれ」

と言ってくれた。平田は喜んだ。これで、まともな研究ができるかもしれない。

　しかし、板倉は

「ただし、白井に、このことがばれると大変だ。だから、白井や、その仲間に悟られないように充分気をつけて欲しい」

と釘をさした。

　平田は、さっそく自分のテーマのことを話した。

「圧電素子か。面白い材料に取り組んでいるね」

「しかし、鉛なしでは、なかなか良い特性のものができないんです」

「それは、当たり前だよ。だからこそ、研究する意義があるんじゃないか」

そして、簡単に結果が出るようなテーマは、研究する意味がないのだとも言った。平田はなるほどと肯いた。

　それから、板倉はこう聞いた。

「ところで、北東大学だったら、この分野で有名な吉川という教授がいるけど指導は受けなかったの」

平田は、河野のもとで博士の指導を受けるにいたった経緯を話した。

「板倉先生は吉川先生のことをご存知なのですか」
「ああ、大学の同期だよ。なかなか優秀なやつだった。平田さんも、師事する相手を間違えたかもしれないな」
　平田は驚いた。世の中は狭いものである。あの吉川教授と板倉は同期なのだ。その後、平田の研究について、いままでの経緯や方針を聞いてもらった。板倉は、適切な助言をしてくれた。
　板倉のおかげで、平田の研究は大きく進みだした。
　幸いなことに、白井は、研究には関心がない。平田が、こっそり板倉の指導を受けていることには、まったく気づいていないようだった。
　板倉は、平田に論文の書き方も指導してくれた。
「平田さんは、良い特性が得られなければ論文にまとめる価値がないと思っているようだが、それは大きな間違いだ。なぜ良い特性が得られないかということを解明できれば、それはそれで立派な論文になる」
　このことを聴いて、平田は気が楽になった。企業にいたせいもあるが、特性の良いものを開発しない限り、意味のない研究だと思っていたのだ。おのずと、大学と企業では研究に対する考え方が違ってくる。それに気付いていなかった。
板倉は
「大学の研究では、ある程度、失敗例を示すことも重要なんだ。他の研究者の参考になるからね。ただし、そこには科学的な考察が入っていなければならない」
　平田は、板倉の指導をうけているうちに、研究が面白いと思うようになった。いままでは、大学のポストにつくということだけに目が行っていて、研究の本質を忘れていた。職をみつけるということも大切だが、研究者として、いかに誇れる業績を残すかということの方が重要である。

日本学会賞
　平田が、白井研のポスドクとして働きだして三年ほどしたとき、白井が日本学会賞を受賞するという知らせが届いた。平田は正直、驚いた。どうみても白井は、まともな研究をしているようには見えない。それが、日本でも最高の栄誉と呼ばれている賞を受賞するというのである。
　この賞は、日本国内の数ある賞の中でも、もっとも栄誉とされている。芸術、文学、スポーツ、医学、理工学の五部門からなり、それぞれの分野で一名だけが選ばれる。

中でも、理工学分野の競争は激しい。
　その年一回の受賞式には皇族が列席し、しかも受賞者には生涯年金までつくのである。テレビなどのマスコミでも大々的に取り上げられる。

　実は、白井は、日本学会賞を金で買ったのである。白井は審査委員長の大京大学名誉教授の橋本に、１０００万円ほど渡していた。最初は５００万円ほどであったが、橋本はその後も何かと要求してきた。
「現役の東都大学教授ならば、少々の金は融通がきくでしょう」
橋本は悪びれたところがない。六五歳で苦労を共にした妻と離婚し、二〇も年下の女性と結婚しただけのことはある。
　白井は、橋本の指示で、他の委員にも平均３００万円ほどを渡していた。そのための酒席を用意し、帰りぎわに、おみやげの袋と一緒に、現金の入った包みをしのびこませた。さりげなく渡すのが大事なようだ。
　驚いたことに、誰からも礼はされなかった。もちろん、返金しようなどという人間もいない。審査員になったら金をもらうのは当たり前と思っているのかもしれない。
　それにもかかわらず、白井は、橋本から
「この程度の現ナマでは、賞は確約できないよ」
　と言われていた。
　とんでもない話である。いくら白井でも、これだけの大金を裏金として準備するのは大変である。業者からのリベートや、補助金の付け替えなど、かなり苦労した。これには、河野がかなり貢献してくれていた。
　しかし、その労苦がようやく報われたのだ。橋本の話では、ワールドサイエンス誌に掲載された論文が決め手となったようだ。
橋本は
「いくら金を積んでも、業績がない人間に賞をやることはできんからな」
とうそぶいた。
白井は内心毒づいた。
「なにが業績だ。お前には自慢できる成果などないだろう」
　橋本が現役だったころ、何も業績がないのに、いろいろな賞を金で買ったことは研究者仲間では有名な話である。

　平田は驚いた。白井の受賞は、大学の名誉とされ、大々的な祝賀の式典も行うらし

いのだ。平田にも手伝いの依頼がくるかと思ったが、こんな名誉なことは、平田のようなポスドクにはまかせられないということのようだ。

板倉は

「どうだ。パーティー会場をのぞいてみないか。日本がいかに低レベルの国かということがわかるぞ」

と言っていたが、自分は実験で忙しい。白井に命じなれないならば、そんなパーティーに出るのはいやだ。

北東大学へ

それからまもなく、河野から平田のもとに連絡が入った。北東大学の助教授ポストが空いたから、公募しろというのだ。驚いたことに、あの長井が懲戒解雇されたのだという。いったい何があったのだろう。

平田は、すでに、かなりの論文をものにしていた。すべての論文は板倉との連名である。

板倉からは

「こんなことが白井にばれたら破滅だよ」

と忠告されていたが、実質的な指導者は板倉である。それに、平田は、板倉と連名で論文を書いていることが、たとえ白井にばれても良いと思っていた。自分は、研究者として堂々と胸をはって生きていける。そんな自信がわいていた。これもすべて板倉のおかげである。

幸い、白井は平田の研究内容には、まったくと言っていいほど、無関心であった。どうせ、大した研究はしていないだろうと思っているようだ。もともと、白井はポスドクを研究者とはみなしていない。研究室の雑用をこなす便利屋といった程度の認識であろう。河野の依頼で、しばらく置いてやっているという感覚しかないのだ。

平田にとって、幸運だったのは、そのおかげで、白井の裏金づくりの手伝いをしなくてすんだことだった。もし、不正に加担しろと命じられていたら、平田は、断固拒否したであろう。そうなると、白井の不興を買って、ポスドクの地位さえ奪われてしまうのは必至だ。

平田は、みごとに公募に合格した。業績が十分だと評価されたのである。面接の時、吉川は平田の仕事を絶賛してくれた。河野は、平田がいつのまに、こんなに論文を書

いたのかと驚いた。しかし、河野にとっては、自分の子分となる平田が大学に採用されることしか頭になかったので、平田がどのようにして業績を重ねたかなど、どうでも良いことだった。

平田は、故郷に凱旋した。これも、すべて板倉のおかげである。妻は大喜びであった。ようやく、普通の生活を取り戻すことができる。

大学に赴任して、しばらくすると平田は河野に呼ばれた。

「平田君、謝礼の相場は２００万円だよ」

平田は、はじめは、河野が何を言っているのか分からなかった。

「河野先生、その謝礼とは、いったい何に対する謝礼でしょうか？」

「決まっているじゃないか。君を助教授として採用してやった謝礼だよ。それに、白井先生にもお礼を包まなくてはならない」

平田はあきれた。

「そんな必要があるのですか？」

すると、河野はむっとしたように、何を言っているのかという顔をしている。

「大学のポストについたら、それを支持してくれた教授に、それくらいのお礼をするのは常識だろう。そんなことも分からないのか」

しかし、平田は、河野へ謝礼を渡すことを拒否した。

平田には自信があった。今回の公募は、正式に自分の業績が認められたもので、河野の力で受かったわけではない。いまは、自信を持って、そう言える。

すると河野は、

「なんと失礼なやつだ。社会の基本ルールを守れないような人間は、大学人ではない。こんな無礼が通ると思ったら大間違いだ。これで、君の将来はないと思え」

と毒づいた。

実は、河野はパチンコでふたたび多額の借金を抱えていた。そして、消費者金融にも手を出していたのだ。平田からの謝礼で、返済を計画していたのだが、それがだめになる。河野は必死だった。平田のことを見くびりすぎていたのだろうか。

平田は、河野からどんな仕打ちを受けようとも、金を渡すことはやめようと決意していた。もう、河野や白井のような人間と付き合っていてはいけない。平田は、そう決めていたのだ。

板倉の作戦

「長井先生、どうやら、板倉先生が行動を起こしたようです」

加治があわてて部屋にやってきた。いまやインターネットは、世界中で見ることができる。

長井と加治は驚いていた。板倉は、山下事件の真相をあばこうとしていた。山下教授は、板倉の師で、右翼によって刺殺されていた人物である。

山下はかつて日本に理想の研究所をつくりたいという文化省の招きで、海外から帰国した優秀な学者であった。しかし、この研究所設立用の予算を食い物にしようとしていた東郷や白井たちのわなにはまり、国の補助金を不正に流用したという汚名を着せられたのだ。山下は、逆に東郷らの不正を追及をするため、証拠を集めて、マスコミに発表しようとした。しかし、その直前に、右翼を名乗る暴漢に殺害されてしまったのである。

長井は、山下事件を覚えていた。山下教授のことも名前は知っていた。あれだけの人物が不正を冒すのはおかしいと思っていたが、マスコミなどの報道では、悪人のように扱われていて、とても気の毒に思っていた。あの事件の背後にも、白井がいたのである。

加治は、長井に日本のあるサイトを見せた。

「東都大学の悪党、東郷と白井の年貢の納め時」

というタイトルでスレッドが立ち上がっている。東郷というのは、東都大学の学長で、長井も名前は知っていた。眉の太い堂々した顔立ちで、テレビでも何度も見たことがある。サイトでは、東郷こそが黒幕と書かれている。

長井は驚きの気持ちでサイトを眺めた。

「東郷と白井が、自分たちの不正を隠すために、右翼に擬した債務破綻者を使って山下先生を殺害した証拠となる山下メモが偶然みつかった」

と書いてある。

「山下メモは、先生が住んでいたマンションの解体工事の際に、屋根裏から、解体業者が偶然発見した。

業者は、最初はごみかと思ったが、きれいな包装紙でていねいに包まれていたので大事なものと思い、管理人に渡した、山下先生の遺族のもとに届けられた。

そして、遺族から、山下先生を支援し、悪を糾弾しようという仲間のもとに、その書類は届けられたのである」

さらに、衝撃の事実も明らかにされていた。

「山下メモには、驚くべきことが書かれていた。山下先生を殺害した一味のボスが現民自党代議士で、外国大臣の平岩泰三であることがわかったのだ。
　しかも、メモには、平岩が東郷らと組んで、どのようにして不正に金を搾取したかが詳しく書かれている。まさに衝撃のメモであった」
このスレッドは、かなりのインパクトがあったのか、アクセス数がすでに二〇〇〇件以上になっている。
　それから数日して、長井のもとに日本からファックスが届いた。妻の由美子が送ってくれた週刊誌の記事であった。
「現役大臣の大罪」というタイトルになっている。週刊真実という雑誌で、スキャンダラスな記事も載せるが、その内容には定評があることで知られた雑誌であった。
　そこでは、現役大臣の平岩が、かつて、東都大学の研究所建設にからんで巨額の裏資金を得、その罪を糾弾しようとした大学教授を罠にはめて、社会的地位を貶めたうえで、抹殺したという内容となっている。
　そして、いまネットで話題の山下メモのコピーとして、一部、具体名は伏せられていたが、本物と同じものが掲載されている。なお、記事には、東都大学の現学長の東郷と、現工学部長の白井もその一味であると糾弾している。
　さらに週刊誌は、山下教授は世界的に有名な教授であり、日本という国は、日本の宝をその暗部に巣食う醜い連中によって葬り去ってしまったとも書いてある。
　妻の由美子は、夫の長井が白井の姦計によって、自殺寸前まで追い込まれたことを知っている。白井の悪事が次第にあばかれていくことを喜んでいるのだ。由美子の父も、ようやく悪党に神のさばきが下ると興奮しているという。
　長井は、この記事のコピーを加治に見せた。
「白井がひどい人間だとは知っていましたが、まさか、バックに、あの東郷学長がいたとは驚きです。なかなかの人物と思っていましたから、残念です」
　長井は思った。確かに加治の気持ちは複雑であろう。加治が入学したときに学長として挨拶をしたのが、東郷らしい。加治は、立派な祝辞で感激したと言っている。その後も、学長の東郷の堂々とした態度には、学生として誇りに思ったという。
　それから、数日して、日本からビデオが届いた。
　長井は加治といっしょに、その録画を見た。
「山下事件の右翼がテレビで真相を激白」
というタイトルが踊っている。山下殺害犯がテレビに映っていた。
「わたしは、掛下と申します。右翼でも何でもありません。当時は、下町で小さな機

械加工の工場を経営しておりました。しかし、不況で、受注が減り、資金繰りに困ってしまい、サラ金に手を出してしまったのです。

気がついたときには手遅れで、たった二百万円の借金が、いつのまにか五千万円まで膨らんでいました。借金取りが毎日のように押し寄せ、娘の学校にまで脅しに来るようになったのです。わたしは一家心中を考えていました。

そんな時です。ある仕事をすれば、借金をチャラにしたうえに、報酬までくれるという人物があらわれたのです。

しかし、その仕事を聞いて驚きました。人を殺せというものです。とても飲める話ではありません。わたしは、最初は断りました。ところが、娘がかわいくないのか、家族がどうなってもいいのかと脅されました。かなり悩みましたが、結局、引き受けることにしました。過去に前科がないから、刑期は短くて済む。それに、警察やマスコミも味方だから安心しろとも言われました。

決行の日は、ある薬を呑まされて興奮状態になっていました。そして、驚いたことに、刺したときの台詞まで用意されていたのです。

わたしは、右翼の活動家ということにされました。山下先生を刺した時の記憶はほとんどありません。興奮状態でしたし、薬が効いていたのだと思います。

本当に驚いたのは、警察がすばやく私を保護してくれたのと、マスコミが、わたしをヒーローみたいに扱ってくれたことです。おかげで、借金はチャラになったうえ、口止め料として一千万円の振込みもありました。

刑期も五年ほどですみました。すべて筋書き通りです。しかし、家族とは、うまくいきませんでした。

娘は、それとなく真相を嗅ぎ取っていたようで、私とは話もしてくれません。わたしが右翼の活動家でないことは、家族がいちばんよく知っています。その後、妻とは離婚しました。

私が本当に気の毒だったのは、亡くなられた山下先生のご家族です。マスコミからも叩かれ、犯罪人のようにじゃけんな扱いを受けたと聞いていました。

私は、山下先生に、何のうらみもありませんでした。只々、借金をチャラにしてもらいたい、その一心だったのです。」

レポーターは

「今日、テレビに出る決意をされたのはどうしてでしょうか」

と聞いた。

すると掛下は

「私は、口止め料として一千万円を受け取りました。その時、もし、このことを口外したら、わたしの命はないとも言われました。わたしだけでなく、家族にも危害が及ぶと言って脅されました。

しかし、家族とは別れ、わたしは独り身です。借金のためとはいえ、人をあやめてしまった。もう、命は惜しくありません。

ただし、当時、私は、この事件の裏に、国会議員、当時は官僚でしたが、平岩や、東郷、白井といった連中がからんでいるとはまったく知らされていませんでした。

ある記者から、取材を受けたときも、サラ金業者からの依頼としか思っていませんでした。今回の一連の報道で、真実がある程度分かった気がします。

そして、今日、テレビに出る決心がついたのは、その記者を通して、山下先生のかつての教え子という方の話を聞いたからです。

東都大学の助教授の板倉先生です。先生は、山下先生は日本が世界に誇れる数少ない研究者であったと言われました。

そして、先生が不良だったときに、山下先生と出会い、研究者の道を歩みだしたと。先生の話は感動的でした。それと同時に、わたしは、なんとひどいことをしてしまったのだろうと、とても後悔しました。日本の宝を葬りさってしまったのです」

長井と加治は、驚いた。板倉は、山下先生との出会いを掛下に話したのだ。しかも、自分の名前をテレビで出してもよいと言ったに違いない。当然、大学を辞める覚悟であろう。加治は、板倉には大学にとどまって欲しいと願っていた。

それから、掛下は、レポーターの質問に答えるかたちで、すべてを語った。レポーターは、その質問の合間に、それまでに明らかになっている東都大学を舞台にした裏金づくりの実態に関しても取り混ぜなからインタビューを続けた。

それを聞いた多くの視聴者は、山下事件が、平岩たちが自分たちの悪事を隠蔽するために犯した卑劣な犯罪であること、そして、山下こそが、高潔な研究者であったことを理解した。

そして、レポーターは

「明日は、もっと驚くべき人物が登場するのでご期待ください」

と番組の最後に語った。

加治と長井は

「その驚くべき人物はいったい誰だろうか？」

と思った。

つぎの日に、その番組を録画したビデオが長井のもとに届いた。

アカデミックハザード　－　長井の物語　１４

真打登場
「テレビサンの朝いちばん」
　という番組である。司会者が興奮の面持ちで、伝えている。
「本日は、番組の内容をすべて変更して、いま話題の山下メモの実物をみなさんにお見せします。そして、驚くべきひとが登場します。ご期待ください」
　長井は、本当に驚いた。あの自分を窮地から救ってくれた長谷川恵理が、封筒をかかえてテレビに登場したのだ。
「まちがいない。髪型がちがうので、印象は少し異なるが、長谷川さんだ」
　それにしても、あの長谷川が山下教授のお嬢さん山下えりだったとは驚きだ。名前を母方の姓の長谷川にしていたのは、白井たちに正体がばれないようにするためだったようだ。
　加治は
「山下先生のお嬢さんはすごい美人ですね」
　と言った。
　長井は、はじめて長谷川に声を掛けられた時のことを思い出した。
　長谷川は長井に
「驚かれたでしょうが、実は、私も白井に被害をうけたひとりなのです。長谷川恵理と申します」
と言った。
「白井の卑劣な手口はよく知っています。長井さんが白井にだまされて、研究成果を横取りされたことも知っています」
さらに長谷川はこう言った。
「実は、私と一緒に白井と戦っている先生がいます。その先生に会ってみませんか。何か活路が見い出せるかもしれません。あきらめるのは、まだ早いと思います」
　あの時は、事情がよく分からなかったが、いまようやく理解できた。長谷川は、長井が味わった苦汁よりも､はるかにひどい仕打ちを白井から受けていたのだ｡そして、長谷川は白井相手にひそかに闘っていたのだ。あの太い黒ぶちのメガネをかけていたのも、変装のためであったのだろう。
　山下えりは、すべて黒づくめの衣装に身を固めていた。それは、見るひとからは、えりが喪服に身を包んでいるようにも見えた。その顔はりりしく、スタジオに居る他

のゲスト出演者たちをも完全に圧倒していた。
「それでは、さっそく紹介させていただきます。こちらは、いま話題となっている山下先生のお嬢さんの山下えりさんです」
　スタジオに居るゲストは、一様に驚きの声を上げた。山下えりは、テレビでも話題になっていたが、その行方は杳として知れなかった。それがついに表舞台に登場したのだ。
　長井と加治は、板倉の作戦に関心した。山下メモを持って登場するのに、えりほどふさわしい存在はない。それが、まぎれもなく本物であるということを証明することにもなる。
　司会者は、えりが持ってきたものが、本物かどうかたずねた。
　えりは
「もちろん、これは、父が自分にあてた手紙とともに出てきた本物の山下メモです」と宣言した。
　そして、それが見つかった経緯を説明した。レストラン名は出さなかったが、父の知り合いが預かっていたもので、ネットで流されている解体業者が見つけたという話はまちがいであると指摘した。
　えりの登場は、大きな衝撃を与えた。えりが、父の死後、ひどい目に合い、ついには過労で母が死んでしまったことを語ると、多くのゲストが涙を流した。当時のマスコミがいかにひどいものであったかを糾弾するゲストもあった。
　ある新聞社の元編集委員は、政治家や官僚と癒着したマスコミがおかした犯罪であると断定した。自分がそのマスコミの一員であったにもかかわらずだ。
　そして、いよいよメモの本物が公開された。そこには、平岩たちが、いかに不正を働いたかが書かれている。テレビ局は、ごていねいにも、見やすいように大きなボードを用意して、金の流れが分かるようにしていた。視聴者は、いかに不正に裏金がつくられたかを、よく見てとることができた。
　司会者は、えりに、なぜ、警察や検察に、この資料を持ちこまなかったかを聞いた。
　えりは毅然と、こう応えた。
「警察も、検察も信頼できません。たとえ資料を持ち込んでも握りつぶされるだけだったでしょう。
　もちろん、マスコミも信用できません。父を犯人にしたてあげ、抹殺したのですから。ただ、一社、信頼できたのがテレビサンです。それは、上層部が、政治家や警察と癒着していないからです」

司会者は、えりの強い声に一瞬どきっとしたが
「そうですね。当社の経営者は若く、日本の闇の勢力との、しがらみがありません。ほかのテレビ局では、確実にもみ消されていたでしょう」
とちゃっかり、自分の局を持ち上げた。
ビデオには、その後の番組も録画されていた。えりは、テレビに出続けたようだ。ワイドショーにも登場し、父の潔白を主張した。
テレビ局も、山下がいかに高潔で、優れた研究者であったかということを、その業績とともに、海外の研究者のインタビューを交えながら紹介した。
テレビ局の記者は、警察や検察にもインタビューに訪れたが
「すでに決着した事件であり、犯人も刑期を終えている。あえて、再捜査する予定はない」
というコメントを出した。
記者は、平岩へのインタビューも試みたが、事務所の担当者は、本人の行方が不明として、いっさい応じなかった。
長井は、その後、インターネットで平岩泰三が外国大臣の職を辞したことを知った。もう政治家生命も終わりであろう。
加治は長井に聞いた。
「白井と東郷はどうなるのでしょうか」
「ワイドショー的には有罪だけど、すでに裁判で決着した事件だから、逮捕はされないのではないかな」
「残念ですね」
「それよりも、板倉先生がどうされるのか心配だね」
「板倉先生は大学に辞表を提出したようですが、もう、アメリカの大学に採用されることが決まっているようです」
「板倉先生ほどの逸材であれば、どこでもとってくれるだろうからね」
「それと、遅れてしまいましたが、長井先生、アソシエイト・プロフェッサーへの就任おめでとうございます」
長井は、オーランド大学から准教授への就任を打診され、承諾していた。長井は、板倉と吉野のふたりに感謝していた。自分は、あのふたりに救われた。
「今度、妻の由美子と娘の洋子を呼ぶことにしたよ」
長井はうれしそうに加治に話した。
「これからは、楽しくなりますね」

長井は、すでに家族が住む家を決めていた。日本では考えられないほどの大邸宅だ。長井は、由美子が目をまるくして驚く姿を思い浮かべ、思わず微笑んだ。

白井の失脚

加治は、吉野からのメールを読んで驚いた。白井が大学を辞めることになったという。

白井が所属する環境量子情報学科の事務長が内部告発をしたらしいのだ。白井が、いままで行ってきた不正の数々を証拠とともに、大学本部に告発したようだ。これまでならば、大学当局は難癖をつけて、白井が失脚することはなかっただろうが、いまの情勢では、それもできない。下手をすれば大学が非難される。

白井は大学に辞表を提出した。ただし、内部告発をしたという罪で事務長も罰せられることになった。吉野は憤慨していた。吉野は、大学を糾弾しようとしたが、事務長はそれを制し、潔く辞表を大学に提出したという。

吉野のメールには、加治に

「日本に帰ってきて欲しい」

と書いてあった。

加治は悩んだ。ここでの研究生活は快適である。しかし、学科の建て直しも必要であろう。種田のようなバカが助教授をしているようでは、先がない。それに、加治には思いを寄せる女性が学科の事務に居た。

いずれ、いつかは日本に帰りたい。加治はそう思った。

吉野のメールには佐々木さんのことも書いてあった。

「板倉先生から、加治君に知らせてほしいといわれていた」

そこには加治の知らないことが書かれていた。

「板倉先生が加治君に佐々木さんをあきらめろと言ったことがあると聞いた。実は、それには理由があった。佐々木さんは白井の隠し子ではないかという噂だ。

実は、板倉先生は同じ理由で、わたしにも佐々木さんをあきらめろと言ったことがある」

加治は驚いた。そんなことは信じられない。もし、そうだとしたら、自分は敵の娘に恋したことになる。

「しかし、安心してくれ、最近になって、そうではないことが分かった。佐々木さんは白井の子供ではなかった。それが分かって、板倉先生もわたしも喜んだ。きっと加

治君も同じ気持ちだろう」
加治もほっとした。
　長井に白井の失脚を伝えると、複雑な顔をした。確かに、白井の失脚は喜ばしいことである。しかし、悪いのは白井ひとりではない。種田や河野は、のうのうと生き延びている。
　加治は、長井の引越しの手伝いに行った。長井の妻の由美子は、女優のように可憐だった。長井は、娘の洋子の成長に驚いていた。いまでは、話す方も達者である。
　由美子は、あまりにも家が大きいのに驚いていた。大きな庭もついている。長井は由美子が大喜びするかと思ったが
「こんなに大きいと、家の掃除が大変ね」
などと言っている。洋子は犬を飼いたいと騒いでいる。というのも、日本の家では狭くて犬が飼えなかったからだ。由美子の実家では、コリー犬を飼っていた。洋子は、由美子の実家に行くと、一日犬と遊んでいるという。
　長井一家が落ち着いたら、由美子の両親がアメリカに来ると言っているらしい。由美子の父は、海外旅行を避けてきた。飛行機が苦手なのだ。しかし、孫の顔を見たくて、アメリカ行きをしぶしぶ承諾したという。由美子の母は大喜びだ。念願の海外旅行がかなうからだ。
　長井は、自分が自殺しようと考えた日のことを思い出した。あの日、長谷川に声をかけてもらわなければ、今の自分は無かった。そして、板倉と吉野との出会い。人生とは分からないものだ。しみじみそう思った。
　もうすぐ、板倉がアメリカに来るという。時間が空いたら、オーランド大学にも挨拶に来るといっている。長井にとって、板倉は命の恩人である。いくら感謝しても感謝しきれない。

訪問
　長井が実験室で装置の調整をしていると、バラチャンドランが入ってきた。
「シンゴ、日本からのお客さんだよ」
長井は、板倉がやってきたものとばかり思っていたが、そこには意外な人物が居た。
「もしかして平田さんですか？」
「長井先生、ご無沙汰しております」
平田はていねいに頭を下げた。長井は、平田の印象がかなり違っているのに気づいた。

あの面接の日に、長井に職をゆずって欲しいと言ってきた時の平田は、かなりくたびれた様子をしていた。今は、はつらつとしている。
平田が差し出した名刺を見て、長井は驚いた。そこには、北東大学助教授と書かれてある。
「平田さん、念願がかなって良かったですね」
平田は
「長井先生が懲戒解雇になった後のポストにつきました。複雑な気持ちです」
長井は、どうして平田が、そんなことを言うのだろうかと思った。
「長井先生は、河野や白井の罠にはめられ、退職することになったのですよね」
平田がどうして、そんなことを知っているのだろうか。
「いまでは、学長も反省しています。将来、大学を背負ってたつべき優秀な学者を辞めさせてしまったのですからね」
「河野はどうしたのですか？」
平田は驚くことを言った。
「警察に逮捕されました」
「逮捕！」
長井は思わず声をあげた。
「ええ、私が告発したのです」
長井は驚いた。確か、平田は、河野のおかげで博士号をとったはずである。その恩師を告発したとは穏やかではない。よほどの覚悟が必要であったろう。
　日本のような閉鎖社会では、へたをすると、平田の方が責められる。不正を働いた人間が守られ、不義理だという理由で、正義をつらぬきた告発者がなじられる。日本には、そんな不条理なことが多い。平田の告発は、まわりから、どう捉えられたのだろう。
　河野は、パチンコにはまって、消費者金融から多額の借金をしていたらしい。その金を平田からせしめようとしたが、それに失敗すると、無理に研究費を不正にくすねようとしたようだ。
「河野は、業者に偽の領収書をつくらせ、あたかも装置を購入したようなふりをして、自分の口座に金を振り込ませたのです」
　実は、河野から、何度も不正に加担するように依頼されて業者も困っていたようなのだ。そして、平田に相談したらしい。
　平田は、このままでは業者も同罪になると説得し、一緒になって河野を告発した。

「調べれば、河野が不正を働いたことはすぐに分かります。何しろ、購入した装置などないのですから」
　もちろん、この業者もただではすまなかったはずである。しかし、長い目でみれば、ここで不正の連鎖を食い止めたほうが、業者にとって、はるかに良かったはずだ。
「河野の不正は、つぎつぎと明るみに出ました。同じような手口で、過去に何度も金をごまかしていたのです。警察も悪質だと踏んだのでしょう。河野を逮捕したのです」
　河野の逮捕で、大学は大騒ぎになったという。現役教授のおかした犯罪ということで、新聞やテレビにも大きく報道されたらしい。
「後ろ楯の白井が元気であったならば、何とか穏便にすまされたのかもしれませんが、白井も失脚したあとでしたから、河野には何の力も無くなっていたのです」
　河野の事件をきっかけにして、過去の長井の懲戒解雇処分が間違いであったという執行部批判の声が強くなった。
「実は、武田君が長井先生の名誉を回復したいと言って、運動していたのです」
「武田君ですか？」
長井は、かつての教え子のことをなつかしく思い出した。
「武田君は、長井先生が懲戒解雇された後も、先生の名誉を回復するために必死でした。種田と河野がたくらんで、長井先生と武田君がやっていた研究を横取りしたということを訴え続けていたのです」
そうか、武田は、そんなことをしていたのか。
「最初は、武田君の訴えに耳を傾けるひとは、ほとんどいませんでした。ただひとり、吉川先生だけが、支援してくれていたようです。しかし、次第に種田たちの形勢が不利になっていきました。なにしろ、あの論文のあとに、まったく成果が出てこないのです。誰でも変に思います。
　それに、種田も、実験をするたびに装置を壊すものですから、学生たちからも苦情が出るようになったのです。そして、あんな不器用な人間に、あの論文のような立派な結果を出すことはできないと周りが悟っていったのです」
　長井は反省した。自分のことばかり考えていたが、大学院生の武田も大変な苦労をしたはずである。
「いま、武田君はどうしていますか？」
「はい、吉川先生のもとで博士号をとり、今では、私の研究室で助手をしてくれています」
「そうですか。それは良かった」

これ以上、種田の不始末が続くと、自分たちの形勢が不利になると河野は恐れたらしい。

白井に頼んで、北東大学のポスドクを辞めさせ、種田を東都大学にポスドクとして戻したのだ。将来は助教授として採用すると言い含めたらしい。東都大学に戻った種田は、加治の結晶成長の再現実験にとりかかった。もちろん、成功するはずはない。

長井は思った。それにしても、平田は変わった。本当に落ち着いたというか、風格さえ備わっている。

「わたしは、あるひとと出会って、研究をする喜びを教えられました。研究者としての手ほどきも受けました。東都大学の板倉先生です」

平田は、東都大学のポスドクとして務めていた時に、白井に内緒で板倉の指導を受けていた事を話した。思えば、あの出会いが平田を大きく変えたことになる。

「板倉先生ですか。わたしも、あの先生のおかげで、窮地を脱することができました」

長井はなつかしくなった。

実は、国際会議でアメリカに来たついでに、平田は板倉のもとに表敬訪問してきたらしい。

「板倉先生から、長井先生がオーランド大学に居られるということを教えていただきました。それを聞いて、どうしても長井先生にもお会いしたいと思ったのです」

「そうですか。板倉先生のところには、いずれ私もお礼を兼ねて、挨拶に伺いたいと思っておりました」

「長井先生、先生の名誉は完全に回復しました。教授会での正式な決定です。あとで、正式な通知が来ると思います。学長の詫び状も入っています」

平田は、長井が北東大学に再び戻ってきてくれることを願っているといってくれた。

「それでは、わたしは、そろそろおいとまします。先生もぜひ、アメリカで頑張ってください」

「平田先生、あなたも頑張ってください」

長井は、そう激励した。

最後に平田は思い出すようにこう言った。

「そういえば、長井先生をだましたもうひとりの種田ですが、東都大学をクビになったそうです」

確か、種田はポスドクから助教授に昇進したと聞いていた。

助教授になった種田は、白井の命令で、研究費や学生のアルバイト費をごまかしていたらしい。白井が学科の事務長から、内部告発を受けたときに、大学の事務が不正

を発見したのだ。
「なんと種田は、白井のためだけではなく、自分の懐にも金をいれていたようです」
　長井は思った。これで敵討ちができたのだろうか。しかし、日本の大学には、白井たちのような連中がうようよしている。
もう一度、長井は平田に声をかけた。
「平田先生、日本のために頑張ってください」

アカデミックハザード　－　長井の物語　１４

再会

長井と加治は、朝から落ち着かなかった。今日は、オーランド大学において、プロフェッサー・イタクラの講演会がある。久しぶりの再会であった。板倉は、ふたりにとって命の恩人であるだけではない。白井という巨大な悪に立ち向かって、それを退治してくれたヒーローである。

板倉は､白井一派と戦っている自分はドンキホーテのようなものだといっていたが、そんなことはない。立派に相手を倒した。最近、吉野からのメールで、東郷が学長選で惨敗したことを知らされていた。新学長は、旧執行部の不正はすべて明らかにすると宣言している。東郷から、大学の会計を任されていた事務局長が会計帳簿を持って失踪したらしい。いずれ、司直の手が伸びるであろう。

長井と加治は、加治のヒュンダイに乗って、オーランド空港まで板倉を迎えに行った。ゲートから出てきた板倉は以前と変わらなかった。ちょっと日焼けしたのか、ますます仁王様に似てきている。

加治は、車が小さいことを板倉に詫びた。板倉は、大きいからだをかがめるようにして助手席に収まった。

長井はあらためて挨拶した。

「板倉先生、お久しぶりです。ようこそ、オーランドへいらして下さいました。先生には感謝しても感謝しきれません」

「こちらこそ挨拶が遅れました。長井先生は、オーランド大学の准教授に就任したんですよね。おめでとうございます。先生ほどの実力があれば、当然、そうなるだろうと思っていました」

「おそれいります。これも、すべて板倉先生のおかげです」

「そういえば、加治君は東都大学に戻ることが決まったんだってね。おめでとう」

加治は

「博士号を持っていないわたしをいきなり専任講師にすると言ってくれたのです。ありがたい話です」

実は、アメリカには論文博士という制度がない。日本では、大学の博士課程に入学しなくとも、論文発表などで業績を挙げている場合には、博士論文にまとめれば、博士号が授与される。

しかし、アメリカには、この制度がない。加治は、白井に睨まれていたため、日本で博士号をとれなかった。そして、そのままアメリカへと渡ったのである。ワールドサイエンス誌など、世界的に有名なジャーナルへ多数投稿しているが、いまだに博士号をとっていない。吉野は、日本に戻れば、すぐに博士号を取得できると言ってくれた。

実は、加治の人事に関しては、東都大学内部でも、かなりもめたらしい。しかし、事情が事情であるだけに、学科主任の山根教授の説得で多くの教員が賛成してくれたのだ。山根は、板倉の同期で、いまは学科の改革に取り組んでいる。

助教授の種田は、最後まで強固に反対したらしい。しかし、吉野が、学科に所属している教員の業績表一覧をつくって、人事会議の場で回覧した。そして、加治の業績も一緒に示した。学科の多くの教員よりも、加治の業績の方がはるかにすぐれているのは一目瞭然だった。

山根は、

「この業績では、東都大学の助教授として恥ずかしすぎる。もっと、研究に励んで、成果を出すようにしなさい。」

と逆に種田を叱責したという。当たり前だ。いくら博士号も持っているといばってみても、現在の業績がないのではしかたがない。それに、種田の場合、弟の不祥事で、大学内での立場が難しくなっている。

東郷が学長を辞めてから、ようやく、東都大学でも教員評価制度の導入が始まり出した。業績のない人間には、退職勧告も辞さないことになっている。白井一派には、住みにくい世界となりつつある。

長井は、加治にはずっとそばに居て欲しかった。加治は研究者としても優秀であるが、人間としても素晴らしいものを持っている。長井のこれからの研究生活を考えると、ぜひ一緒に共同で研究を進めたい相手であったのだ。すると板倉は、加治をからかうように

「恋の力は、やはり大きかったようだな」

と言った。

「何を言っているんですか、板倉先生は」

加治は、恥ずかしそうにしている。

佐々木祥子さんのことを言っているのだ。加治は、佐々木さんに自分の気持ちを打ち明けてはいないが、板倉に一度だけ相談したことがある。

当時、佐々木さんが白井の隠し子ではないかという噂があって、板倉は、加治に佐々

木さんを諦めるように諭した。吉野のメールには、そう書いてあった。
　しかし、その噂がうそであることが分かり、板倉の考えも変わったようだ。
　加治と佐々木さんならお似合いである。
板倉は
「佐々木さんには、俺から加治君のことをよく言っておいた。加治君の気持ちもそれとなく伝えたよ。向こうもまんざらでもなさそうだったよ」
と言った。
「えっ！そんなことを言ったのですか」
　実は、佐々木さんのお父さんは、白井の不正を内部告発した事務長の末永であることが分かった。ある事情で、親子の苗字が違っているが、今では、本当の親子として一緒に暮らしているという。
　加治は、事務室でやさしそうに微笑んでいる末永のことを思い出していた。確かに、そういわれれば、佐々木さんは末永さんによく似ている。
　そして、思った。末永さんが義理の父なら安心だと。
「末永さんは、娘をアメリカには嫁がせたくないと言っていたが、加治君が日本に帰ってきたら問題ないだろう。頑張れよ」
　そう言って、板倉は、加治の肩をたたいた。加治はどう返答したらいいか、とまどっている。
　佐々木さんの気持ちを確かめたわけではない。しかし、当たってくだけろという気持ちになっていた。
「それと、日本に帰ったら山根と吉野を支援してやってくれ。相当、苦労しているようだ。いまだに、学科の教員には白井の子分の数の方が多い」
　吉野は、加治に
「ぜひ日本に帰ってきてくれ」
と何度も電子メールで連絡してきていた。加治が帰国を決意したのは、吉野の積極的な誘いもあったが、佐々木さんのことが心のどこかに引っかかっていたことも確かである。
　板倉の講演は、大学の大講堂で行われた。いま、最も活躍している研究者のひとりということで、講堂は満員となった。
講演のタイトルは
「マクロとミクロの接点-統計力学の新手法」
であった。

長井は板倉の講演に感動した。自分の専門外の分野であるが、板倉の話は分かりやすい。ミクロの世界では、量子力学という学問で説明される。しかし、われわれが普段経験する世界は、ミクロ粒子が莫大な数が集まったマクロの系である。いままでは、これらふたつの世界は別々に扱うということでなんとか逃げてきた。板倉の研究は、この問題に正面から取り組もうという意欲的なものである

また、その内容もさることながら、流暢な英語はネイティブと変わらない。デイビッドなどは

「われわれよりも英語がうまい」

と半分冗談のようなことを真顔で話している。確かに、板倉の声は大きく、発音もクリアであるから、聞きやすい。

「自分もいつかは、板倉先生のように満員の聴衆を前に堂々と講演できるような研究者になりたい」

長井はそう思った。

歓待

長井は、妻の由美子と娘の洋子を車に載せてオーランド空港に向かった。洋子は朝から興奮している。久しぶりにおじいちゃんとおばあちゃんに会えるからだ。

ついに棚橋の父が飛行機にのることを覚悟したらしい。どうしても孫の洋子に会いたいという気持ちが、今回の旅行を決意させたという。

由美子の母の念願の海外旅行の夢がかなったのだ。到着予定時間の三〇分前にロビーについた。日本からの直行便はないので、ロスで乗り換えなければならない。

洋子は、

「おじいちゃんたちが迷子にならないようにロスまで行く」

と騒いだが、由美子は

「大人なんだから大丈夫よ」

と言って相手にしない。

電光掲示板に、ロスからの便が時間どおりに到着したという表示がでた。長井は思い出した。思えば、二年前に自分も不安をいだきながら、ここの空港に舞い降りた。あの時は、加治が迎えにきてくれたのであった。どんなに心強かったことか。

加治からは、日本でがんばっているというメールが届いた。すでに博士号を取得し、東都大学の助教授に昇進したということである。それから、佐々木祥子さんとのデー

トの約束もとりつけたと書いてあった。
「加治君もなかなかやるじゃないか」
長井は思わずほおが緩んだ。
　長井のもとには、もう一つうれしいニュースが届いていた。いまは北東大学の助手をつとめている武田が、文化省から予算を得て、海外で一年間研修する機会を得たのだ。
メールでは
「可能であれば、ぜひ、長井先生のもとで研究をしたいです」
と書いてあった。もちろん、長井に異存はない。武田が優秀なことは、長井がいちばんよく知っている。白井の姦計にはまり、ふたりは別の道を歩むことになったが、機会があれば、もう一度武田と一緒に研究したいと考えていた。
　そのとき、ゲートが開いて、乗客がどっと降りてきた。洋子は、身を乗り出して探している。
「あっ、おじいちゃんたちよ」
向こうも気づいたようで、手をふっている。由美子もうれしそうだ。
長井はふたりからスーツケースを受け取り
「お義父さん、お義母さん、オーランドへよくおいでいただきました」
と歓迎した。洋子は、すでにおばあちゃんにまとわりついて離れない。棚橋の父も、久しぶりの洋子の頭をなでて
「しばらくみないうちに、すっかり大きくなったな」
と感無量のようだ。
　由美子の両親は、長井の住んでいる家をみて、本当に驚いた様子ようだ。庭だけでも二〇〇坪はあろうか。屋敷も日本では考えられないくらい広く、部屋の数も一〇以上ある。
　長井は一階の客間を両親のためにあてることにした。底の深いバスもあるので、日本の風呂のように湯船につかることもできる。
　最近、飼ったコリー犬が、声をあげた。
「ほら、タローのごはんの時間よ」
と由美子は洋子に言っている。洋子は、自分がちゃんと世話をするから犬を飼いたいとせがんだのだ。
「おじいちゃんとおばあちゃんがアメリカに来たら、タローと一緒に散歩をしたい」
とずっと騒いでいた。

長旅の疲れをいやしてもらうため、長井はふたりに部屋でゆっくり憩んでもらうことにした。ふと、気づくと洋子がいない。由美子がふたりの部屋をのぞくと、三人で川の字になって寝ている。
「久しぶりだから、今日ぐらいおおめにみるか」
と長井は洋子に言った。
しかし、長井はほっとしていた。棚橋の両親には、ずいぶんと心配をかけた。長井が大学をクビになった時は、ずいぶん失望しただろうと思ったが、棚橋の父は、由美子から事情を聞き、逆に元気になったという。
「白井と河野というやつらはわしが許さん」
といきまいていたらしい。
後で聞かされたことであるが、何度も学長のところにいっては苦情を言ったらしい。「うちの婿を見れば分かるだろう。あいつは、悪いことのできるやつではない。純粋な研究者だ。お前には人を見る目がないのか。そんなやつは、即刻、大学をやめろ」と。実は、長井は北東大学学長の岡谷から直筆の手紙をもらっていた。

岡谷学長の手紙

長井先生、先生のご活躍はいろいろな方からお聞きしています。心よりお喜び申し上げます。
私は、この三月をもって北東大学を退官いたしました。学長の任期は、あと一年残っておりましたが、ここが潮時と考えました。かたちのうえでは、河野逮捕の責任をとった引責辞任となっていますが、私が辞めようと決意した本当の理由は、長井先生のことがあったからです。
先生に、いまさら許してくれとは申しません。しかし、わたしの二期五年の学長生活の中で、もっとも後悔しているのは長井先生を守れなかったことです。
いまは、地方の国立大学にとっては厳しい冬の時代です。文化省が打ち出したトップ三〇の大学を世界レベルの大学に育てるという大方針は、われわれに大打撃を与えました。
日本の大学を世界レベルに押し上げるという考え方。これは、けっして間違ってはおりません。私も一〇年間をアメリカの大学で過ごしましたので、日本の大学のレベルがいかにひどいかということは知っております。
しかし、この政策は、それ以外の大学を切り捨てるというものでした。北東大学は、

幸いにしてトップ三〇に入る可能性があります。その点、チャンスのまったくない大学に比べれば、まだまだ恵まれているといえるかもしれません。

実は、改革を進めるためには、なによりも大学教員ひとりひとりの意識改革が必要となるのです。政府の改革案には、いつも、この視点が欠けております。いや、知っていても無視しているという表現の方が正しいかもしれません。組織や制度をいじっても何も変わりません。そこに働く人たち一人一人の自己改革こそが重要となるのです。

この点を放置したまま、予算だけを集中させることには大きな弊害があります。いまのように、一部の権力者に悪用されるだけです。

そして、残念ながら、いまの大学教員には、レベルの低い人間しかいません。これは、少し考えれば当たり前のことかもしれません。彼らの多くが採用されたのは、コネや上司へのごますりであって、真の実力が認められたからではないからです。

いまでこそ、公募制という制度が導入され、教員の業績などが評価されるようになりました。しかし、先生もご存知のように、この制度もその体をなしていないのが実体です。いまだに、コネがはびこり、どうしようもない連中が大学に採用されています。

私は、学長に就任した直後から、北東大学に真の公募制を根付かせようと努力しました。当然のこと、最初は、かなりの抵抗にあいました。大学人事で小金をせしめようとたくらんでいる人間たちからは、私の改革は言語道断の所業と映ったのでしょう。

しかし、北東大学にも吉川先生のように、わたしの改革を支持してくれる教員も何人か居ました。そして、徐々にではありますが、改革が進みだしたのです。

当時の私の悲願は、公募制でいい人材を確保するということでした。公募で採用した人間が問題を起こせば、すぐに反対派から逆襲されてしまいます。私がうれしかったのは、長井先生が公募で採用されたことです。これには、吉川先生の努力もありました。

そして、長井先生には期待以上の活躍をしていただきました。国の大型プロジェクトも獲得してくれました。北東大学の代表者は、河野でしたが、彼にそんな実力がないことは明らかでした。

実は、河野は白井のひきで、国の大型予算を大学にもたらしてくれてはいましたが、常に良からぬ噂があったのです。それに、業績らしき業績がありません。長井先生も分かっていると思いますが、国の予算は、垂れ流しです。事後評価などかたちばかりで、論文を一報もかけないような人間が、つぎからつぎへと大型予算を獲得している

のです。

しかし、文化省に大きな影響力を持っている白井の存在は無視できません。さらに、大学評価の基準のひとつに、外部予算をどれだけ獲得したかという項目があります。週刊誌なども、こぞって外部予算の獲得額で大学のランキングづけをしています。愚かなことです。より少ない予算で、より大きな成果を出すことのほうがはるかに大切なはずです。この常識が通らないのが、いまの日本なのです。

とは言え、学長として、いかに外部予算を獲得するかということも非常に重要な使命でした。その点、恥ずかしながら、河野の存在は、大学としてはありがたいという側面もあったのです。

長井先生が河野と共同研究をしていただけると聞いたときには、本当に喜びました。長井先生の影響で、河野も変わるかもしれない。そう期待したのです。せっかく、多額の予算をもらっても、彼には、いい成果など望めません。

そして、うれしいことに、長井先生は期待どおりの働きをしてくれました。白井からの予算も増額され、これで北東大学もよくなると喜んでいた時でした。文化省の高等教育局長の志村から電話がかかってきたのです。

その内容は驚くべきものでした。長井先生が、文化省にどなりこんだというのです。しかも、その抗議内容が根も葉もないたわ事だというのです。私はおおいに失望しました。河野と長井先生はうまくいっているように見えていましたし、なにより、白井は長井先生を高く評価し、予算の増額も約束してくれていたからです。

志村局長は、厳重な処分をするように私に依頼しました。いまにして思えば、もっと冷静に考えるべきだったと残念でなりません。しかし、当時の私には、長井先生に裏切られたという気持ちしかありませんでした。なぜ、もっと別の方法をとってくれなかったのだろうか。なにより、文化省に出向く前に、なぜ学長の私にひとこと相談してくれなかったのだろうか。そのことが悔しかったのです。

地方大学にとって、文化省の機嫌をそこなうということは自殺行為に等しいのです。もちろん、役所の人間に非があることが多いのも事実です。しかし、彼らは金と権力を握っています。われわれの生命線を握っているのです。

それに、その時は、まさか、白井と河野が、あれだけひどいことを長井先生にしているとは思いもよりませんでした。

文化省の手前もありますので、そのまま無罪放免とはいきません。私としては、一週間程度の謹慎処分で済ますつもりでいました。そして、白井に許しを請うために、東京まで出かけようと考えていたのです。この件には何か裏がある。そう思っていま

した。というのも、白井のプロジェクトでは、長井先生が金の卵です。彼が、それを簡単に手放すとは思っていませんでした。

ところが、河野の動きが予想以上に早かったのです。学会発表の概要や、論文が証拠書類として教授会に提出されるとは思っていませんでした。

その時、私は、問題となっている論文を読んでみました。そして、すぐに理解しました。あれは、長井先生の仕事です。河野に、あんな仕事はできません。

教授会で、長井先生を懲戒解雇するという動議が決議されたときには、本当に困りました。学長権限で、それを撤回することも考えました。しかし、残念ながら、それを覆すだけの証拠がありません。断腸の思いで、書類にサインしました。

私は、長井先生の名誉を回復できる方法がないかを模索しました。吉川先生や、大学院生の武田君からも、直訴がありました。もっとも強硬だったのは、あなたのお義父さんの棚橋さんです。

「お前の目は節穴か」

と、何度もしかられました。

長井先生に非がないことは、私にも分かっていました。しかし、どうしようもなかったのです。自分の非力がつくづく嫌になりました。

学長といえば聞こえはいいですが、一地方大学では、何の権限もありませんし、文化省に見向きもされません。予算を減らすと恫喝されれば、無理難題も飲むしかないのです。

長井先生の辞職後、河野は白井の権力を背景に、ますまず増長しました。公募制を形骸化しようという連中も復活しました。北東大学は、昔にもどろうとしていたのです。業績のほとんどない白井の子分の採用も認めざるをえませんでした。ミニ河野の増殖です。

しかし、悪いことだけではありませんでした。平田先生が大学に赴任してくれたのです。最初は、白井の子分とばかり思っていましたが、吉川先生からそうではないことを聞かされたのです。

平田先生は、河野や白井たちが、どんな手口で裏金をつくっているかということを知っていました。そして、東都大学の板倉先生と吉野先生が、白井と闘っていることを私に教えてくれました。そういえば、長井先生は、このおふたりに救われたのですね。平田先生も、板倉先生のおかげで、研究者として目覚めたと言っていました。

板倉先生は、北東大学の出身で、吉川先生と同期と聞きました。本学からも世界的に有名な研究者が育っていたのです。感慨深いものがありました。また、なにかの因

縁を感じました。

その後、河野の不正行為が平田先生らの告訴で白日のもとにさらされた件は、長井先生もご存知と思います。実は、私も平田先生の行動を支援していたのです。

もちろん、現役教授の不祥事は大学にとっては大きなマイナスです。文化省からも睨まれるでしょう。ですから、大学としてはできれば隠しておきたいという意見もあったのです。しかし、どこかで悪の元を断ち切らなければ、大学は再生しません。

私は、学長としての責任を明確にしたうえで、平田先生の支援をしました。警察にも重い刑罰を課すように訴えました。警察は、搾取した金額を返還すれば、逮捕まではしないと言っていましたが、私は、それでは困ると幹部を説得したのです。

白井が元気であったならば、この件ももみ消されていたかもしれません。しかし、板倉先生たちの活躍で、白井も失脚しました。

ミニ河野たちは、いまでも北東大学に残っていますが、いずれ一掃されるでしょう。そのための布石として、私は、教員業績評価制度を導入しました。多くの教員からは猛反対に会いましたが、学長の権限を使って、認めさせました。

この制度では、すべての大学教員の業績を公開することになっています。そして、ある一定基準に達していない教員には辞職勧告を出すという厳しい条件もつけました。すでに、最初の評価を行ったのですが、驚くことに、過去一〇年に、一報も論文を書いていない教授がやまのようにいるのです。

北東大学は、ようやく変革の方向に進みだしました。その道筋をつけたことで、私の仕事も一段落ついたところです。

ただし、いまでも心残りは、長井先生という、本学の宝を辞職に追い込んでしまったことです。このことだけは悔やんでも悔やみきれません。

先日の教授会で、私はすべてを告白しました。そして、長井先生の名誉はすべて回復しました。教授会で、正式に先生の懲戒解雇処分が間違いであったことを決議したのです。そのうえで、学長名で、全学生と教員に対して、真相を明らかにする報告書を出しました。

いま私は、先生をわなにかけた文化省の課長補佐の山岸と、局長の志村のことを糾弾すべく行動を起こしています。

文化省は、ふたりのことをかばっているようですが、いずれ真実は明らかにできるでしょう。それが、もうひとつの私の使命です。

それと、これは私が言うべきことではないかもしれませんが、長井先生、いつか必ず北東大学に帰ってきてください。

エピローグ

長井は、岡谷の手紙を読み終えて、自分の行動がいかに軽率であったかを反省した。学長から叱責をうけて、その理不尽さに腹を立てたものであるが、あらためて、岡谷学長の立場を考えれば、あの時の対応は、当然であったろうと思う。

文化省に行く前に、学長にひとこと相談していれば、ここまで話はこじれなかったかもしれない。また、人生経験の豊富な岡谷や吉川に相談していれば、あんな風に文化省の役人にだまされることもなかったろう。

さらに、長井は、学長主導で、自分の懲戒解雇が進められたと誤解していたが、実は、そうではなかったのだ。岡谷のことを、長井はうらんできたが、それは大きな誤解であった。岡谷に迷惑をかけたのは、この自分の方である。

長井は、一度は自暴自棄になり、自殺まで考えたが、自分を支援してくれるひとたちの助けで再生することができた。そのおかげでいまの自分がある。日本という国も捨てたものではない。

いま、長井は武田の到着を楽しみに待っている。また、ふたりで研究ができるのだ。何年ぶりだろうか。

そして、ふと思った。いつか、北東大学に戻るのもいいかもしれない。洋子も、大好きなおじいちゃんとおばあちゃんのもとで暮らせる。